

博 士 論 文

異者の語りの二声構造

— 魯迅が漱石から学んだもの —

2008年3月

龍谷大学大学院 国際文化研究科

博士課程 国際文化学専攻

W05D502 于 麗

異者の語りの二声構造

—— 魯迅が漱石から学んだもの ——

于 麗

龍谷大学大学院

国際文化学研究科・国際文化学専攻

二〇〇七年十一月

要 旨

本論文は魯迅文学における漱石受容を考察する研究である。この主題をめぐっては、すでに多くの研究が重ねられてきたが、その多くは作品そのものというよりは、そこに表現された思想内容を論じたもので、表現の方法、すなわち、小説の構造や手法といった側面に立ち入っての詳細な分析はほとんど未開拓の状態である。本研究はそうした側面に十分な光を当てることで、魯迅が漱石から学んだものを総合的に明らかにしてゆくことを目的とする。

魯迅の作品として取り上げるのは、その方法的な斬新さゆえに中国近代文学の生誕を告げたとされるデビュー作『狂人日記』と発表当初から大きな反響を巻き起こした問題作『阿Q正伝』である。それは、この二作は有名であるばかりではなく、互いに似た構造をもっていると考えられるからである。つまり、『狂人日記』の主人公兼語り手である「おれ」はまさに「狂人」とされており、『阿Q正伝』の阿Qも甚だしく無知で性格的欠陥だらけの愚者であり、いずれも一般中国人の社会からは侮蔑の目で見られ、疎外されている人物である。すなわち、一般中国人という共同体の外部にはみ出した存在だといってよいのだが、逆にいえば、そうであるがゆえにこそ、その共同体において当然とされていることの不合理性や愚かしさを彼らは照らし出すことになる。

彼らのように周囲の人々と異なるという点に重要性をもち、その異質性によって既成の社会を逆照射して見せるような存在を、本論文では「異者」と呼び、この意味での「異者」をあえて語り手や主人公に設定したところに魯迅の方法的な新しさを見てゆく。すなわちこの二作はともに当時の中国の社会と国民性の悪弊を暴露しているのだが、それを可能にしたのが彼らのようなく異者」の目を通して語るというこの特異な方法だったのである。

このようにして「異者」の視点で語られる物語は、その当然の帰結として、笑いと呼び起こしながら進展するが、苦笑しながら読み進む読者は、やがて、そのようなく異者の語り」のうちに微妙な二元性を感知するかもしれない。つまり、「狂人」とされる「おれ」の語りで進展する『狂人日記』では、読者は精神病らしい混乱した思考のあとを読みながら、やがて、その背後にきわめて理性的な作者の声をも聞き取ることになる。『阿Q正伝』では主人公の阿Qが語り手となることはないものの、やはり同様の構造を読者は感知することになる。このような意味での二元性を本稿では「語りの二声構造」と呼び、この技法について分析を加えてゆく。

小説のこのような構成方法は魯迅が独自に考案したものなのであろうか。それとも外国文学から学び取ったものなのであろうか。魯迅に影響を与えた外国人作家としては、これまでロシアのゴーゴリ、アンドレーエフ、ポーランドのシェンキエヴィッチ、ドイツのニーチェ、そして日本の夏目漱石や白樺派などが指摘されてきたが、小説のこのような特異な構造について考えるかぎり、影響関係の考えられる作家は漱石である。とりわけ魯迅の愛読書であった『吾輩は猫である』の語り手である「吾輩」

と称する猫は、本論の先ほど定義したく異者＞以外の何者でもない。その作品世界には魯迅の『狂人日記』と『阿Q正伝』に見られるものに似た二声構造がたしかに感知される。そこで、この三作の比較的分析を通して、魯迅が漱石から学んだ可能性のある方法について考えてゆく。

まず、第一部では、『狂人日記』の主人公兼語り手、すなわち「精神異常者」とされている「おれ」の語りの異常性を論理、認識、記憶内容の歪曲、被害妄想、連想、幻覚の各側面にわたって詳細に分析し、そのようなく異者＞の語りに重ね合わせて作者の声をも伝えてゆく手法、すなわちく異者の語りの二声構造＞を摘出する。

第二部では、これを受けて、『吾輩は猫である』における非人間の語り手、「吾輩」の語りとその作者との関係に『狂人日記』の場合に酷似したく二声構造＞があること発見する。その上で、魯迅が愛読したとされる『吾輩は猫である』が『狂人日記』に与えた影響の可能性に論及する。

第三部で取り上げた『阿Q正伝』の主人公阿Qは、周囲に軽蔑され、疎外されるく異者＞ではあっても、語り手ではないという点で上記二作の場合と異なる。が、作品の後半では徐々に語り手が主人公に接近し、ついには両者が一体となった語りに到達することで、やや変則的なく異者の語りの二声構造＞を成立させていると見ることができる。そこで、その語りにおける「精神勝利法」の論理、自尊心、都合のよい忘却、権力主義、無知など「おれ」と「吾輩」の語りに通ずる特質を摘出した上で、やはりそこに作者の声が重ねられていることを見出してゆく。すなわち、阿Qの心理に入り込んだ語りに聞き取られる作者の声が、権力迎合的で傍観者的な世人への痛烈な批判となっていることは、『狂人日記』の「おれ」の語りの場合と同じなのである。

以上のような分析の結果から推測されるのは、魯迅が『狂人日記』で完成させたく異者の語りの二声構造＞という小説作法を『阿Q正伝』にも、かなりの変形を加えた上で持ち込んだことである。さらに、このく二声構造＞がもともと『吾輩は猫である』から学び取った手法であったのだとすれば、『吾輩は猫である』の影響力は『阿Q正伝』にも及んでいるという認識も可能となるわけである。

目 次

序 論	1
第一部 『狂人日記』の語りの構造	5
第一章 <異者>としての「おれ」	7
第一節 論理	7
第二節 認識	8
第三節 記憶内容の歪曲	11
第四節 被害妄想	13
第五節 連想	15
第六節 幻覚	17
第七節 結び	18
第二章 「おれ」の語りの<二声構造>	20
第一節 権力に迎合する「やつら」	20
第二節 伝統社会の有力者たち	21
第三節 「おれ」の自己批判	23
第四節 絶望と希望	24
第五節 二つの次元	25
第二部 『吾輩は猫である』の語りの構造	28
第一章 <異者>としての「吾輩」	29
第一節 「吾輩」の尊大さ	29
第二節 論理のねじ曲げ	33
第三節 認識の歪み	36
第四節 「吾輩」の「精神勝利法」	39
第五節 結び	40
第二章 「吾輩」の語りの<二声構造>	42
第一節 「吾輩」の苦沙弥らの批判的意識	43
第二節 実業家階級への反感	45
第三節 実業家階級に迎合する世人への風刺	48

第四節 「吾輩」の苦沙弥らへの同化	50
第五節 世間風刺	52
第六節 「社会はみんな気狂の集合」	54
第三部『阿Q正伝』の語りの構造	57
第一章 <異者>としての阿Q	59
第一節 「精神勝利法」の論理	60
第二節 阿Qの「自尊心」	64
第三節 忘却	65
第四節 権力主義	67
第五節 無知	69
第二章 『阿Q正伝』の<二声構造>的語り	72
第一節 有力者への皮肉	74
第二節 村人などの傍観者への反感	77
第三節 「反語」的な語り	81
第四節 語り手の阿Qへの同化	83
結論	86
参考文献	87

異者の語りの二声構造 —— 魯迅が漱石から学んだもの ——

序 論

近代中国の文学者のうち、魯迅 (Lu Xun。本名周樹人、1881～1936) の名声は一頭地を抜いているといっても過言ではないだろう。この地位の高さにはもちろん政治的な要因もからんでおり、その死の一年後になされた毛沢東による魯迅「聖人化」——魯迅逝世一周年記念集会における「魯迅在中国的价值，据我看要算是中国的第一等圣人(中国における魯迅の価値は、私の考えでは、中国の第一の聖人と見なさなければならない)」という発言——に始まる中国共産党による正典化 (canonization) を考えなくてはならないのだが、そのような側面を差し引いても魯迅の作品はやはりすぐれたものであり、今なお古びない「価値」を有していると思われる。

たとえばさきの魯迅称讃の講演において毛沢東は、魯迅を孔子にさえ匹敵する「聖人」であるとして、その文学がいかにも革命的精神にあふれているかを力説している。すなわち魯迅の作品はそれほど強い感動を毛に与えたわけだが、それが可能であったのは、もちろんそれらが革命思想をそのままに論述した文章ではなく、独特な形を取った文学作品として突きつけられるがゆえに、大きな衝撃を与える結果となったのだと考えられる。

このような見方が正しいとすれば、魯迅文学の研究においても、そこに語られている思想内容に焦点を当てるばかりでなく、その内容を入れる器、あるいはそれに衝撃的な表現を与えるために作られている構造にもっと目を向けるべきではないだろうか。実のところ、中国また日本における魯迅研究はすでに相当の厚みをなしており、中国では『魯迅研究月刊』誌が 1980 年以来刊行され続けているのだが、そのほとんどは魯迅の思想内容に焦点を当てたものであり、作品の構造や手法を解明しようとしたものはまれである。そこで本論文では、魯迅の小説作法の構造的な研究という、現在なおほとんど未開拓の状態にある領域に踏み込み、可能なかぎりの新しい光を当てることを試みたい。

このような観点から魯迅文学を見渡すとき、最も興味深いのは、やはりその方法的な斬新さゆえに中国近代文学の生誕を告げたとされるデビュー作『狂人日記』と発表当初から大きな反響を巻き起こした問題作『阿Q正伝』であろう。この二作は有名であるばかりではなく、互いに似た構造をもっていると考えられる。すなわち、『狂人日記』の主人公兼語り手である「我」¹ (「おれ」²) はまさに「狂人」とであるとされており、『阿Q正

¹ 『狂人日記』の原文は『新青年』1巻1号(影印版、汲古書院、1970)に拠る。『阿Q正伝』の原文は『魯迅全集1』(魯迅先生記念委員会 人民文学出版社 1973)に拠る。

² 竹内好訳『狂人日記』(『阿Q正伝・狂人日記』岩波文庫、1955)。『狂人日記』と『阿Q正伝』の日本語訳は以下断りのないかぎりすべてこの竹内訳に拠る。

伝』の阿Qも甚だしく無知で性格的欠陥だらけの愚者であり、いずれも一般中国人の社会からは侮蔑の目で見られ、疎外されている人物である。すなわち、一般中国人という共同体の外部にはみ出した存在だといってよいのだが、逆にいえば、そうであるがゆえにこそ、その共同体において当然とされていることの不合理性や愚かしさを彼らは照らし出すことになる。

彼らのように周囲の人々と異なるという点に重要性をもち、その異質性によって既成の社会を逆照射して見せるような存在を、本論文では小田実³の言葉を借りて、〈異者〉と呼ぶことにしたい。この意味での〈異者〉をあえて語り手や主人公に設定したところに魯迅の方法的な新しさがあったといえる。すなわちこの二作はともに当時の中国の社会と国民性の悪弊を暴露しているのだが、それを可能にしたのが彼らのようなく異者〉の目を通して語るというこの特異な方法だったのである。

このようにして「狂人」や「愚者」の視点で語られる物語は、その当然の帰結として、笑いを呼び起こしながら進展するが、苦笑しながら読み進む読者は、やがて、そのようなく異者の語り〉のうちに微妙な二元性を感知するかもしれない。つまり、「狂人」とされる「おれ」の語りで進展する『狂人日記』では、読者は精神病らしい混乱した思考のあとを読みながら、やがて、その背後にきわめて理性的な作者の声をも聞き取ることになる。『阿Q正伝』では主人公の阿Qが語り手となることはないものの、やはり同様の構造を読者は感知することになる。このような意味での二元性を本稿では〈語りの二声構造〉と呼び、この技法について分析を加えてゆく。

小説のこのような構成方法は魯迅が独自に考案したものなのだろうか。それとも外国文学から学び取ったものなのだろうか。魯迅に影響を与えた外国人作家としては、これまでロシアのゴーゴリ、アンドレーエフ、ポーランドのシェンキエヴィッチ、ドイツのニーチェ、そして日本の夏目漱石や白樺派などが指摘されてきたが⁴、小説のこのような特異な構造について考えるかぎり、影響関係の考えられる作家は漱石以外にない。とりわけ魯迅の愛読書であった⁵『吾輩は猫である』の語り手である「吾輩」と称する猫は、私が先ほど定義したところの〈異者〉以外の何者でもない。その作品世界には魯迅の『狂人日記』と『阿Q正伝』に見られるものに似た二声構造がたしかに感知される。そこで、この三作の比較的分析を通して、魯迅が漱石から学んだ可能性のある方法について考えてゆきたい。

ここでこの三作の語りの構造の概略を図示するとすれば、以下のようなになるだろう。三図のいずれにおいても、大きな四角形はそれぞれの作品が提示する物語世界全体を示し、その内側の小さな四角形や矢印は物語内

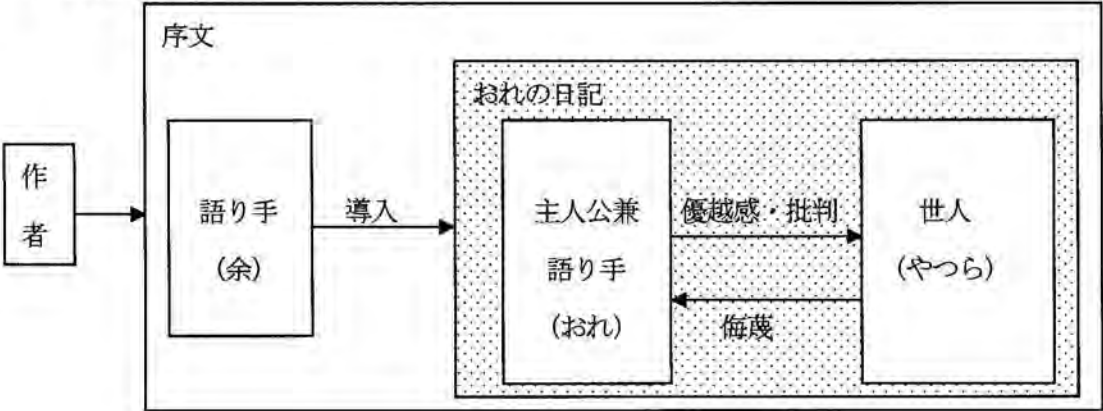
³ 小田実（1992）『異者としての文学』河合文化教育研究所

⁴ 実弟の周作人は、魯迅が最も好んだ作家としてアンドレーエフとゴーゴリを挙げた上で、次のように述べている。「豫才（魯迅の字）が後日作った小説は漱石の作風に似てはゐないけれども、その嘲諷中の輕妙な筆致は實に漱石の影響を相當強く受けてゐるものであり、その深刻沈重なる處はゴーゴリとシェンキエヴィッチから來てゐる。豫才はラテン民族の藝術には興味がなかつたやうで、獨逸ではニイチエー人を取つた。」（周作人著 松枝茂夫訳（1940）『瓜豆集』創元社 p.300-301）

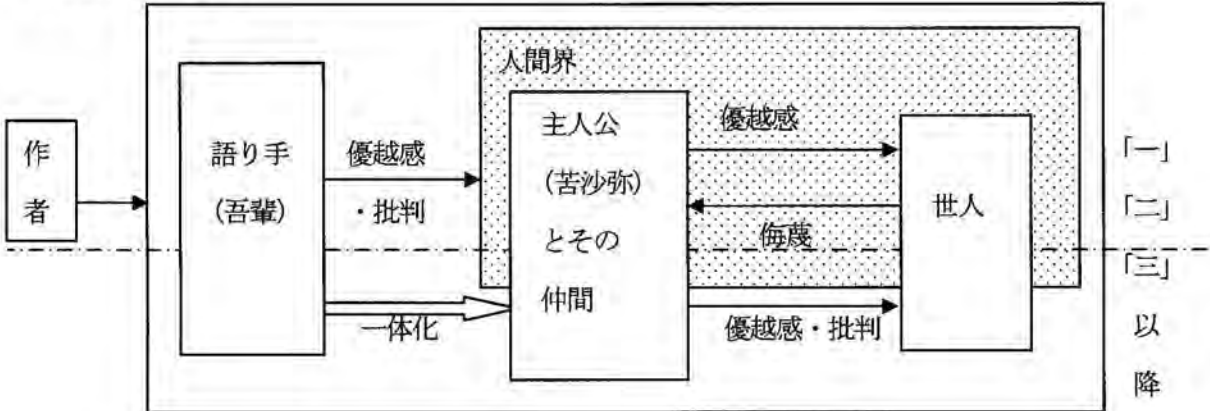
⁵ 周作人によれば、「たゞ夏目漱石は俳諧小説『吾輩は猫である』を作つて有名であつたので、豫才はそれが單行本になつて出ることを買つて讀み、又『朝日新聞』に連載されてゐた『虞美人草』を毎日熱心に讀んでゐた」（周作人著 松枝茂夫訳（1940）『瓜豆集』創元社 p.300）

部の構造や登場人物相互の関係を表現したものである。左側の小さな四角形の「作者」とそこから出ている矢印は、あまりにも自明のことで不要と思われるかもしれないが、それぞれの物語を世に投じた存在としての「作者」が読者によって強く意識されていたという点も本論文の重要な前提の一つであることを示す意味で、あえて付加している。言い換えれば、本稿のテキスト分析の方法が、やがて本論の各部で明らかにするように、物語論を基本線としながら、そこに受容理論ないし読者論の視点も採り入れようとした総合的なものでもあることに対応しているわけである。

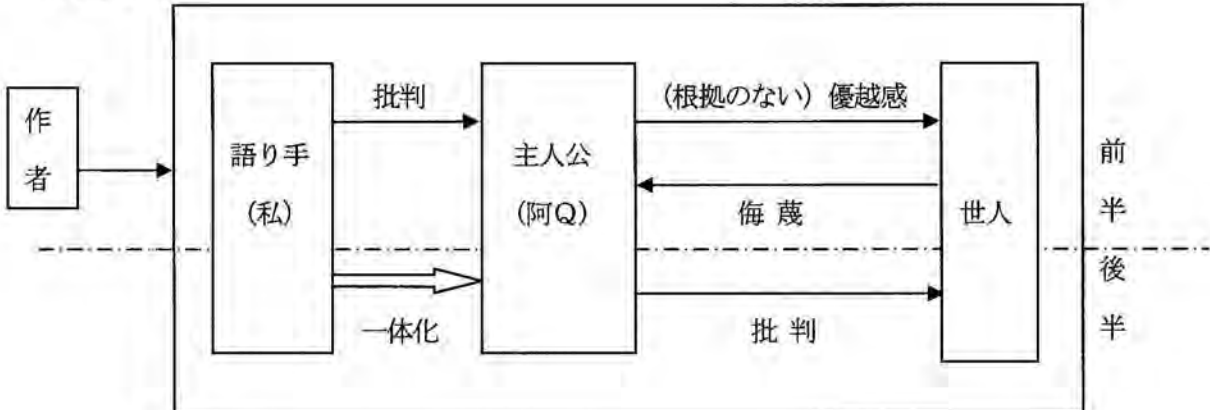
『狂人日記』



『吾輩は猫である』



『阿Q正伝』



本論文では、まず第一部において『狂人日記』の語りの構造を詳細に分析する。その上で、第二部では『吾輩は猫である』の構造を同様に分析することで、両作品の類似点を摘出し、影響関係の可能性を考察する。さらに第三部においては、『阿Q正伝』の構造を前二作と同様の観点から分析し、魯迅が『吾輩は猫である』から学び取って『狂人日記』で開花させた方法をさらにどのように変形し円熟させたかをあきらかにしたい。

第一部 『狂人日記』の語りの構造

一九一八年、五四運動⁶の前夜に魯迅が『新青年』⁷第四巻第五号に発表した『狂人日記』は彼の文学的処女作であるのみならず、中国近代文学の生誕を告げた最初の近代小説とも言われている。そういわれる主な理由は、一つにはそれまでの小説にない口語文の使用という表現の新しさであり、もう一つは中国の伝統社会の批判という思想内容の新しさである。

この二つの特徴についてはこれまで多くの研究が行われてきたが、それらのほとんどは、文章なり思想なりを個別に扱って研究したものであり、両者を一体のものとして見て、魯迅がその思想を表現するためにどのような文章を組み立て、どのような手法を用いたかを総合的に分析した研究はほとんどない。

文章と思想を一体に見るというこのような観点から『狂人日記』を分析してゆくと、作品世界に特殊な二元性があることが見えてくる。すなわち、「狂人」の言葉として語られるいかにも精神病患者らしい混乱した思考を連ねた文章と、その背後に見えてくるきわめて理性的な作者のメッセージとの二元性である。この二元性を同一の文章で同時に表現してゆく魯迅の手法は見事なもので、この点こそ「最初の近代小説」の名に値すると思われる。

本稿では、『狂人日記』における「狂人」の語りの特質を具体的に分析してゆきたい。そもそも『狂人日記』は、魯迅が愛読していたというゴーゴリの短篇と同じ題をつけたものだが、もちろん、中国人読者の多くにそのような知識はなく、このタイトル自体が大いに奇異に感じられたに違いない。なぜなら、普通「狂人」は「日記」など書くものではなく、書いたとしても、それは支離滅裂な、信用に足りないものであると想像されるから、「狂人」と「日記」との取り合わせはそれ自体滑稽なものとして受け取られたはずである。そして、その第一頁を開くと、別の語り手による「序」のようなものが置かれており、そこで日記の語り手は「被害妄想狂」の類であるとされている。「語るどころきわめて錯雑し、順序次第なく、荒唐の言また多し」などの説明も加えられているから、読者は初めからそのような「狂人」の書いたものとして読んでゆくことになる。

読者のそのような期待にこたえていかにも「狂人」らしい語りを繰り出してゆく作者魯迅の手際は実に見事なもので、その背景には周到な方法意識がはりめぐらされていたものと考えられる。その「狂人」らしい語りのリアルさは、精神医学者をも感嘆させるほどで、実際、高橋正雄⁸は『狂人日記』は臨床的にも正確な被害妄想患者の心理が描かれているため、精神医学的な観点からも注目し得る作品のように思われる」と小説の写実性を高く評価し、「この日記の主には、統合失調症的な被害妄想にしばしばみられる特徴が顕著である」と認

⁶ 1919年5月4日の北京の学生デモを発端として中国全土に波及した反帝国主義運動。パリ講和会議で日本の対華二十一箇条要求が承認されたことに反対し、政府にベルサイユ条約の調印拒否を約束させた。中国の新民主主義革命の出发点。

⁷ 中華民国初期の文化雑誌。1915年陳独秀が上海で『青年雑誌』の名で創刊。翌年発行所を北京に移して改題。儒教批判や新思想の紹介を通じ、五・四文化革命を推進。

⁸ 高橋正雄（2004）「魯迅の『狂人日記』——被害妄想患者の心理——」『日本醫事新報』 No.4192

めている。さらに、「魯迅自身にこうした症状があったとは思えない」ことから、「実際の精神障害者の手記を参考にした」可能性を推測しているが、実弟の周作人⁹⁾によれば、実際に被害妄想狂であつたらしい従兄弟との交際があり、魯迅がこの人物の言動を参考にした可能性が大いにある。

さて、その制作方法がどのようなものであったにせよ、『狂人日記』の語りの進み方や筋道が示す、現実の精神病患者を思わせるような特異な「狂人」らしさは、読者に強い衝撃を与えるもので、この作品の大きな特質となっている。そしてこの特質は、魯迅への影響が考えられるゴーゴリの『狂人日記』¹⁰⁾からは感知しにくいものである。たしかにゴーゴリの『狂人日記』は「狂人」が書いた日記という形を取っている点で魯迅作品と同じであり、またたとえば犬が人間と同じように思考して会話を始めたり、紙の上に「スペイン」と書くと、それが「中国」になって出てきたりという幻覚的な記述があつて、それらの細部に魯迅への影響を考えることが可能である¹¹⁾。しかしながら、同じく「狂人」による語りであるとはいっても、魯迅作品の語りの特異な迫力はゴーゴリ作品には希薄であり、このような語りの構造に関わる局面においては魯迅がゴーゴリから学んだとはとても考えられないのである。

つまりゴーゴリの『狂人日記』が魯迅の『狂人日記』にヒントを与えたことは確かだとしても、「狂人」による語りをどのように構成してゆくかという作品の根幹部分においては、大きな影響は認められない。それではその根幹部分、語りの構造を魯迅はどのように生成していったのか。様々な視角からのテキスト分析を通してそれを解明してゆくことが第一部の課題である。

「おれ」の「狂人」らしさを出すために魯迅が用いた方法について、まず第一章で「論理」「認識」「記憶の改変」「被害妄想」「連想」「幻覚」の六つの側面から分析を加えてみたい。その上で、第二章では「おれ」の狂った言葉を通して作者が表現しようとしたことについて分析してゆきたい。

⁹⁾ 周作人 (2002) 『魯迅小説里の人物』河北教育出版社 p.15-16

¹⁰⁾ 評論・作品集『アラベスキ』第一部 (1835) に初発表。

¹¹⁾ 榎本重男 (1999) 「二つの『狂人日記』(上) —— ゴーゴリと魯迅の同題の作品について ——」(『人文社会科学院研究』39 早稲田大学理工学部・一般教育人文社会科学研究会) 参照。

第一章 <異者>としての「おれ」

第一節 論理

「序」の部分が終わると、読者はさっそく「狂人」の語りに入ってゆくことになる。その「一」は原文でわずかに四行の短いものだが、語り手の精神が健常でないことを見事に明示する文章となっている。以下に全文を引用する。

今天晚上，很好的月光。／今夜は、月がいい。

我不见他，已是三十多年；今天见了，精神分外爽快。才知道以前的三十多年，全是发昏；然而须十分小心。不然，那赵家的狗，何以看我两眼呢？／おれはあれを見なくなってから、三十年あまりたつ。きょうは見たから、じつに気分がいい。してみると、これまでの三十年あまりは、何もわかっていなかったわけだ。だが用心はしなきゃならん。でないと、なぜ趙家の犬がおれの顔を二度もにらんだか。

我怕得有理。／おれは伊達や粹狂にこわがるんじゃないぞ。

かなり理解しにくい文章だが、その原因の第一は、文と文の間に論理的な繋がりが無いことである。第一文と第二文をつなぐ論理は一応理解可能だが、第二文から第三文への展開は早くも読者を混乱させるものである。すなわち、三十年ぶりに月を見て気分がよいからといって、なぜその三十年の間「何も分かっていなかった」ことになるのか、不可解だからである。しかもこの文の後半で“然而／だが”と逆接して“须十分小心／用心はしなきゃならん”といわれれば読者はさらに混乱する。続く第四文は第三文の内容について理由を述べているように読めるが、それが“不然／でないと”という接続詞で結ばれるのは、やはり非論理的である。理解しにくい原因の第二は、話題がどんどん飛躍していくことである。「月」で始まった話題はいつの間にか「犬」のことへと移っており、その脈絡が読者にはまったく見えない。「おれは伊達や粹狂にこわがるんじゃないぞ」という結論的な文が「一」の最後に来るが、これより前にこのように断定する理由は示されていないので、やはり飛躍がある。

このような飛躍に満ちた文章は書き手の「おれ」の意識そのものがすでに病理的な状態にあることを明白に示している。だが、見方を変えれば、「おれ」の語りがこれほどに飛躍と非論理性に満ちたものとなっているということは、裏を返せば、論理的であろうという強い意志が「おれ」の語りの内部に潜んでいるからではないだろうか。つまり、論理的に語ろうとするからこそ、精神病理の妨げにあつて、論理の逸脱が目立ってしまうという成り行きなのである。

「おれ」の論理好きを示す事例の一つに、三段論法的な論法の愛好がある。例えば、「三」では「おれ」は「や

つら（村の連中）¹²は人間を食いやがる」という認識をもつようになっているのだが、これを第一段（小前提）として、次のように立論する。

我也是人，他们想要吃我了。／おれだって人間だ（大前提）。やつらは、おれが食いたくなつたんだ（結論）。

三段論法としては正しいものというほかないだろう。間違いがあるとすれば、小前提とされた第一段の認識が事実と反しているという点にある。

これと似ている部分は前にもある。

他们会吃人，就未必不会吃我。／やつらは人間を食いやがる（小前提）。してみると、おれを食わぬ道理はないわけだ（結論）。

ここでは「私は人間だ」という大前提が字面に出ていないが、自明のことと見なされていると考えられる。

このような形で、「おれ」は誤りを含む奇妙な三段論法をいくつも試みており、それが読者の笑いを誘う仕掛けになっているわけだが、繰り返し現れる「おれ」のこのような傾向は、発病以前の彼が、決して無知蒙昧な人間ではなく、それなりに論理的思考を重ねてきた比較的知的な人物であったことを暗示している。その傍証として、「おれ」が帰宅すると、「書斎へはい」ることや、「もの事はすべて、研究してみないことにはわからない」と考えて、「歴史をひっくり返してしらべてみ」る（三）こと、あるいは昔、兄貴が「本を教えてくれた」こと（五）などを挙げるができるし、そもそも序文には彼が「中学校」を出ていること、また病気の回復後は「任官のため某地へ赴」いたことが書かれているのだから、そのことに疑いはない。

第二節 認識

三段論法を愛用する論理的な語り手である「おれ」が非論理的になってしまうのは、前節でも見たように、その認識能力に精神病的な歪みがあるからである。たとえば、「二」の冒頭、すなわちさきほど分析した部分に続くところを分析してみる。

今天全没月光，我知道不妙。早上小心出门，赵贵翁的眼色便怪：似乎怕我，似乎想害我。还有七八个人，交头接耳的议论我，又怕我看见。一路上的人，都是如此。其中最凶的一个人，张着嘴，对我笑了一笑；我便从头直冷到脚跟，晓得他们布置，都已妥当了。／きょうは月がまるきりない。こいつはまずいと思った。

¹² 引用文中（ ）内は引用者による注記。以下同様。

朝、用心して家を出てみると、趙貴翁の眼つきがおかしい。おれをこわがっているようでもあるし、おれをあやめたいようでもある。ほかにも七、八人、ひそひそ耳打ちして、おれの陰口をついてるやつがある。そのくせ、おれに見られるのがこわいのだ。往来にいる連中が、みんなそうだ。なかでもいちばん人相の悪いのが、大口をあけて、おれを見て笑いやがった。おれは頭のとっぺんから脚の先までぞっとした。やつら、すっかり手筈をととのえたな、と思った。

この部分では、論理の流れはそう理解しにくくはないものの、そこに示された「おれ」の認識は精神の異常を思わせるものである。たとえば、町を歩いたら、ほかの人とか、何かを議論している人の群れとかを見かけたりするのは日常生活における極普通の場面である。「おれ」はここでその人たちと視線を交わすと、彼らの目付きが「おれをこわがっているようでもあるし、おれをあやめたいようでもある」と感じているが、これより約一頁先の部分では、記憶を整理したすえに、「二十年前に、古久先生の古い大福帳を踏んづけ」たことがいま敵視されたことの原因だと分かったと考え始める。町の人々の訝しさを描写するところでは「おれ」の認識を半ば信じていた読者がここまで来るともう信じられないだろう。つまり、怖い「眼つき」も憎まれる原因も「おれ」自身の妄想に過ぎないことが明らかになってくるのである。

したがって、実は変わったのは周囲の人々ではなく「おれ」本人であることは、読者にはすでに自明と思われる。すなわち周囲の人の、特別な意味など何もない言葉や視線、あるいは「耳打ち」のような仕草が、彼の意識にはすべて「おかしい」眼つきとか、彼にたいする「陰口」のような歪曲された形で反映しているらしいことを読者は理解し始めるのである。

このような妄想的な認識は、「四」では極度のものとなって読者の笑いを呼ぶ。

早上、我静坐了一会。陈老五送进饭来，一碗菜，一碗蒸鱼；这鱼的眼睛，白而且硬，张着嘴，同那一伙想吃人的人一样。吃了几筷，滑溜溜的不知是鱼是人，便把他兜肚连肠的吐出。／朝、しばらくじっとしていた。陳老五が飯を運んできた。野菜が一皿、蒸し魚が一皿。その魚の眼は、白くてこちこちで、ぱっくり口をあけてるところは、あの人間を食いたがってる人間どもとおなじだ。少し箸をつけてみたが、ぬるぬるして、魚だか人間だかわかりやしない。呑み込んだものを洗いざらい吐き出してしまった。

運ばれてきた蒸魚が「ぱっくり口をあけてる」のを見て「あの人間を食いたがってる人間どもとおなじだ」という連想から「魚だか人間だかわかりやしない」という混乱した認識におちいり、呑み込んだ魚を吐き出してしまふ。

次に現れる医師の何先生に至っては、「おれ」は初めから「この老人が首斬り人の化けたのだくらい、百も承知だ」と誤認している。「静かに養生」するようにとの指示もただちに自分を食べるために肥えさせるつもりなのだ」と誤認してしまう。また続けて何先生の言う「好了／よくなります」も「おれ」は誤認する。静かに養生

したら「おれ」の病気が治るというのがこの医師の言いたい意味だと理解するのが普通の考え方であるが、「おれ」の理解では「よくな」ることによって、利益を得るのは「おれ」ではなく、「おれ」を食いたがっている連中なのである。これに続く医師と兄貴の会話は「おれ」の意識においてはますます歪んでゆく。

老头子跨出门，走不多远，便低声对大哥说道，“赶紧吃罢！”大哥点点头。原来也有你！这一件大发见，虽似意外，也在意中：合伙吃我的人，便是我的哥哥！／老人は部屋を出て間もなく、小声で兄貴にささやいた。《服用はなるべく早くな》¹³兄貴はうなずいた。そうか、兄貴もか、とおれは思った。この大発見は、意外のようであって、じつは意外ではなかった。

老医師の言った「赶紧吃罢／服用はなるべく早くな」における「吃／服用」の目的語は普通の人間から見れば、もちろん薬であるが、医師が来た本当の目的は「脈を見るという口実で肉づきの加減を見る」ことだと思いい込んでいる「おれ」は、老医師が兄貴に「おれ」を食うように勧めていると更に誤認してしまう。この誤認のもう一つの原因はここで「服用」と訳されている「吃」が中国語では広く口に入れること一般を表す字であって、作品全体のキーワードとなる「食人」も原文では「吃人」であるという言語的な事情である。「赶紧吃罢」は文脈しだいでは「食べるのはなるべく早くな」という意味にも取れるわけで、「おれ」には実際、そのように聞こえたわけである。

このような「おれ」の誤解の原因として考えられるのは、前節で見た「おれ」の混乱した論法において確固不動の前提となっていたところの「やつらは人間を食いやがる」（人が人を食う）という思い込みである。この強固な思い込みについては第四節「被害妄想」で詳しく分析するが、この診察を受けるくんだりでは、何先生や兄貴の言動のすべてが、この妄想にもとづいて誤認されていることがわかる。

すべてこの妄想にもとづいて考え、行動する「おれ」は「十」ではついに兄貴を訪問し、「人間を食う人間」はみな「改心」して食べるのをやめるべきだという説得を始める。だが、もちろん兄貴には通じない。話すうちに多くの村人が門の内外で笑いながら見物を始めたので、兄貴はついに「出ていけ！ 氣ちがいは見せ物じゃない！」とどなることになる。

つまり周囲からは完全に「氣ちがい」と見られているのだが、「おれ」はそんなことに全く気づかぬようすで、大真面目に説得を続ける。

当初，他还只是冷笑，随后眼光便凶狠起来，一到说破他们的隐情，那就满脸都变成青色了。大门外立着一伙人，赵贵翁和他的狗，也在里面，都探头探脑的挨进来。有的是看不出面貌，似乎用布蒙着；有的是仍旧青面獠牙，抿着嘴笑。我认识他们是一伙，都是吃人的人。／はじめのうち、兄貴は冷笑をうかべるだけだったが、やがて眼つきがけわしくなり、やつらの内幕をすっぱ抜いたとたん、顔がまっ青になった。表

¹³ 下線は于。以下同様。

門の外に大ぜい人が立っていた。趙貴翁も、その犬もまじっていた。その連中が、おそろおそろ門からは
いって来た。あるものは顔がわからない。布でもかぶっているらしい。あるものは例の顔の青い、歯をむ
き出したやつで、にやにやしてやがる。見覚えのある一味のやつらだ。どれも人間を食う人間どもだ。(十)

この部分での兄貴の「眼つき」や顔色の変化なども、精神病的な状態にある「おれ」の誤認であって、実際
には兄貴は全く動じていないというふうに解するのが普通だろう。というのも「おれ」が続けて言うように見
物人のあるものは顔がわからず、「……布でもかぶっているらしい」と見え、あるものは「青面獠牙／顔の青い、
歯をむき出した」¹⁴と見えているのだから、「おれ」の認識が正常でないことは読者には明らかなのである。

このようにして、「おれ」の認識が事実を反映しないことは『狂人日記』の至るところで示される。つまり「お
れ」の意識は論理のみならず、認識の能力においても病理的な状態にあることが、作者によって示されている
といえる。

第三節 記憶内容の歪曲

外界を認識する能力に病的な欠損を生じているらしい「おれ」は、過去の経験や学習内容を回想する能力に
おいても病的となっている。例えば、何先生の診察のあとで、

他们的祖师李时珍做的“本草什么”上，明明写着人肉可以煎吃；他还能说自己不吃人么？／やつらの祖
師、李時珍の書いた『本草なんとか』という本には、はっきり人肉は煮て食えると出ているじゃないか。
(五)

と書いている。この『本草なんとか』は李時珍の著であれば、それは『本草綱目』だということになるが、そ
こには「人肉を煮て食える」などという記述はなく、それが出ているのは『本草拾遺』という別の本である。
両書を混同していることが明らかなのだが、人肉食のことまで思い出せるということは、「おれ」がかつてこの
本をかなり詳しく読んでいたことを示しており、それほどの知識人がこの両書を混同するのは、普通にはあり
そうにないことである。昔学んだことを回想する場合に、「おれ」の記憶はこのような歪んだ形で再生されるよ
うになっているわけである。

このように、「おれ」はなかなかの知識人であり、当時の中国ではまだ一般的でなかった進化論の知識さえた
くわえていたことが、「十」で兄貴に対する話からわかる。ところが、この知識が奇妙に歪んだ形で回想されて
いる。

¹⁴ この日本語訳はやや曖昧だが、原語の「青面獠牙」は鬼や妖怪を形容する場合に用いられる語句であって、「青面」
といえば「顔面蒼白」の意ではなく、文字通りの青色だということである。

大哥，大约当初野蛮的人，都吃过一点人。后来因为心思不同，有的不吃人了，一味要好，便变了人，变了真的人。有的却还吃，——也同虫子一样，有的变了鱼鸟猴子，一直变到人。有的不要好，至今还是虫子。／兄さん、たぶん大むかしは、人間が野蛮だったころは、だれでも少しは人間を食ったんでしょうね。それが後になると、考えが分かれたために、あるものは人間を食わなくなって、ひたすらよくなろうと努力し、そして人間になりました。まっとうな人間になりました。ところが、あるものは相変わらず人間を食った——虫だっておなじです。あるものは魚になり、鳥になり、猿になり、とうとう人間になりました。あるものは、よくなろうとしなかったために、いまでもまだ虫のままです。

易牙蒸了他儿子，给桀纣吃，还是一直从前的事。／易牙が自分の子供を蒸して桀纣に食わせた話は、あれはずっと大むかしのことなんですね。

もちろん、人間を食う人間と食わない人間とで人類が分岐したというような科学的事実はないし、易牙が子どもを食わせた相手も正しくは桀纣でなく、斎桓公である。すなわち、虫から人間に至る進化も、人間になってからの進化も、また易牙が自分の子を桀纣に食わせた話も、すべて自分が今真実だと思い込んでいるところの妄想に沿うように、ねじ曲げられているわけである。

この種の記憶のねじ曲げは他にもいくつか指摘することができるが、最後にして最大のものが、妹の死についてのものである。食事をしながら兄貴のことを思い出した「おれ」は、「妹が死んだわけも、やつにあることに気がつ」く。

那时我妹子才五岁，可爱可怜的样子，还在眼前。母亲哭个不住，他却劝母亲不要哭；大约因为自己吃了，哭起来不免有点过意不去。／あのとき、おれの妹は五つになったばかりだった。かわいい、いじらしい様子がいまでも眼にうかぶ。おふくろは泣きどおしだった。兄貴はおふくろに、あまり泣くなと言った。自分が食ったものだから、泣かれるといくらか気がとがめるのだろう。

「あまり泣くな」という兄貴の言葉自体はおそらく正確な記憶に基づくものといってよいのだろうが、その言葉の動機として考えられている「自分が食ったものだから」云々は、現在の「おれ」を支配している「人が人を食う」という妄想によって歪められた認識であるにちがいない。

さらに「おれ」は「妹は兄貴に食われた」のであり、母もそのことを「知ってたろう」と考えるのだが、その思いは次のような記憶が甦ることによって強められる。

记得我四五岁时，坐在堂前乘凉，大哥说爷娘生病，做儿子的须割下一片肉来，煮熟了请他吃，才算好人；母亲也没有说不行。一片吃得，整个的自然也吃得。／たしかおれが四、五歳のころ、部屋の外で涼んでいるとき、兄貴がこんなことを言ったっけ。父母が病気になったら、子たるものは自分の肉を一片切り取っ

て、よく煮て父母に食わせなくては、りっぱな人間ではない、と。そのときおふくろも、それがいけない
とは言わなかった。一片が食えるなら、むろん、丸ごとだって食えるわけさ。(十一)

父母が病気なら自分の肉を食わせるべきだという兄貴の言葉は一種の誇張表現であって、ほんとうに自分の
肉を切り取れと言っているとは誰も思わない。それが現在の「おれ」には実際に肉を切り取って食べることと
して認識され、母もそれを否定しなかったがゆえに兄貴と同じく「人間を食う」人間の部類に入れられている
わけである。つまり、現在見聞きする事柄ばかりでなく、想起される過去の出来事もすべて妄想に沿うものへ
と歪められていることがわかる。

第四節 被害妄想

「序」の語り手は「おれ」の症状を『被害妄想狂』の類と規定していたが、この診断の正しさは「やつら
は、おれが食いたくなつたんだ」という認識や、医師を「首斬り人の化けたの」と見る誤認など、すでに見て
きた「おれ」の病的傾向からも証明されているように見える。これらの誤認は、「おれ」の心理にある一種の恐
怖と結びついているように見え、別の箇所でも「こわがっている」「こわい」「頭のとっぺんから脚の先までぞ
っとした」といった表現が繰り返されるように、恐怖に関わる心理の記述は少なくない。「三」では、この傾向
がさらに深刻なものとなる。

晚上总是睡不着。凡事须得研究，才会明白。／夜、どうしても眠れない。もの事はすべて、研究してみ
ないとわからんものだ。

という書き出しで、“凡事须得研究，才会明白”という表現はこの部分の後半にもう一度現れて、「歴史」の研
究を導くものだが、ここでは研究されるのは周りの連中である。「おれ」は夜にその日に起きたことを一通り思
い起こし、分析してみる。まずは、変な目つきで自分を見詰めていた連中のことである。

他们——也有给知县打枷过的，也有给绅士掌过嘴的，也有衙役占了他妻子的，也有老子娘被债主逼死的；
他们那时候的脸色，全没有昨天这么怕，也没有这么凶。／やつら——その中には、県知事に枷をはめられ
たやつもいる。地主にひっぱたかれたやつもいる。役人にてめえの細君を寝取られたやつもいる。高利貸
に親をいじめ殺されたやつもいる。そのときでもやつらの顔つきは、きのうのようにおびえていず、すご
くもなかった。

ここでも「おれ」の認識は歪んでいるように見える。普通感覚からすれば、“他们／やつら”が昔遭わされ

た悲惨な目はいずれも人間にとって大変な恐怖であるはずなのに、「おれ」の目には「そのときでもやつらの顔つきは、きのうのようにおびえていず、すごくもなかった」と映っている。つまり「やつら」にとって、今「おれ」が与えている恐怖と比べれば、いままでの哀れな境遇の恐怖もたいしたものではない、と「おれ」は認識しているわけである。これはもちろん誤認なのだが、その誤認の世界では、「おれ」は自分の強さに自信をもっているわけで、「被害妄想」の状態からはほど遠いようにも見える。ところが、ここから、「おれ」の歪んだ認識はさらに奇妙な推論へと進むのである。すなわち、「やつら」は昔遭わされたいろいろな恐怖は甘受できても、「おれ」の与える恐怖は耐えられない、だから「おれ」の存在を許したくない、そこでおれを食おうとするのだ、と。「おれ」のこの推理はやはり「被害妄想」的なものと言っていいだろう。

このような「おれ」の妄想は、町の人々の様子、兄貴と医者話から生み出した不信と恐怖によって、「七」でますます飛躍していく。

我晓得他们的方法，直捷杀了，是不肯的，而且也不敢，怕有祸祟。所以他们大家连络，布满了罗网，逼我自戕。试看前几天街上男女的样子，和这几天我大哥的作为，便足可悟出八九分了。最好是解下腰带，挂在梁上，自己紧紧勒死；他们没有杀人的罪名，又偿了心愿，自然都欢天喜地的发出一种呜呜咽咽的笑声。否则惊吓忧愁死了，虽则略瘦，也还可以首肯几下。／おれはわかった。やつらの手口はこうだ。ぱっさりやってしまうのは、やりたくないし、またやれないのだ。祟りがこわいから。そこでみんなで連絡しあって、網をはりめぐらせておいて、否でも応でもおれに自殺させるように仕向けているのだ。そうだ。こないだ町で見た男や女の様子からしたって、このごろの兄貴の挙動からしたって、八、九分どおりそれにまちがいない。おれが自分で腰帯をといて、梁にかけて、自分でぶら下って死んでしまえというんだらう。やつらは殺人の罪名を着ないで、しかも念願がかなうという寸法だ。おどりがあって喜んでキャーキャー言うだらうな。そうでないとしたら、もだえ苦しんで、あげくのはてに死んでしまうかだ。これだと肉はおちるが、まあまあご満足がいくだらう。

このように「やつら」の方針は、自分の手で「おれ」を殺すのではなく、「おれ」に自殺させることだと「おれ」は結論を出している。「おれ」の被害妄想はますます深刻になっている。ふりかえって見ると、本章第二節「認識」で述べたように「二」で「おれ」は町の人々の様子から恐怖を感じ、そこから認識の歪みが始まる。さらに「四」では医師の診察への誤認を通し、自分が食われると判断する。「七」になると、「おれ」は「やつら」が自分を殺す手段までも察知できるようになっているわけで、「おれ」の被害妄想がより強いものとなり、具体性を帯びてゆく傾向が見られるのである。

兄貴の家で説得を試みているとき、「気持ちがいは見せ物じゃない！」と兄貴がどなるが、このとき「おれはまた、やつらの妙計に気がつく」。

他们岂但不肯改，而且早已布置；预备下一个疯子的名目罩上我。将来吃了，不但太平无事，怕还会有人见情。佃户说的大家吃了一个恶人，正是这方法。这是他们的老谱！／やつらは、改心するどころか、とくに毘をしかけてあるのだ。あらかじめ氣ちがいという口実を、おれにおっかぶせるために用意してあるのだ。こうしておけば、あとで食っても太平無事だし、なかには無理ないと察するものもいようというものだ。小作人の話にあった、ひとりの悪人をみんなで食ったというのも、てっきりこのやり口だ。これがやつらの常套手段だ。

「おれ」は「やつら」が「おれ」のことを「疯子／氣ちがい」だと言っているのには何かの「毘」が潜んでいると判断している。つまり、「氣ちがい」なら「あとで食っても太平無事だし、なかには無理ないと察する者もいる」という判断で「おれ」を食おうとしているというのだが、それもやはり被害妄想に基づく誤認であることは言うまでもない。ここまで妄想に支配されている「おれ」の言動は大いに笑いを呼ぶものだが、そのような「おれ」が全然自分のことを「氣ちがい」と思っていないという点も、また如何にも「狂人」らしいところで、作品のリアリティを強化している。

このように、「おれ」は被害妄想の世界にますます深く陥っているから、周りの人間が全部自分を食うために行動を取っていると思ってしまう。「やつら」の眼つき、医師の診察、「氣ちがい」の呼び方は実はそれぞれ異なる時点と場所で起こった、互いに関係のない現象であるはずなのだが、被害妄想に冒された「おれ」の意識にはそれらが、いずれも周密な食人計画の各部分をなすものとして統合されてしまうのである。

第五節 連想

妄想に囚われている「おれ」の意識では、現実には無関係であるはず事柄が勝手に関係づけられることで妄想が補強されるような形になっており、その勝手さが笑いを呼ぶものとなっていたわけだが、その関係づけの仕方は、「おれ」本人の意識においては決して勝手なものではなく、それなりに筋の通ったものである。

たとえば第二節「認識」で見たとおり、「おれ」は「ぱっくり口をあけている」蒸魚を見ると、ただちに「人間を食いたがっている人間」という例の妄念を想起し、口に入れたものが「魚だか人間だかわか」らなくなり、すべて吐き出してしまう。このような、「口をあけた魚」から「人間を食う人間」へという、傍目には不合理で滑稽だが、本人の意識ではそれなりに筋道の通った関係づけを、ここでは「連想」と呼び、いくつかの例について分析を加えてみたい。

たとえば「三」で、夜眠れないまま、いろいろな「もの事」を「研究」し始めた「おれ」は、昼間に町で出会った女の言葉を思い出す。「おやじめ！あたしゃ……おさまらないんだよ」と言いながら「眼はおれのほうに向けてい」たのでうろたえと、そこにいた「やつらが、ドッと笑」ったというのである。そしてその件とは別に、二三日前に狼子村から来た小作人が大悪人を殺して内臓を食ったという話をして、兄貴と二人で「おれ」

を見たことを思い出すのだが、その「眼つき」が、町で笑って「おれ」を見た連中の「眼つき」にそっくりだと思ったことから、この二つの事件が結びつけられてゆく。

你看那女人“咬你几口”的话，和一伙青面獠牙人的笑，和前天佃户的话，明明是暗号。我看出他话中全是毒，笑中全是刀。他们的牙齿，全是白厉厉的排着，这就是吃人的家伙。／そうだ、あの女が《おまえさんに食らいついてやる》と言ったのと、あの青い顔の、歯をむき出した連中が笑ったのと、こないだの小作人がしゃべったことは、てっきり暗号なのだ。そうだ、わかった。やつらの言うことはみんな毒だ。笑いには刃がかくされているのだ。やつらの歯はみんな白くてぴかぴかだ。あれは人間を食う道具だ。

あの女の言葉、街の連中の笑い、小作人の話という次々に連想される情景は、客観的に見ればそれぞれ別個のもので互いに関係がないはずなのだが、「おれ」の意識ではそれらが連結されて、一連の「暗号」として認識されている。すなわち、あの女、街の連中、小作人の一見無関係な三者が、実は秘かに連絡を取り合っていて「おれ」を食うという企みのために取り決めた「暗号」だと思い込んでしまうのである。このような思い込みに支配された「おれ」の目には、笑いも「刃」に見え、やつらの白く並んだ歯も「人間を食う道具」に見えてくる。全部人間を食うということを意味する「暗号」だと「おれ」は思ったのだ。

「おれ」の連想はさらに次のように進む。なぜ「おれ」が自分が食われると思うのかといえば、「おれ」は自分も小作人の話で食われたのと同じ「悪人」ではないかという恐れを抱いているからである。

照我自己想，虽然不是恶人，自从踹了古家的簿子，可就难说了。他们似乎别有心思，我全猜不出。况且他们一翻脸，便说人是恶人。我还记得大哥教我做论，无论怎样好人，翻他几句，他便打上几个圈；原谅坏人几句，他便说“翻天妙手，与众不同”。我那里猜得到他们的心思，究竟怎样；况且是要吃的时候。／おれは自分では悪人でないつもりだったが、古家の大福帳を踏んづけて以来、少しあやしくなった。やつらは何か考えがあるらしいが、おれには見当がつかぬ。まして、やつらは仲たがいすると、すぐ相手を悪人よばわりするんだから。おれは今でもおぼえている。兄貴が論文の書き方を教えてくれたとき、どんな善人でも少しけなしてやると、マルをたくさんくれたっけ。悪人を弁護してやると「奇想天外」とか「独創的」とほめてくれたっけ。やつらが何を考えているのか、おれに見当のつくはずはない。まして、食おうと思ってる際なんだから。

「悪人」と見られるのではないかという恐怖から、連想は兄貴に論文の書き方を習った少年時代へと大きく飛んでいる。つまり兄貴は「善人」と「悪人」について常識をややはずれるようなことを書くとき褒めてくれた。してみると、ある人が「善人」か「悪人」かは絶対不変のものではないわけで、「善人」であったはずの「おれ」

が「悪人」と見られることも大いにありうるのだというわけである。

第六節 幻覚

このようにして、なぜ人が「おれ」を食おうとするかの理由を周りの人には見つけられなかった「おれ」は、それを歴史の本の中に捜し始めるのだが、そこに彼が見るものは、およそ現実にはありえないものであり、「おれ」はついに幻覚を見るようになったものと読者は理解することになる。

凡事总须研究，才会明白。古来时常吃人，我也还记得，可是不甚清楚。我翻开历史一查，这历史没有年代，歪歪斜斜的每叶上都写着“仁义道德”几个字。我横竖睡不着，仔细看了半夜，才从字缝里看出字来，满本都写着两个字是“吃人”！／もの事はすべて、研究してみないことにはわからない。むかしから絶えず、人間を食ったように覚えているが、あんまりははっきりしない。おれは歴史をひっくり返してしらべてみた。この歴史には年代がなくて、どのページにも「仁義道德」という文字¹⁵がくねくねと書いてある。おれは、どうせ睡れないから、夜中までかかって丹念にしらべた。そうすると字と字の間からやっと字が出てきた。本には一面に「食人」の二字が書いてあった。

书上写着这许多字，佃户说了这许多话，却都笑吟吟的睁着怪眼睛看我。／本にはこんなに字がたくさん書いてある。小作人はあんなにたくさんしゃべった。そのうえ、字どもも小作人どもも¹⁶にやにや笑いながら、へんな眼でおれを見やがった。(三)

本のどのページにも「仁義道德」の四字があり、さらには一面に「食人」の二字が出てきたこと、また更に「小作人ども」ばかりでなく「字ども」までが「にやにや笑いながら、へんな眼でおれを見やがった」というのは勿論、精神状態が正常の人間には想像できない幻覚であり、このような幻覚を見るということは、人が「おれ」を食うという観念に取り憑かれていることを示している。

こうして「おれ」は目に入るすべてのことを「食人」を出発点として判断するようになる。これまでの部分で少しずつふくらんできた、人間に食われるのではないかという漠然とした恐怖は、ここではすでに完全な幻覚へと姿を変えている。

「四」で蒸魚を吐き出してしまうことは前節でふれたが、このように様子のおかしい「おれ」を案じたのか、兄貴は医者何先生を連れてくる。その医者を見た「おれ」は「この老人が首斬り人の化けたのだくらい百も承知だ。脈を見るという口実で肉づきの加減を見るにきまってる」と思い込む。「五」ではその数日後に、仮り

¹⁵ 下線部のみ手訳。竹内訳は「仁義道德」といった文字」だが、「といった」でなく「という」とした方が原文に忠実なので、この部分だけ改訳した。

¹⁶ 下線部はこの文の意味上の主語だが、竹内訳では省略されている。「字ども」が笑ったり、「おれ」を見たりするという幻覚が表現されていることを明確にするために補った。

にあの老人がそうでないとしても、『本草なんか』には人肉は煮て食えると書いてあるし、兄貴も「子を易えて（交換して）食う」ことはありうると言っていたことを連想し、人間が人間を食うことはあるのだという妄想はますます強固になる。そういう「お説教」をしたときの兄貴の口のはたには「人間の脂がなすりつけてあった」とまで幻想するのである。

「八」では、見知らぬ若い男と「人間を食うことは正しいか」というような論議を交わしたあと、「眼をあげてよく見たら、男の姿はもうな」く、この場面自体も一つの幻覚であったことがわかる。「十」に至ると、同様の議論をついに兄貴に対して展開し、兄貴だけでなく、議論を聞いていた周りの連中からも冷笑を受けることになる。「出ていけ！ 気ちがいは見せ物じゃない」と兄貴は叫び、「おれ」は部屋に連れ戻されるのだが、その部屋で見る幻覚は次のようなものである。

屋里面全是黑沉沉的。横梁和椽子都在头上发抖；抖了一会，就大起来，堆在我身上。／部屋のなかはまっ暗だった。梁や垂木が、頭の上でふるえ出した。ぶるぶるふるえていたと思うと、急にでかくなって、おれの上へのしかかってきた。

万分沉重，动弹不得；他的意思是要我死。我晓得他的沉重是假的，便挣扎出来，出了一身汗。／重い。じつに重い。身動きもできない。やつは、おれを殺そうというのか。だがおれは、やつの重さがマヤカシだと気がついたから、身をもがいて抜け出たが、汗びっしょりになった。

「八」での議論の場面と同じく、あとで幻覚であったことに気づく形だが、ここでは「梁や垂木」という無生物を「他／やつ」という人称代名詞で受けている。「おれを殺そう」としているそれらは「人間を食う人間」が姿を変えて現れたものなのだろう。

第七節 結び

さて、これまでいくつかの観点から分析してきたとおり、『狂人日記』では、「序」の部分以外、すなわち「日記」の部分は、「おれ」が語り手として自分の目を通して周囲の現象を判断したり、述べたりしているのだ。精神状態が異常であるため、「論理」の乱れ、「認識」や「記憶」の歪み、「被害妄想」、「連想」と「幻覚」が相次いで起こっている。このような描写が読者に迫真感を感じさせるために重要な役割を果たしていることは、高橋正雄も指摘していたとおりである。

しかしながら、そのように精神病理を巧みに描き出すところに『狂人日記』主要動機があったわけでないことはいままでもない。それが多くの読者に衝撃を与えたのは、そのような「おれ」の狂った言葉を通して作者魯迅の主張が強烈な形で伝達されたからであろう。たとえば前節で見た「本には一面に『食人』の二字が書いてある」という幻覚のくだりを読んだ読者の多くは、決してそれを単に笑い飛ばしてしまうことはできず、そ

ここに作者からの何らかのメッセージがあることを感知するにちがいない。すなわち『狂人日記』は、「狂人」の声に重ね合わせて作者の声を伝えるというきわめて特異な構造をもっていると考えられるのである。次章ではその構造について様々な視点から分析を加えてゆきたい。

第二章 「おれ」の語りの＜二声構造＞

第一節 権力に迎合する「やつら」

『狂人日記』の本文、すなわち「おれ」の日記の部分を読み始めて数頁のうちに読者が感知するのは、語り手の「おれ」と「他们／やつら」¹⁷との鋭い対立関係、あるいはこの対立についての過剰とも思える「おれ」の意識である。「二」で「やつら、すっかり手筈をととのえたな、と思った」のを最初の例として、「三」では「おれはますますやつらのカラクリがわからなくなった」「やつらは人間を食いやがる」と「やつら」に対峙する意識を表示する言葉がたたみかけるように連続してゆく。

この対立関係は、序章に置いた図(p.3)でも示した「主人公兼語り手」対「世人」の対立にほかならないのだが、読み進むうちに、この「世人」という範疇も全体を一様にはではなく、二つのグループに分けて捉えられているのであることが見えてくる。すなわち前章の第一節「論理」で見た「やつらは、おれが食いたくなつたんだ」というような文における「やつら」が、「おれ」以外の人間全般を指していることは文脈から明らかなのだが、「やつら」という代名詞はいつもそのように使われるのではなく、限定的に使用されている場合も多い。たとえば、「二」で「やつら、すっかり手筈をととのえたな、と思った」のは、「やつら」が「おれを見て笑いやがった」からなのだが、「三」ではその「やつら」についてこう考える。

他们——也有给知县打枷过的，也有给绅士掌过嘴的，也有衙役占了他妻子的，也有老子娘被债主逼死的；他们那时候的脸色，全没有昨天这么怕，也没有这么凶。／やつら——その中には、県知事に枷をはめられたやつもいる。地主にひっぱたかれたやつもいる。役人にてめえの細君を寝取られたやつもいる。高利貸に親をいじめ殺されたやつもいる。そのときでもやつらの顔つきは、きのうのようにおびえていず、すぐくもなかった。

つまりこの部分での「やつら」は「県知事」や「地主」らにいじめられている者たちとしてグループ化されている。同時に「県知事」らが「やつら」をいじめる者のグループとして浮かび上がるわけで、ここで広義の「やつら」が二分化されていることがわかるわけである。

そして、ここで「やつら」に非道な行為を加えることで悪人として描かれている者たちは、「県知事」「地主」「役人」「高利貸」などすべて伝統社会において権力あるいは金力をもつ者たちである。つまり「狂人」である「おれ」の妄想にすぎないかもしれない話のなかに、旧社会の権力者たちへの作者の批判意識がさりげなく投入されているようにも読めるのである。

¹⁷ 中国語原文の「他们」は単に「彼ら」を意味する中性的な語で、「やつら」(竹内訳)のような否定的なニュアンスはない。竹内訳は訳者の解釈が込められたものと解することができる。

そうだとすると、「おれ」とその背後の作者が迫害されている「やつら」の側に立って、権力者たちを批判してゆくというのが作品の主題なのだろうか。しかし、実状はそれほど単純ではない。すなわち「おれ」の記述によると、そのような権力者に圧迫されている「やつら」はそれほどに過酷な現実生活しながら、それでも、その「顔つき」は「へんな眼でおれをにら」んだ昨日のように「おびえていず、すごくもなかった」というのである。そればかりでなく、「やつら」は、「古久先生の古い大福帳を踏んづけ」たためにうらまれているらしい「おれ」と同じように、旧社会の権力者に迫害される側の人間であるはずなのに、権力者たちに反抗するのではなく、むしろ「おれ」に対して敵意をむき出しにしているのである。つまりここには、一般大衆が権力者に迎合し、権力に反抗する者にはむしろ敵対するという構図が見て取れるのだが、この構図は当時の中国社会の構造的な悪弊を的確にえぐったものに違いなく、そのような形で表現された社会批判もまた『狂人日記』が新しい文学として迎えられたことの一要因であったと言わなくてはならない。すなわち、当時の読者の多くがそこに共感し、作者のメッセージを感じ取ったに違いないのである。

このようにして、伝統社会の有力者たちと彼らに迫害されながら迎合する「やつら」、そしてそのいずれでもない「おれ」という三項鼎立が見事に浮かびあがる。それを可能にした仕掛けが、一般社会からはみ出したく異者である「おれ」の目から社会を見て物語るというこの作品の独創的な構造であったと考えられる。それでは、この鼎立の他の二項、すなわち伝統社会の有力者たち、そして「おれ」自身はこの構造においてどのように捉えられているのか。以下の各節ではそれらを順に分析してゆきたいが、その効果的な遂行には、分析対象をテキスト内部の構造に厳密に限定する物語論的分析のみでは不十分であり、作品が当時の読者にどう受容されたかの歴史的事実を考慮する読者論的な視点も必要となる。すなわち、以下の各章においては、それらを接ぎ合わせた総合的な方法によって分析を進めてゆくことになる。

第二節 伝統社会の有力者たち

まず伝統社会の有力者たちの捉え方を見ておこう。このグループを代表するのは趙貴翁とその一家である。彼らと「おれ」との対立関係は早くも「一」での「趙家の犬がおれの顔を二度もにらんだ」という記述において早くも暗示され、続く「二」の冒頭で「趙貴翁の眼つきがおかしい」とその様態が詳述されることで明白となる。「趙貴翁はおれに何のうらみがあるのか」と「おれ」は考えをめぐらす。

同路上の人又有什么仇；只有廿年以前，把古久先生的陈年流水簿子，踹了一脚，古久先生很不高兴。赵贵翁虽然不认识他，一定也听到风声，代抱不平；约定路上的人，同我作冤对。／往来にいた連中はおれに何のうらみがあるのか。あるといえば二十年前に、古久先生の古い大福帳を踏んづけて、古久先生にいやな顔をされたことぐらいじゃないか。趙貴翁は古久先生の友人ではないが、きっとその噂をきいて、おれのことを憤慨してるんだろう。そして往来の連中をそそのかして、おれを憎むように仕向けてるんだな。

二十年前に古久先生の大福帳を踏んづけたことから、趙貴翁の憤慨へと飛び、そこから往來の連中のうらみへとつながってゆく「おれ」の思考経路は客觀的にみれば、あまりにも突飛で——読者の笑いを誘うものである。もちろんそれも「おれ」の主觀としてはそれなりの筋道が通っていることは、前章の「連想」の説などで分析した通りなのだが、そのような精神病的ともいえる不合理な関係づけによって、ここで示されているのは、趙貴翁や古久先生を含む伝統的な有力者のグループに対する「おれ」の強烈な被害意識あるいは敵意である。

そもそも「趙貴翁」という名前も、「趙」は「百家姓」¹⁸の第一に挙げられる由緒のある姓で、「貴翁」は高貴な老人にしか用いられない尊称なのだから、文字通り「名は体を表わす」という形の命名法なのだが、ここに現れた「古久先生」になると、「名は体を表わす」ことがほとんど戯画的なばかりであり、その人物の実在性さえ疑われる。つまりこの大福帳の記憶自体も「おれ」の妄想にすぎないという可能性も浮上するのである。

このように、「おれ」の有力者グループへの対立意識は、文字の意味とも渾然一体となっていよいよ妄想的なものへと昂進してゆく。「三」の半ばで、「やつらは人間を食いやがる。してみると、おれを食わぬ道理はないわけだ」という結論に至った「おれ」は、ついには以下のような「幻覺」を見ることになる。

我翻开历史一查，这历史没有年代，歪歪斜斜的每叶上都写着“仁义道德”几个字。我横竖睡不着，仔细看了半夜，才从字缝里看出字来，满本都写着两个字是“吃人”！／おれは歴史をひっくり返してしらべてみた。この歴史には年代がなくて、どのページにも「仁義道德」という文字がくねくねと書いてある。おれは、どうせ睡れないから、夜中までかかって丹念にしらべた。そうすると字と字の間からやっとな字が出てきた。本には一面に「食人」の二字が書いてあった。

史書に書いてある文字が「仁義道德」ばかりであり、それを夜中で丹念にしらべると、今度は一面に「食人」の二字ばかりになってしまうという情景は、客觀的にみれば、精神病的な「幻覺」としか考えようがない。ただ、もし「おれ」の主觀の内部をのぞいてみるならば、「仁義道德」は儒教の代表的なスローガンであり、それを推進・宣伝してきたのは伝統社会の有力者たちにはかならないのだから、その「仁義道德」が「食人」に化すという成り行きは、伝統社会こそ「食人」する者たちの集団だという認識を表現しているものとも読めるのである。

実際、そのような読み方は当時の読者の多くによってなされたはずで、この作品の書かれた五四運動の前夜のころには、知識階級の間には反帝国主義、反封建の風潮が高まっており、儒家の伝統的な封建思想が批判されていたからである。すなわち、『狂人日記』もそのような反封建の思潮に乗って現れた作品として読まれたわけだが、それにしても「食人」という観念はあまりにも衝撃的であり、それが何か「人間を食う」という文字通りの意味とは別の何かを意味しているのではないかと考えさせる力は大きかったにちがいない。作品にこのよ

¹⁸ 姓を配列した学童の識字用テキストで、作者不詳。宋初の呉越王銭氏のとき民間で作られたという。単行本では単姓408、複姓30、計438字を収める。『中国語大辞典』大東文化大学中国語大辞典編纂室編 角川書店 1994

うな強い衝撃力をもたせることのできた要因は、やはり「狂人」による語りという独創的な構造であったといえる。

第三節 「おれ」の自己批判

語り手の「おれ」が三項鼎立における二項——「権力に迎合するやつら」と「伝統社会の有力者たち」に対する批判を加えていることはすでに本章の第一、二節で分析してきたが、「おれ」の語りが進展するにつれ、自分までも批判する傾向が見えてくるのである。「おれ」の自分に対する疑いは最初に「四」から窺える。「おれ」を診察しに来た医師が「兄貴」に「(薬の)服用はなるべく早くな」とささやき、これを耳にした「おれ」がその意味を誤認して、「兄貴」もおれを食おうとする一人だと結論を出してしまうことは第一章第二節「認識」で分析した通りだが、それに続くのは次のような言葉である。

吃人的是我哥哥！／人間を食うのがおれの兄貴だ。

我是吃人的人的兄弟！／おれは人間を食う人間の弟だ。

我自己被人吃了，可仍然是吃人的人的兄弟！／おれ自身が食われたとしても¹⁹、おれは依然として人間を食う人間の弟だ。

見た目には三つのセンテンスはほとんど同じ内容を繰り返しているにすぎず、まことに序言に述べた「語るところきわめて錯雑し、順序次第なく、荒唐の言また多し」の通りであるけれども、この激しいたたみかけのうちに、作者がほかに何か深刻なことを訴えていると読者はやがて感じるはずである。繰り返されているのは、自分が「人間を食う」兄貴の弟であるという強烈な意識であり、そうであれば、自分は「食われる」としても、依然として「人間を食う」側の人間であるという認識である。従って、自分も今後いつか「人を食べる」、あるいは知らないうちにすでに「人を食べ」たかもしれないのである。「五」から「十」まで、いろいろな経験と思考を重ねた「おれ」は、「十一」では五歳で死んだ妹のことを思い出し、その死の理由が兄貴にあることに「気がつく」（前章第三節参照）。したがって、終幕に近い「十二」で「おれ」がこう考えるのは、「四」の「荒唐」とも見える激しい言葉に根拠を与えるものともいえる。

四千年来时吃人的地方，今天才明白，我也在其中混了多年；大哥正管着家务，妹子恰恰死了，他未必不和在饭菜里，暗暗给我们吃。／四千年来，絶えず人間を食ってきた場所、そこにおれも、なが年暮らしてきたんだということが、きょう、やっとわかった。兄貴が家を仕切っていたときに妹が死んだ。やつが、

¹⁹ 下線部の竹内訳は「食われてしまっても」だが、この日本語では、食われて無になったあとも「依然として人間を食う人間の弟だ」と言っているように聞える。原文の真意はそうではなく、「おれ」は仮に「食われ」ても「依然として」「食う」側の階級の人間だということなので、改訳した。

こっそり料理にまぜて、おれたちに食わせなかったとはいえない。

我未必无意之中，不吃了我妹子的几片肉，现在也轮到我自己，……／おれは知らぬうちに、妹の肉を食わなかったとはいえん。いま番がおれに廻ってきて……

有了四千年吃人履历的我，当初虽然不知道，现在明白，难见真的人！／四千年の食人の歴史をもつおれ。はじめはわからなかったが、いまわかった。まっとうな人間に顔むけできぬこのおれ。

「四千年の食人の歴史をもつ」に続くべき語は本来なら「中国」あるいは「社会」などだが、そこに「おれ」が入ってしまったことには、「おれ」の錯乱の昂進が示されているが、そればかりでなく、自らを中国社会全体と同じ地位においてその責任を一身に引き受けるという悲壮な意識を読むことも不可能ではない。そのように読む読者はおそらくその背後に作者自身の声を感知するはずで、「おれ」のこのの狂った言葉の背後に、中国人一人一人が皆この「歴史をもつ」のであって、誰一人として「食人」の罪を免れてはいないのだという作者の思想を読み取ることも可能となるのである。

第四節 絶望と希望

さて、第一～三節において、『狂人日記』を構成する人物群が三項鼎立の関係にあり、その一項をなす「おれ」の狂った言葉の背後に作者自身の声を聴くことの可能性について分析してきたが、終幕へ向けて進行すればするほど、そのような、作者と「おれ」が一体化する傾向は強くなってくる。「おれ」は中国の歴史は食人の歴史であるということ、また周りの人間だけでなく、自分自身も食人行為に参加しているということを次第に解明し、その結果、前節の引用文に見られるような絶望的な「呐喊」を吐くに至っているのだが、読者が終章まで読み終わると、「おれ」の語っている世界はそのような絶望的な呐喊に終始するのではなく、希望が、微弱でありながら、やはりどこかで点在していると気付くはずなのである。例えば「十」で、兄貴を説得しようとして見物人たちに取り巻かれた「おれ」はこう「呐喊」する。

你们要不改，自己也会吃尽。即使生得多，也会给真的人除灭了，同猎人打完狼子一样！——同虫子一样！／おまえたち、もし改心しないと、自分も食われてしまうぞ。いくらたくさん産んだって、みんなまっとうな人間にほろぼされてしまうぞ。獵師が狼を狩りつくすとおなじように——虫けらとおなじように

你们立刻改了，从真心改起！你们要晓得将来是容不得吃人的人，……／おまえたち、いますぐ改心しろ。しん底から改心しろ。いいか、いまに人間を食う人間は、この世にいれられなく……

「人間を食う人間」である「おまえたち」は改心しなければ、「ほろぼされてしまう」というのだが、その「ほろぼ」す者、狼に対する獵師の役割を果たすものとしてここに現れているのが、「まっとうな人間」

という存在である。そして「おれ」自身もまた「人間を食う人間」であるがゆえに、その「まっとうな人間に顔むけできぬ」というのが、前節で見た「十二」での論理であったわけだが、そうであっても、この「まっとうな人間」の存在が信じられていることに変わりはない。

では、それは結局どのような存在なのかといえ、ば、「おれ」の語るところを総合すれば、「人間を食う人間」ではなく、むしろ将来必ずそのような人間を「ほろぼす」人間だということになる。そのような言葉にもかかわらず希望が感知されるのである。未来に希望を託す「おれ」の目が子供に向うのは自然なことだと言える。

没有吃过人的孩子，或者还有？／人間を食ったことのない子どもは、まだいるかしら？

救救孩子……／子どもを救え……²⁰

まだ人間を食ったことがないがゆえに、「まっとうな人間」育つ可能性の大きい「子ども」たちこそ希望であり、彼らを救うことこそ至上命令である。絶望と希望のないまぜになったこのような「呐喊」を最後に日記は中断され、『狂人日記』という作品も閉じられるのだが、読み終えた読者の脳裏には「子どもを救え」という「狂人」の言葉が同時に作者のメッセージを伝える言葉として残留するはずである。

第五節 二つの次元

前節で見たとおり、作品の最終行となる「子どもを救え……」は「狂人」とされる「おれ」の言葉と作者のメッセージとがついに一体化する感動的な一文であったといえる。だが、この一体化はここで突然に成立したわけではなく、日記の前半部分から徐々に進行してきたものであり、「おれ」の言葉の背後に時折感知される作者の声らしいものが、次第に力を増して最後の最高潮を迎える形となっている。

たとえば、「五」で「おれ」は「人間が人間を食う」ことについて深く確信するようになるのだが、これに続く「六」は次の二行のみである。

獅子似的凶心，兔子的怯弱，狐狸的狡猾，……／まっ暗だ。昼だか夜だかわからん。趙家の犬がまたほえ出した。

黒漆漆的，不知是日是夜。赵家的狗又叫起来了。／獅子のような凶暴さ、兔の臆病、狐の狡猾

これらの言葉は直接的には、「狂人」の恐怖や苛立ちを表現したものだが、少し角度を変えて見れば、すべて中国社会の現状を批判する作者による比喩のようにも見えてくる。すなわち、現在の社会は昼も夜もわからないほど暗黒な状態の連続であり、その暗夜に吠える「趙家の犬」は「人間を食う」やつら全体を代表してお

²⁰ 竹内訳は「せめて子どもを……」だが、不明確なので、原文により忠実に改訳した。

り、彼らは「凶暴」であると同時に、実は「臆病」で「狡猾」でもあるのだ、と。

このあと「七」で「人間を食う人間を改心させるのに、まず兄貴から改心させよう」と考えた「おれ」は、「八」では不意に現れた若い男と対話する幻覚を見る。続く「九」の全文は以下の通りである。

自己想吃人、又怕被别人吃了，都用着疑心极深的眼光，面面相觑。……／自分では人間が食いたいくせに、他人からは食われまいとする。だから疑心暗鬼で、お互いじろじろ相手を盗み見て……

去了这心思，放心做事走路吃饭睡觉，何等舒服。这只是一条门槛，一个关头。他们可是父子兄弟夫妇朋友师生仇敌和各不相识的人，都结成一伙，互相劝勉，互相牵掣，死也不肯跨过这一步。／こんな考えを棄てて、安心して仕事をし、往来を歩き、飯を食い、睡ったら、どんなに気持ちがいいだろう。それはほんのひと跨ぎ、ひとつの関を越えるだけだ。だが、やつらは親子、兄弟、夫婦、友人、師弟、仇敵、それに見も知らぬ他人同士までいっしょになって、お互いにはげましあい、お互いに牽制しあって、死んでもこの一步を踏み越そうとしないのだ。

試みに引用文中の“吃人”（「人間が食いたい」）を“压迫人”（「人間を压迫したい」）と置き換えて読み下してみよう。そうすれば、「狂人」の「おれ」によって書かれていることになっているこの文章の全体がそのまま作者の主張として読めることに読者は気付くだろう。「压迫」の内容をより具体的に言うとなれば、「三」での「おれ」が「やつら」について述べていたこと——「県知事に枷をはめられ」たり、「地主にひっぱたかれ」たり、「役人にてめえの細君を寝取られ」たり、「高利貸に親をいじめ殺され」たり——がそのまま当てはまるだろう。すなわちこうした行為こそが“吃人”（「食人」）の裏にあるもう一つの意味であるという作品の隠れた構造は、これまで少しずつその姿を見え隠れさせていたのだが、この「九」において俄然明白になったといえるだろう。

このもう一つの意味の側に立ってこの「九」をもう一度眺めた場合はどうなるか。つまり、「人間が人間を食う」（即ち、人間が人間を压迫する）ような社会でなくなるためには「ひとつの関を越えるだけ」でよいのに、誰も「この一步を踏み越そうとしない」という記述は、ほとんどそのまま作者の主張のように読めるわけである。この観点から作品を再読する読者は、実に多くの箇所作者の声を聴き取ることになるだろう。たとえば、第一章「6. 幻覚」のところで見たように、「三」では「食人」の二字が「歴史の本を一面におおう」という幻覚が描かれていたが、これも、作者の社会批判という次元から見ると、中国の歴史は「人間を食う」、すなわち「人間を压迫する」という事態に満ちていたということの象徴的な表現であるとも解釈できるのである。

こうして、『狂人日記』の語りはすべて「おれ」の視点によって限定されているが、読者はやはり「おれ」とは違って、正常な人間だから、「おれ」の考え方にどこまでも引き連れられていくわけではない。読者は目の前に展開してゆく「おれ」の狂った認識を通して、それとは異なる内容を読み取ってゆく。したがって、「おれ」の心的活動が現実生活から乖離しているように見えるけれども、作者は「おれ」の「荒唐の言」を通してかえ

って現実的なことを読者に訴え、納得させるという離れ技のような難事を成功させているわけである。そのような難事が、これまでたびたびふれてきたところの、「おれ」の言葉の背後に作者の声を響かせるという＜語りの二声構造＞なしには実現不可能であったことは、すでに明らかだろう。すなわち、『狂人日記』には二つの次元が同時に存在し、展開されている。それを仔細に観察してみるならば、この二つの次元がそれぞれ独立しているというのではなく、互いに作用し、働きあって、統一されるまとまりを構成していることがわかる。

第二部 『吾輩は猫である』の語りの構造

夏目漱石のデビュー作である『吾輩は猫である』は1905（明治38）年俳句同人雑誌「ホトトギス」²¹の一月号に発表されるやたちまち世の注目を浴び、当初は連載を予定して書かれたものではなかったが、好評につき続々と続編が要望され、翌年8月まで連載が続くことになった。

この作品は、英語教師である苦沙弥先生の家には飼われている猫である「吾輩」を語り手として、その視点から、飼い主苦沙弥先生の一家、そこに集う彼の友人や門下の書生たち、近所の実業家金田などの人間模様を風刺的に描いたものである。

この作品がブームを引き起こした最大の要因は、猫が語り手となって人間世界を描写してゆくという趣向の斬新さにあったと考えられる。本稿の序章で、私は、「周囲の人と異なるという点に重要性をもち、その異質性によって既成の社会を逆照射して見せるような存在」を＜異者＞と呼ぶことにし、そのようなく異者＞の一人として『狂人日記』の「おれ」や『阿Q正伝』の阿Qを挙げたが、この猫も、まったく同じ意味で——あるいは人間でさえないという意味では「おれ」や「阿Q」の場合よりさらに徹底して——＜異者＞だということができる。すなわち『吾輩は猫である』の斬新さは、＜異者の語り＞というこの特殊な構造から生み出されたと考えられるのである。

そしてこの独特な語りが、『狂人日記』においては、「おれ」の語りに作者の声が重なるという形での二元性、すなわち＜語りの二声構造＞を生み出していることを第一部で分析したが、ほとんど同じ構造が「吾輩は猫である」にも見られるのである。この二つの次元がそこではどのように展開しているか、本章では『狂人日記』の語りと対照しながら、『吾輩は猫である』の語りを分析することを通して、それを明らかにしてゆきたい。

²¹ 俳句雑誌。明治三十年一月、正岡子規が主宰し、松山市から柳原極堂を発行兼編集人として創刊。翌三十一年十月、高浜虚子がゆずりうけ、発行所を東京に移して編集。俳句の革新と普及を旨とし、また写生文や小説などを掲載し、当時文芸雑誌としての性格をもっていた。子規や虚子と親しかった漱石は、『不言之道』以下『倫敦消息』『自転車日記』『猫』『坊っちゃん』他、多くの作品をのせた。（『漱石全集（第一巻）』（1993）岩波書店 注解 p.572）

第一章 <異者>としての「吾輩」

小説の主人公兼語り手である「吾輩」は猫であって、人間ではないがゆえに、人間にとっては当然なことでも不思議に見え、嘲笑に値するように思える場合もしばしばである。このようなく異者>を視点人物に選ぶという基本的な構想において、この作品は、『狂人日記』との類似性が明らかである。本章ではまず「吾輩」の語りに反映される異常な心理・性格を分析しながら、『狂人日記』の「おれ」と共通する要素を探ってゆきたい。

第一節 「吾輩」の尊大さ

『吾輩は猫である』というタイトルは冒頭の第一文「吾輩は猫である」をそのまま採ったものだが、この文自体がすでに滑稽である。なぜなら、第一に、言葉を語るはずはない猫が語っているからだ、そればかりでなく、その猫が用いている一人称代名詞「吾輩」はいわゆる尊大語²²であって、それを猫が用いることはいかにも不釣合だからである。しかも、この猫はもともと捨て猫であって、特に強いわけでも美しいわけでもなく、また現在飼われている珍野家に強く望まれて家に入れられたわけでもない。一家の主人である苦沙弥の一存で辛うじて拾われたが、「主人以外のものには甚だ不人望で」²³、「今日に至る迄名前さへつけてくれない」ほど軽んじられているのである。そのような存在が「吾輩」と自称して珍野家に出入りする人間たちを高慢な口調で存分に揶揄し嘲笑するところに滑稽が生ずるわけで、この作品のユーモアは第一にこのような語りの構造に支えられているといえる。

つまり「吾輩は……である」という文体と「猫」とがいかにも不釣合であることが、このタイトルの面白味となっているわけだが、同じような不釣合が『狂人日記』における「狂人」と「日記」の間にも見られたことは第一部の序章にも見たとおりである。タイトルの奇異さが本文の語りの特異さを予告する形になっている点でも両作品はよく似ているといえる。

それはさておき、このようにして始まる『吾輩は猫である』の滑稽さを倍加しているのが、「吾輩」という尊大語で自称する猫の語りがやはりその言葉にふさわしい「尊大」な内容を含んでいることである。例えば、第一章で書生に捨てられるときに下のように述べている。

掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たのが所謂人間といふものゝ見始であらう。此時妙なものだと思つた感じが今でも残つて居る。第一毛を以て装飾されべき筈の顔がつる／＼して丸で薬缶だ。其後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出会はした事がない。加^{しかのみならず}之顔の真中が余りに突起して居る。そう

²² 話し手が自分を相手より上位に置いて表現する言い方（『広辞苑』第五版 岩波書店 1998）

²³ 『漱石全集（第一巻）』（1993）岩波書店。以下『吾輩は猫である』からの引用はすべてこの巻に拠る。

して其穴の中から時々ぷう／＼と烟を吹く。どうも咽せぼくて実に弱つた。是が人間の飲む烟草といふものである事は漸く此頃知つた。

ここで「吾輩」は初めて「人間といふもの」を見たわけだが、全て猫を基準とした美意識で判断するから、否定的な評言ばかりが連ねられる。たとえば、「毛を以て装飾されべき筈」という猫の顔に適用される標準をそのまま人間の顔に適用することによって「丸で葉缶だ」「片輪」だという一方的な断罪に帰結する。あるいは「顔の真中」すなわち鼻が「余りに突起している」と酷評し、しかも「其穴の中から」烟を吹くことに驚愕しているわけだが、これらも猫の顔を標準として見ていることの結果だといえる。つまりこれらの評言は全く別種の二種類の動物の顔に、一方の動物の標準を適用して評価を下したものであって、人間の側からすれば不当にちがいないのだが、そのようなことに顧慮する様子もなく、一方的に＜猫中心主義＞的な批評を重ねてゆく「吾輩」の語りはいかにも尊大で読者の笑いを呼ぶ。

同様に＜猫中心主義＞的な尊大さを示す語りは「二」にもある。朝、二人の子どもが壺の砂糖を争って自分の皿に取っておき、結局は両方とも取り上げられて壺に戻されてしまうという一件を見て、「吾輩」はこう議論している。

こんな所を見ると、人間は利己主義から割り出した公平といふ念は猫より優つて居るかも知れぬが智慧は却つて猫より劣つて居る様だ。そんなに山盛にしないうちに早く嘗めて仕舞へばいいと思つたが、例の如く、吾輩の言ふ事杯は通じないのだから、気の毒ながら御櫃の上から黙つて見物して居た。

ここで「吾輩」は人間の「智慧は却つて猫より劣つて居る」とやはり一方的に判定しているが、その根拠として挙げているのは、砂糖を「そんなに山盛にしないうちに早く嘗めて仕舞へばいい」という猫の立場からする判断である。しかしながら、考えてみれば、そもそも姉妹が砂糖を争うのはおそらく食べるためであるよりは、むしろ相手より多くを所有して誇りたいという心理から起ったことではなからうか。とすれば、この姉妹の「智慧」は、「早く嘗め」ることのみを重視する＜猫中心主義＞的な基準からは判定できないはずなのである。せつかく苦勞して手に入れた砂糖を食べられずにまた壺に入れられることは猫である「吾輩」からみてもったいないに違いないから、「早く嘗めて仕舞へばいい」と勝手に批評したにすぎないのであって、実は人間の考えていることを十分に分かっているわけではないのである。

これのみならず、「吾輩の言ふ事杯は通じないのだから、気の毒ながら御櫃の上から黙つて見物して居た」と言う。ここでは、上述した「一」における書生の顔に対する議論と同じ傾向が見られる。すなわちいつも自分あるいは自分の属する「猫属」を中心に置き、自分の立場と違うものを直ちに批判するという傾向である。書生の顔は猫属と異なるなら、書生のほうが怪物だ。これと同様に、「吾輩」が二人の子どもとコミュニケーションが取れないのは、「吾輩」が人間の言葉をしゃべれないためでなく、彼女たちが「吾輩」の言語がわからない

からである。つまり、人間は猫より優位であるというのが人間界の常識だが、「吾輩」の語りの世界ではそれとまったく逆なのである。

このような逆転の構図は「三」以降も基本的に変わることがない。「三」では「吾輩」は偶然のようにして持ちあがった寒月君と向こう横丁の実業家・金田家令嬢との縁談話を仄聞するにつけ、勇躍単身で偵察に赴こうと一度は「大決心」するが、「待てよ」と思い直す。「吾輩」は猫として進化の極度に達して居るのみならず、脳力の発達に於てはあえて中学の三年生に劣らざる積りであるが、悲しいかな咽喉の構造が人間の言語が饒舌れない、「敵の情勢を見届けた」としても、人間の言葉が出来ないために「肝心の寒月君に教へてやる訳に行かない」というのである。つまり、猫が、たとえ、偵察を見事に終え、そしてまた、読者に対しては語り手としての報告をやり遂げたとしても、作中人物である主人の苦沙弥や、当事者である寒月君に何一つ肝心なことを伝えることができない。ここでは、自分が猫であることの限界を認めている点でいささか謙虚になったようにも見えるのだが、そう言ったかと思うと、また次のように語り出すのである。

話せないとすれば土中にある^{ダイヤモンド}金剛石の日を受けて光らぬと同じ事で、切角の智識も無用の長物となる。
是は愚だ、やめ様かしらんと上り口で佇んで見た。

先ほどの多少謙虚な気持ちは長く続かず、「吾輩」は結局自分の立場を絶対化するという、これまでと同じ傾向に陥っている。偵察など「愚」だからやめようかと考えたのは、自分の「土中にある金剛石の日を受けて光らぬ」ような「智識」を人間に披露できないということを十分に認識したからだというのである。すなわち、「吾輩」は人間と交流できないことにショックを受けるところか、むしろ自分はやはり「智識」のある者だとすこぶる余裕のある姿勢を示すことになるのである。

しかし、「一度思ひ立つた事を途中で已めるのは、白雨が来るかと待つて居る時黒雲共隣国へ通り過ぎた様に、何となく残り惜い」と思うから、「吾輩」はやはり金田家へ忍び込むことを決める。金田家に入った「吾輩」は珍野家におけるのと同じように一家の様子を饒舌に批評してゆく。「四」でもそれが続き、たとえばそこで「吾輩」は金田について「人を人と思はない位なら猫を猫とも思ふまい」と推論した上で、「猫たるものは如何なる盛徳の猫でも彼の邸内で決して油断は出来ぬ訳である」と結論するのだが、この言葉遣いなど、大いに「吾輩」の尊大さを反映している。「盛徳」とは「すぐれて立派な徳」²⁴のことで、それは普通、他人を褒める言葉であり、自分について用いれば厚顔無恥と蔑まれることになる。このようにして、「吾輩」には言語を使用する能力はあるけれども、人間の一般常識に対する理解が生半可である結果、「吾輩」という尊大な容器に十分な中身が伴っていないことによる笑いが引き出されているのである。

このような尊大な語りによる笑いは『吾輩は猫である』という作品全体の基調となっている。たとえば「五」で「吾輩」は自分が鼠を捕らない理由を述べた直後、話の方向を一転させ、捕ることを決意する。

²⁴ 『広辞苑』第五版 岩波書店(1998)

猛虎も動物園に入れば糞豚の隣りに居を占め、鴻雁も鳥屋に生擒らるれば雛鶏と 俎 を同うす。庸人と相互する以上は下つて庸猫と化せざるべからず。庸猫たらんとすれば鼠を捕らざるべからず。——吾輩はとうとう鼠をとる事に極めた。

「吾輩」は自分が「庸猫」であることを認めたが、それは本来の状態ではなく、「庸人と相互する以上は下つて庸猫と化せざるべからず」だからだ。従って、ここでは、むしろ主人らが「庸人」であるということのほうが言いたいのである。「吾輩」は「庸人」と一緒に暮らしているから、仕方なく「非常に大事な身体」で「危険」なことをやらざるをえなくなっている。それは全部「庸人」たちのせいであるというわけなのだから、「吾輩」の尊大さに変わりはないのである。

同じ「五」では、珍野家の談話で鼠を「一匹もとつた事はありません」と貶された「吾輩」は、なぜ自分が鼠を取らないかについて、以下のように言う。

吾輩は頭を以て活動すべき天命を受けて此娑婆に出現した程の古今来の猫であれば、非常に大事な身体である。千金の子は堂陲に坐せずとの諺もある事なれば、好んで超邁を宗として、徒らに吾身の危険を求むるのは単に自己の災なるのみならず、また大いに天意に背く訳である。

すなわち、「吾輩」が鼠を捕らないのは、「勇氣と腕力」が足りなくて成功できないからではなく、「非常に大事な身体」で「危険」なことをやると「大いに天意に背く」恐れがあるからだというのである。「吾輩」は、実は第一章で自ら認めていた通り、「勇氣と腕力」不足の弱点を抱えているのだが、この尊大な口実によってそれをごまかしているのである。

ところが、「七」では毛についた松脂を取ることに苦心するのだが、「此脂たる頗る執着心の強い者で、もし一たび、毛の先へくっ付け様ものなら、雷が鳴つてもバルチツク艦隊が全滅しても決して離れない」ほどだという。「何か分別はあるまいかなと、後と足を折つて思案したが、不図思ひ出した事がある」。それは、主人がお風呂から帰ってきたたびに、「彼の朦朧たる顔色が少しは活気を帯びて、晴れやかに見える」ことである。

主人の様な汚苦しい男に此位な影響を与へるなら吾輩にはもう少し利目があるに相違ない。吾輩は只でさへ此位な器量だから、是より色男になる必要はない様なものゝ、万一病気に罹つて一歳何が月で夭折する様な事があつては天下の蒼生に対して申し訳がない。

実際は「二」で「不器量な野良猫」と呼ばれる程度の猫でありながら、「此位な器量」だの「色男」だのと言っているところも尊大だが、また風呂へ行くことの口実として「天下の蒼生に対して」などと大袈裟なことを

言い出しているのは、「五」で鼠をとらないことの理由として述べた部分と同じく尊大さによる笑いを誘う。

このようにして、「吾輩」は饒舌な口調で自己紹介をしたり、他人を批評したり、自分の偉さを鼓吹したりするとき、実際はただの凡庸な猫であるという身分と全く釣り合わない尊大さが伴うことになる。ここには明らかに言葉とその内実の不均衡のもたらす笑いがある。ところで、そもそもこの凡庸な猫がなぜ「吾輩」などという偉そうな一人称代名詞を用いるのかといえ、飼い猫というものはそれぞれその飼い主の身分を反映し、口調も似るものであるという物語内部の法則に従っているわけで、「吾輩」は「教師の家に居るものだから」、二絃琴の師匠の飼い猫である三毛子が、「尊敬して先生々々といつて呉れる」身分であり（二）、「おれ」と自称する車屋の黒は「言葉付から察するとどうも良家の猫とも思はれない」ということになる（一）。

ところで、このような、語り手の言葉とその内実との不均衡という構造は、第一部で分析した『狂人日記』においても明確に見られたものである。『狂人日記』の語り手である「おれ」も周囲に軽蔑されているにもかかわらず、自分がなんでも分かっている、自分だけが真実を握っていると信じ込んで、逆に高い立場から世人を軽蔑するのである。こんな過度な自信の裏に潜んでいるのは自分が周囲よりはるかに賢明だという根拠のない認識であったが、そのような優越意識と論理性が、もともと知識階級に属していたという「おれ」の出自と無関係でないことは第一部第一章第一節で見たとおりである。つまり語り手の尊大さがその属する階級に多少にも依拠しているという点においても、『吾輩は猫である』と『狂人日記』は共通しているのである。

本節で見てきた「吾輩」の空論や誇大な自己評価の言葉、それらによる奇妙な語りの進展の前提となっているのが、この尊大さであるといえるわけだが、『狂人日記』の語りにもこれに似た構造があり、＜やつらに食われる＞という被害妄想的な意識が極度に昂進することの一因として、自分は周囲の人間より偉いのだという優越意識が彼らへの敵対心を余計に強めているという事態も考えられるのである。

第二節 論理のねじ曲げ

『吾輩は猫である』の語りが喚起する笑いが、一つには「吾輩」と自称する猫の尊大さから来ていることを前節で見てきたが、その分析の過程で気づくことは、「吾輩」がその尊大さを保ち、また自分の言い分を通すために平気で論理をねじ曲げてゆく傾向であり、これが笑いを呼ぶもう一つの要素となっている。たとえば前節で見た「四」の語りに、「人を人と思はない位なら猫を猫とも思ふまい」とあったが、「人を人と思はない」という前提からただちに「猫を猫とも思ふまい」という結論を導く論法には飛躍があるといわざるをえない。

実はこの種の論理的飛躍は『吾輩は猫である』の至るところに見られるもので、それが最もたて続けに繰り返されて大いに笑わせるのが「七」の冒頭で「海水浴の効能」を述べた部分である。まず「海水が何故薬になるかと云へば」無数の「肴^{きかな}」が「一疋も病気をして医者にかゝつた試しがない」からだといい、「何故肴^{きかな}がそんなに丈夫なのか」という問いには「潮水を吞んで始終海水浴をやつて居るからだ」と答える。これらの推論においてすでに飛躍は歴然としているが、さらに「吾輩」はこれらを前提として「海水浴の効能」は「肴に

取つて顕著である以上は人間に取つても顕著でなくてはならん」と結論するのである。この推論では「肴^{さかな}」と人間との身体構造の違いが無視されており、その飛躍が笑いを誘う仕掛けとなっている。「四」での「猫を猫とも思ふまい」の場合も、人と猫の違いを無視して飛躍しているわけだが、この場合は「人を人とも思はぬ」という慣用句をそのまま当てはめたことによるおかしみも加味されている。

このように穴だらけの論法ではあるが、「吾輩」の語りが論理性を志向していることは明らかである。その志向は語りがしばしば三段論法の形を取ろうとするとところに最も顕著に現れる。たとえば、「五」で、珍野家に忍び込んだ泥棒を見て「自然と胸中に湧き出した」感想を述べるくだりで、このような言い方をする。

天地万有は神が作ったさうな、して見れば人間も神の御製作であらう。

ここでは「天地万有は神が作った」という命題を大前提とし、「人間も天地万有の一つである」という自明であるために言及されない命題を小前提として、「人間も神の御製作であらう」という結論を導いているわけで、三段論法を意識した語りといってよい。そして「吾輩」の三段論法は、この例においてはつねに正しいわけではなく、それどころが、明白な誤りを含む場合がしばしばである。たとえば、「十」で、古井武右衛門が送った「艶書」をめぐって論じてゆくくだりで、「吾輩」はこのように述べている。

此胡魔化しをうまくやるものを芸術的良心の強い人と云つて、是は世間から大変珍重される。だから人から珍重される人間程怪しいものはない。

ここでは「胡魔化しをうまくやるものを芸術的良心の強い人と云」うという大前提と「是は世間から大変珍重される」という小前提から、ただちに「人から珍重される人間」は「胡魔化しをうまくやる」ゆえに「怪しい」という結論を導いている。すなわち三段論法の型を踏んでいることは明白であるわけだが、前提として述べられた判断に大いに疑問の余地があるために、結論も正しいとはいひ難いものになっているわけである。

「吾輩」のゆがんだ論理のもう一つのパターンは、前提から結論を導き出すのではなく、あらかじめ決定した結論から逆にその結論に都合のよい前提を拾い上げるという形である。たとえば、「五」で語られる、鼠との戦いの「作戦計画」のなかにこのような奇妙な論理も見られる。

夫にしても三方から攻撃される懸念がある。一口なら片眼でも退治して見せる。二口ならどうにか、かうにか遣つて退けると自信がある。然し三口となると如何に本能的に鼠を捕るべく予期せらるゝ吾輩も手の付け様がない。さればと云つて車屋の黒如きものを助勢に頼んでくるのも吾輩の威厳に関する。どうしたら好からう。どうしたら好からうと考へて好い智慧が出ない時は、そんな事は起る氣遣はないと決めるのが一番安心を得る近道である。又法のつかない者は起らないと考へたくなるものである。

ここで「吾輩」は、「そんな事は起る気遣はない」という結論があらかじめ確定しており、この結論を正当化するために、「どうしたら好からうと考へて好い智慧が出ない時は、そんな事は起る気遣はないと決めるのが一番安心を得る近道である」という、その結論にとって都合のよい前提を恣意的に持ち出しているわけである。

この苦しい論理を補強するために、続けて「吾輩」は「法のつかない者は起らないと考へたくなるものである」という認識を持ち出し、「きのふ貰った花嫁も今日死なんとも限らん」けれども、「いくら心配したつて法が付かんから」心配しないのだというやはり奇妙な論法を用いる。ここでもく心配はしたくない。安心を得たい>というあらかじめ決定した結論のために、都合のよい前提が選ばれているわけである。これに続けて「吾輩」はさらにこう述べている。

吾輩の場合でも三面攻撃は必ず起らぬと断言すべき相当の論拠はないのであるが、起らぬとする方が安心を得るに便利である (1)。安心は万物に必要である (2)。吾輩も安心を欲する (3)。因つて三面攻撃は起らぬと極める (4)。((1) ~ (4) は千による付加)

「三面攻撃」が起らぬと断定する論拠はないと始めながら、「吾輩も安心を欲する」という別次元の事実を持ち込み、それに「因つて」、「三面攻撃は起らぬ」との結論を得ている。この論理に誤りが含まれていることは自明なのだが、その誤った結論を強弁する語りが、三段論法の型を踏んでいるために、一見正当な議論であるかのようにも感じられ、そのもつともらしさが笑いを呼ぶわけである。

しかもこのあたりでは、見てきたような擬似三段論法が次々と繰り出され、重ね合わされてゆくために、二つの三段論法が複合する形を取り、その複雑な印象が笑いを倍化している場合もある。この引用部もまさにそうで、つまるところ (4) の結論を得たい「吾輩」はそのために (1) と (3) の前提を持ち込んで三段論法の形を取ろうとするのだが、(3) に説得力をもたせるために、もう一つの従属的な三段論法を導入している。すなわち (2) の大前提と「吾輩は万物の一つである」という潜在的な小前提から (3) の結論を導いているわけである。

このように精巧な論理を積み上げているようでありながら、「吾輩」の達した結論は誤っていると言わざるを得ない。推論のどこに問題があったかといえば、最大の難点は、「三面攻撃は起らぬ」のような現状認識についての客観的な判断と「安心を欲する」のような内面の心理に入り込んだ主観的な判断とが区別されることなく、論理的につながられてしまうところにあるだろう。

このように、「吾輩」はかなり論理好きな猫で、些細なことでもそれを正当化しようと強弁するが、結局、「吾輩」が論じたものはほとんどねじ曲げられている。さらに「吾輩」はこのねじ曲げた論理をもつともらしい口調で語り、読者の笑いを呼び起こすのである。

これに似た論理のねじ曲げとそれが引き起こす笑いが、『狂人日記』にもあることは第一部第一章の「論理」

の節ですで見たと。そこでは、たとえば、自分は人間であり（大前提）、かつ「やつらは人間を食いやがる」（小前提）、したがって、「おれを食わぬ道理はないわけだ」（結論）という奇妙な三段論法が展開されていたのだが、この論法では「やつらは人間を食いやがる」という小前提が、事実ではないために誤った結論が導かれており、同様の誤った論法は「おれ」の語りの一つのパターンとなっていた。

こうしてみると、本節で見てきた『吾輩は猫である』における擬似三段論法と『狂人日記』におけるそれらとの類似性は否定のしようがない。そしてこの類似の原因を推測するならば、明確な証拠はないとしても、『吾輩は猫である』を愛読した魯迅がそこから漱石の手法を学び取ったという可能性は非常に大きいと考えなくてはならない。いずれにせよ、誤りを含んでいることが読者には明白であるにもかかわらず、語り手はその誤りに気づかないもっともらしい尊大な口調で語り続けるがゆえに、読者が苦笑しながら読み進める、という仕組みが二つの作品に共通していることは間違いないが、その＜誤り＞としては、本節で見てきたような論法上のものばかりではなく、むしろ認識そのものに関わるものもある。次節でそれを見ていくことにしよう。

第三節 認識の歪み

『吾輩は猫である』の笑いが、「吾輩」の尊大さとそれにからむ論理の歪みから来ていることを見てきたが、一般に尊大と見られる人物は自分を強く意識しており、自分が周囲に与える影響を実際以上に大きなものと想像する傾向がある。尊大な語り手として設定された「吾輩」にこの傾向があることは当然ともいえるが、この傾向は時に極端な認識の歪みをもたらしている。

たとえば、「七」で「吾輩」は「螳螂狩り」「蟬取り運動」「松滑り」「垣巡り」という運動をやっていると紹介する。ある日、「吾輩」が「垣巡り」を「四返目に半分程巡りかけたら、隣の屋根から鳥が三羽飛んで来て、一間許り向ふに列を正してとまった」。「吾輩」は垣の上を進んで自分の運動が妨げられたので、勿論不愉快になり、「通るんだおい除き玉へと声をかけた」。すると、

真先の鳥は此方を見てにや／＼笑つて居る。次のは主人の庭を眺めて居る。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いて居る。

「吾輩」は鳥からの「返答を待」っているが、鳥は「吾輩がいくら待つてゝも挨拶もしなければ、飛びもしない」。「吾輩」は敵我の情勢を分析して、「あまり深入りをして万一落ちでもしたら猶更恥辱だ」のように考え、「退却が安全だらう」と決めた。すると、

左向をした鳥が阿呆と云つた。次のも真似をして阿呆と云つた。最後の奴は御鄭寧にも阿呆々と二声叫んだ。

「如何に温厚なる吾輩でも是は看過出来ない」と考えて退去を取りやめ、「進める丈進めと度胸を据ゑて、のそ／＼歩き出す」ことにする。すると、

鳥は知らん顔をして何か御互に話をして居る様子だ。

このように鳥の態度や表情を描写した語りが続くのだが、これらはすべて「吾輩」の意識に映じた主観的な認識であって、客観的な真偽は疑わしい。というのも、この作品の世界では猫は猫同士での会話は自由にできても、人間を含む他の動物とのコミュニケーションは不可能だとされているようだからである。とすれば、鳥が「阿呆」と言ったというのは、「吾輩」の主観においてそう聞こえたということにすぎないし、「にやにや笑って」いたり、「何か御互に話をして」いたりという認識もすべて「吾輩」の主観において構成されたものということになるだろう。

このようにして「吾輩」は鳥の態度や表情を自分の主観において構成し、その上で、それに対して「肝癪」を起こしてゆく。進攻すると決めたのに、「知らん顔」をされた「吾輩」は、「愈^{いよいよ}肝癪に障る」。

漸くの事先鋒を去る事約五六寸の距離迄来てもう一息だと思ふと、勘左衛門は申し合せた様に、いきなり羽搏をして一二尺飛び上がった。其風が突然余の顔を吹いた時、はつと思つたら、つい踏み外ずして、すつとんと落ちた。これはしくちつたと垣根の下から見上げると、三羽共元の所にとまつて上から嘴を揃へて吾輩の顔を見下して居る。図太い奴だ。睨めつけてやつたが一向利かない。脊を丸くして、少々唸つたが、益^{ますます}駄目だ。

「吾輩」のこのような「肝癪」は、すでに指摘したように、「吾輩」の主観において一方的に昂進しているものに過ぎず、鳥の側ではまったくそれに関知していない様子である。そのことがよく見える地位に置かれた読者から見れば、「吾輩」の認識には大きな歪みがあつて、それがまた大いに笑いを呼ぶわけである。

加害する意思のないことの明らかな相手を加害者と見る「吾輩」のこのような歪んだ認識はほとんど被害妄想的であるともいえる。とすれば、それはやはり『狂人日記』の「おれ」の心理を思わせるわけで、鳥が「此方を見てにや／＼笑つ」たり、「阿呆」と連呼したりするという「吾輩」の認識は、趙家の犬が「おれ」の顔を二度もにらん」だり、往来の連中が「おれを見て笑いやがつ」たりするという「おれ」の認識に酷似している。

もちろん被害妄想というテーマは『狂人日記』にとってはその根幹をなすともいえる重要な要素であるのに対して『吾輩は猫である』においては一搜話にすぎないわけで、『狂人日記』における魯迅が『吾輩は猫である』のこの部分に影響を受けたというような断定は控えなければならない。ただ、その可能性が皆無とも言い切れないと思わせるのは、ここでの「吾輩」と「鳥」のやり取りがなかなか印象深いもので、そこから魯迅が強

い印象を受けたとしても不思議はないからである。このことについて、作者漱石の個人史を考慮に入れるならば、漱石自身に被害妄想的な症状が見られたことは、鏡子夫人の回想²⁵などに証言があり、そのあたりの記述が漱石自身の経験を反映しているということも考えられるのである。

それはともかくとして、『狂人日記』の「おれ」がくやつらがおれを食う>という誤った前提を決して疑おうとしないのは、ここでの「吾輩」がく鳥が攻撃してくる>という誤認を不動の前提としているのとまったく同じで、この歪んだ認識が滑稽にして痛ましい展開を生んでゆく仕掛けとなっている。すなわち、蒸し魚は「人間を食いたがっている人間」に見え、老医師は「首斬り役人の化けたの」で、兄貴との会話は「おれ」を殺す相談に聞える（四）という次第である。

それと同じように、鳥たちの動きや鳴き声のすべてが、「吾輩」には自分を「侮辱」するものに思え、「肝癰に障る」。「ひどい目に合せてや」ろうとするが、鳥は飛び去り、「吾輩」は垣根の上から「すんと落ちる」。見事な失敗である。それでもなお「睨めつけてやつた」り、「背を丸くして、少々唸つた」りするが、もちろん無意味である。

俗人に靈妙な象徴詩がわからぬ如く、余が彼等に向つて示す怒りの記号も何等の反応を呈出しない。考へて見ると無理のない所だ。吾輩は今迄彼等を猫として取り扱つて居た。それが悪るい。猫なら此位やれば慥かに答へるのだが生憎相手は鳥だ。鳥の勘公とあつて見れば致し方がない。実業家が主人苦沙弥先生を圧倒し様とあせる如く、西行に銀製の吾輩を進呈するが如く、西郷隆盛君の銅像に勘公が糞をひる様なものである。機を見るに敏なる吾輩は到底駄目に見て取つたから、奇麗さつぱりと縁側へ引き上げた。

読者の客観的な目からすれば、失敗の原因は「吾輩」の能力不足にあることが明らかであり、そのことを反省するのが妥当と思われるのだが、「吾輩」の思考はその方向へは向かわず、鳥らを対等に扱っていたことが「悪るい」のだと責任を相手側に転嫁している。そして自分については下線部のような肯定的な言葉で正当化して平気である。その自分勝手な心理がまた笑いを呼ぶわけだが、この心理は「吾輩」によく見られるものなので、次節でさらに詳しく検討したい。

²⁵ 鏡子夫人は最も妄想の激しかった時期の漱石について次のように回想している。「どういうわけか勿論自分の頭の中でいろいろなことを創作して、私などが言わない言葉が耳に聞こえて、それが古いこと新しいことといろいろな連絡して、幻となって眼の前に現れるものらしく、それにどう備えていいのかこっちには見当が付きません。そうなりだすと何もかもみんな悪意に取りだすので、私のやることなすことが、話せば話したで、黙っていれば黙っているで、何もかも夏目をいじめ苦しめるためにやっていると、こう感じるらしいのです。ですからよほど癪に障るとみえまして、いきなり屏風の蔭へ来て、「お前はここの家にいるのはいやなのだが、おれをいらいらさせるために頑張っているんだろう」などと悪態をついたりなどするのです。」〔夏目鏡子 松岡譲筆録（1928）『漱石の思い出』（『世界の人間像』第13）角川書店 1963 p.351〕

第四節 「吾輩」の「精神勝利法」

第一節『吾輩』の尊大さでも言及したが、「五」では「吾輩」は自分が鼠を取らない理由を陳述して、「非常に大事な身体」で「危険なこと」をやると「大いに天意に背く」からと言う。さらに「吾輩」はこんな理由も述べる。

女賢うしてと云ふ諺はあるが猫賢うして鼠捕り損ふと云ふ格言はまだ無い筈だ。して見れば如何に賢い吾輩の如きものでも鼠の捕れん筈はあるまい。とれん筈はあるまい所か捕り損ふ筈はあるまい。今迄捕らんのは、捕り度ないからの事さ。

これは勿論信用性の低いものである。なぜなら、すでに「吾輩」が自ら語ったところから、「吾輩」には鼠を捕る能力が欠けていることが窺えるからである。まず「一」では或る日、「吾輩」と黒との間に下記のような会話が行なわれる。

「御・め・へは今迄に鼠を何匹とつた事がある」智識は黒よりも余程発達して居る積りだが腕力と勇氣とに至つては到底黒の比較にはならないと覚悟はして居たものゝ、この間に接したる時はさすがに極りが善くはなかつた。けれども事實は事実で詐る訳には行かないから吾輩は「実はとらう／＼と思つてまだ捕らない」と答へた。

この会話から分かるように、「吾輩」は常に偉そうな口ぶりで読者に語るが、鼠を捕ることに關しては、プロである「黒」の前にやはり偽ることができず、一匹も捕っていない事実を白状する。

さらに、「五」の前半で苦沙弥家が泥棒に侵入されるときに、「吾輩」は主人を「にやー／＼と二返許り鳴いて起こさうとしたが、どう云ふものかこの時許りは咽喉に物が痞へて思ふような声が出ない」から、しょうがなく結局「襖と柳行李の間にしばしの間身を忍ばせて動静を窺がふ」。ここからも「吾輩」はかなり臆病な猫だということがよく分かるわけである。

上記から見れば、「吾輩」には鼠を捕る勇氣と技術が相当欠けており、実は「捕れない」と言ってよいぐらいなのだが、そんな「吾輩」が「今迄捕らんのは、捕り度ないからの事さ」と言っている。つまり、「吾輩」は鼠を捕っていないけれども、それはできないというわけではなく、鼠を捕る能力を有しているけれども、いまは「捕りたくない」から捕らないというのである。現実の世界では完全に失敗しているにもかかわらず、自分は本当は能力のある猫なのだという想像的な世界を作り、そこへ逃げこむことで自己満足しているのである。

同じような自己満足の方法は「五」での「敵（鼠）」との大戦の記述の中にも見られる。鼠は「吾輩」の追跡を逃れて、家じゅうを自在に逃げ回る。

小癩と云はうか、卑怯と云はうか、到底彼等は君子の敵でない。吾輩は十五六回はあちら、こちらと気を疲れし心を勞らして奔走努力して見たが遂に一度も成功しない。残念ではあるがかゝる小人を敵にしてはいかなる東郷大将も施すべき策がない。

この「戦争」を始めるに当たって「作戦計画」を立てた「吾輩」は、自分の軍略を自讃して、「どうしても猫中の東郷大将としか思はれない」というほどであったが、その作戦は結局「一度も成功しない」。下線部はその「吾輩」の自己評価の言葉である。即ち、「吾輩」は依然として「東郷大将」の如く立派な「君子」なのだが、相手が「小人」だから「戦争」に負けてもしようがないという。つまり、ここで「吾輩」は「君子」対「小人」という対立項を持ち込み、ずるい「小人」を相手にすれば大概是「君子」の負けになるという世間の通念に依拠することで、自分の敗北を正当化しようとしているわけである。しかしながら、「吾輩」と鼠たちの戦いはそもそも「戦術」と力によって決するほかないもので、「君子」対「小人」のような道徳的な観念とはまったく別の次元の問題である。自らを「君子」の地位に置く「吾輩」は話題を違う次元に移しかえることによって、鼠を「小人」として軽蔑する資格を手に入れる。言い換えれば、「吾輩」は事実上の敗北を精神上的の勝利に変換することによって、実際に受けた屈辱を忘却し、自己満足を実現することができるらしいのである。

「吾輩」のこのような自己満足の方法から、魯迅の読者なら『阿Q正伝』の主人公阿Qが用いる「精神勝利法」を思い出さずにはいないだろう。これについては第三部で詳細な分析を試みるが、概略をいえば、たとえば、殴り合いで完全な敗北を喫しながら、「倅にやられたようなものだ。ちかごろ世の中がへんで……」というふうに次元をすりかえることで自己満足を得てゆく方法である。上に見てきた「吾輩」の自己満足も同じ構造をもっているといってよく、魯迅の「精神勝利法」の構想に『吾輩は猫である』が多少の影響を及ぼした可能性は十分にありうるといえる。

第五節 結び

以上、本章の各節で分析してきたように、「吾輩」は苦沙弥郎に登場する人物や出来事を記述するばかりでなく、「吾輩」自身の心境や批評なども尽く読者に提示する。「吾輩」が自分の饒舌さを存分に発揮する過程で、その語りには、尊大な口調、論理の捻じ曲げ、認識の歪み、あるいは被害妄想のような、第一部で分析した『狂人日記』の語りと共通する特徴が数多く現れていることがわかった。また、「精神勝利法」を思わせる自己満足の方法のような、『狂人日記』よりむしろ『阿Q正伝』に通じる心理表現も書き込まれていることを指摘した。

ところで、本稿の第一部「『狂人日記』の二声構造」では、『狂人日記』の語りには「おれ」の精神病患者らしい<異者>の語りが行進すると同時に、社会現実への批判というもうひとつの次元も存在することを分析

した。即ち、『狂人日記』で「おれ」の声と作者の声が重なる形で進行し、ときには一体化しているのである。『吾輩は猫である』では、猫という＜異者＞が人間の常識に囚われない自由な語りを繰り広げているわけだが、それでは、この語り手である「吾輩」は、その語りを操縦しているはずの作者とどのような関係にあるのか。この問題について、第二章で『狂人日記』の場合と対照しながら考察してみたい。

第二章 「吾輩」の語りの＜二声構造＞

常識では人間より劣位の存在である猫の「吾輩」が、むしろ人間より優位にあるかのような尊大な口調で饒舌に人間を批判してゆくという語りのスタイルが『吾輩は猫である』の笑いを生み出していることを前章で見てきた。人間どもに対峙する「吾輩」の自意識にはなかなか強烈なものがあって、たとえば「二」では、「吾輩」は「新年来多少有名になつたので」、「某画家」が「吾輩」の絵を描いた葉書を主人にくれたのだが、主人がそれを猫の絵と理解しないので、じれったく思い、次のように述べる。

出来る事なら其絵が吾輩であると云ふ事を知らしてやりたい。吾輩であると云ふ事は好し分らないにしても、せめて猫であるといふ事丈は分らして遣りたい。然し人間といふものは到底吾輩猫属の言語を解し得る位に天の恵に浴して居らん動物であるから残念ながら其儘にして置いた。

一寸読者に断つて置きたいが、元来人間が何ぞといふと猫々と、事もなげに軽侮の口調を以て吾輩を評価する癖があるは甚だよくない。人間の糟^{くず}から牛と馬が出来て、牛と馬の糞から猫が製造された如く考へるのは自分の無智に心付かんで高慢な顔をする教師杯には有勝の事でもあらうが、はたから見て余り見ともいへ者ぢやない。いくら猫だつて、さう粗末簡便には出来ぬ。よそ目には一列一体、平等無差別、どの猫も自家固有の特色杯はない様であるが、猫の社会に這入つて見ると中々複雑なもので十人十色といふ人間界の語は其儘こゝにも応用が出来るのである。

「一」、「二」においては、このように「猫属」の一員として人間界に対峙する意識をもつ「吾輩」だが、「三」以降では、この構図に微妙な変化が生じていることがわかる。「三」では珍野家を訪問した鼻子と主人らの会話を聞いた「吾輩」が、鼻子への反発から寒月への「同情」を深め、「奮発して敵城へ乗り込んでその動静を偵察して」やろうと決心することになる。すなわち、寒月や迷亭など主人を取り巻く人間たちの側について行動するわけで、このような場合には、「一」、「二」で顕著だった人間に対峙する意識が薄くなっていることは勿論である。実はこの章の冒頭部分で、「吾輩」はすでにこのように言っていたのである。

段々人間から同情を寄せらるゝに従つて、己が猫である事は漸く忘却してくる。猫よりはいつの間にか人間の方へ接近して来た様な心持になつて、同族を糾合して二本足の先生と雌雄を決しやう杯と云ふ量見は昨今の所毛頭ない。夫のみか折々は吾輩も亦人間世界の一人だと思ふ折さへある位に進化したのは頼母しい。

続けて「吾輩」は「敢えて同族を軽蔑する次第ではない」けれども、「性情の近き所」に身を置くのが自然で

あるという論理で、自分が「猫属」を離れ、人間の側に同化してゆくことの弁明を述べてゆく。「人間同等の気位で彼等の思想、言行を評議したくなる」のだと言い、「吾輩はどこ迄も人間になり済まして居るのだから」とも述べる。たとえば、「四」では、「吾輩」が金田邸に忍び込むと、金田夫婦が娘と水島寒月の縁談について来客の鈴木藤十郎と相談しているところだった。その三人は苦沙弥について下記のような会話を交わす。

「なあに、只あの男の前を何とか云つて通つたんださうです、すると、いきなり、ステツキを持つて跣足で飛び出して来たんださうです。よしんば、些つとやそつと、何か云つたつて小供ぢやありませんか髯面の大僧の癖にしかも教師ぢやありませんか」

「左様教師ですからな」と御客さんが云ふと、金田君も「教師だからな」と云ふ。

「吾輩」はこれを縁の下で聞き、次のように批評する。

教師たる以上は如何なる侮辱を受けても木像の様に大人しくて居らねばならぬとは此三人の期せずして一致した論点と見える。

この言葉の裏には、教師だって「侮辱を受け」たら反発する権利があるという「吾輩」の反発を読むことができる。「吾輩」のこの態度は「一」、「二」と比べれば明らかな差異が見える。「一」、「二」においては「吾輩」は主人のことを「我儘」「牡蠣の如く」と評したように、かなり主人を馬鹿にしている。ところが、そんな「吾輩」が三人の主人に対する悪口を聞いた後、嬉しくなるところか、逆に不満に思い、主人側の代弁者になって文句をこぼしているわけである。ここからも「吾輩」は「己が猫である事は漸く忘却して」きて、自分も「亦人間世界の一人だと思ふ」ようになっている傾向が窺える。

本章ではこのように「猫属」でなく、むしろ人間の立場に接近した「吾輩」の語りを取り出して『狂人日記』の語りと対照しながら分析してゆく。

第一節 「吾輩」の苦沙弥らへの批評的意識

『吾輩は猫である』における「猫属」の世界では、猫たちの口調がそれぞれ自分の飼い主の特徴を帯びていることは前章の第一節で言及した。例えば、車屋の「黒」は「無学」で、言葉が乱暴である。「吾輩」がほのぼのとした慕情を感じる「三毛子」も、やはりその飼い主である二絃琴の師匠という身分にふさわしい言葉使いをしている。「吾輩」自身は教師の猫だから、「三毛子」に「先生」と呼ばれ、「我輩も先生と云はれて満更悪い心持ちもしないから、はい／＼と返事をして居る」。

このような「吾輩」の口調は確かに主人の苦沙弥らの知識階級に似たものであるが、彼の語る内容も苦沙弥

らと一致しているかといえ、少なくとも「二」までは、そうとはいえない。そもそも「吾輩」が苦沙弥に向けた目は初めから非常に批判的であって、たとえば、冒頭近く、初めて主人を紹介する部分は次のようである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師ださうだ。学校から帰ると終日書齋に這入ったぎり殆んど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思つて居る。当人も勉強家の如く見せて居る。然し実際はうちものがいふ様な勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが彼はよく昼寐をして居る事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらして居る。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活発な徴候をあらわして居る。其癖に大飯を食ふ。大飯を食つた後で、「タカチヤスターゼ」を飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。是が彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考へる事がある。教師といふものは実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんな寐て居て勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。

このような「吾輩」の苦沙弥を軽んじる気持ちや批評意識は、やがて珍野家に集まる迷亭や寒月など、苦沙弥と同類の知識人たちにも拡張されてゆく。例えば、「二」では、迷亭の「首懸の松」の話、寒月の「吾妻橋」事件の話に続いて、苦沙弥が妻を連れて歌舞伎を見に行けなかったという話をするのを聞き、「吾輩」はそれまで「了解しかねる」がゆえに「恐ろしい」とも感じていた主人のことを「急に軽蔑したくなつた」という。なぜなら、三人の話は「可笑しくもなく悲しくもなく」、「人間といふものは時間を潰す為めに強いて口を運動させて」いるもののように見え、「負けぬ気になって愚にもつかぬ駄弁を弄」しているとしか思えなかったからである。

要するに主人も寒月も迷亭も太平の逸民で、彼等は糸瓜の如く風に吹かれて超然と澄し切つて居る様なものゝ、其実は矢張り娑婆気もあり、慾気もある。競争の念、勝たう／＼の心は彼等が日常の談笑中にもちら／＼ほのめいて、一歩進めば彼等が平常罵倒して居る俗骨共と一つ穴の動物になるのは猫より見て気の毒の至りである。

このように苦沙弥、迷亭らを痛烈に批評する言説から、人間世界から離れている場所に身を置き、人間どもを観察したり、嘲笑したりするという「吾輩」の態度が明白に見て取れる。

ところが、「吾輩」のこの傾向は長くは続かない。物語の進展につれ、「吾輩」は微妙に態度を変え、むしろ苦沙弥、迷亭らと同じ立場に立って、実業家階級と対峙するようになるのである。

第二節 実業家階級への反感

『吾輩は猫である』の「三」では、金田夫人が娘の富子との縁談がある寒月について情報を得ようと苦沙弥邸を訪問することによって、実業家と呼ばれる人々の世界が「吾輩」の視野に初めて入ってくる。「吾輩」は金田夫人を初めて見た時、その鼻についての印象をこのように述べる。

鼻丈は無暗に大きい。人の鼻を盗んで来て顔の真中へ据ゑ付けた様に見える。三坪程の小庭へ招魂社の石灯籠を移した時の如く、独りで幅を利かして居るが、何となく落ち付かない。其鼻は所謂鍵鼻で、一度は精一杯高くなって見たが、是では余りだと中途から謙遜して、先の方へ行くと、初めの勢に似ず垂れかゝつて、下にある唇を覗き込んで居る。かく著るしい鼻だから、此女が物を云ふときは口が物を言ふと云はんより、鼻が口をきいて居るとしか思はれない。吾輩は此偉大なる鼻に敬意を表する為め、以来は此女を称して鼻子／＼と呼ぶ積りである。

金田夫人の鼻について「吾輩」は持ち前の饒舌さを發揮し、大袈裟な論評を繰り広げている。先にも述べたように、「吾輩」は小説の冒頭から自分が「猫属」であるという自覚を持ち、その議論も人間全体と対峙していたわけである。だから、鼻に関する皮肉もこれまで通りの「吾輩」流の毒舌と同質のものであるように見える。ところが、先を読んでいくと、金田夫人の鼻についての「吾輩」の意見は苦沙弥ら人間たちの見方とそれほど変わらないことがわかり、「吾輩」が「猫属」を離れて人間側に立ちつつあることが見えてくる。すなわち、金田夫人が帰った後に寒月が来て、苦沙弥と迷亭と三人で金田夫人の鼻を笑いものにした議論を長々と繰り広げるのである。三人は夫人の鼻について俳体詩を作って興じ、また「美学」「進化論」「力学」など多方面の知識を適用して議論を続ける。金田夫人の鼻についてこのような批評さえ述べる。

ジュリアス、シーザーの鼻はたいしたもの相違御座いません。然しシーザーの鼻を鉋でちよん切つて、当家の猫の顔へ安置したらどんなもので御座いませうか。喩へにも猫の額と云ふ位な地面へ、英雄の鼻柱が突兀として聳えたら、碁盤の上へ奈良の大仏を据え付けた様なもので、少しく比例を失するの極、其美的価値を落す事だらうと思ひます。

金田夫人についての迷亭の形容（下線部）は、さきの引用文の下線部の「三坪程の小庭へ招魂社の石灯籠を移した時の如く」という「吾輩」の言い方と同工異曲である。ここから見ると、金田夫人の顔を見た時に、その「偉大なる」鼻は勿論「吾輩」のみならず、苦沙弥、迷亭らも驚かせたのである。しかも、前の「吾輩」の批評とその後の苦沙弥、迷亭らの観点は一致しているのみならず、いずれも誇大な比喻と饒舌な口調を使っているから、同じ人物の違った時点での発話のようにも見える。したがって、金田夫人の鼻に関する議論におい

て、「吾輩」が「己が猫である事は漸く忘却して」きて、「いつの間にか人間の方へ接近して来た様な心持になつて」いくという傾向がすでに現れていると読むことができる。

金田夫人が登場した後、寒月の縁談について苦沙弥、迷亭との会話を聞いているうちに、金田夫人が苦沙弥に対する言葉使いはあまりにもぞんざいに聞こえ、「是では丸で喧嘩をしに来た様なものである」と「吾輩」は不快そうに言う。さらに三人の口喧嘩のような会話が終る頃、「吾輩」は下記のように批評する。

鼻子は是で寒月に関する大抵の質問を卒へたものと見えて、「是は甚だ失礼を致しました。どうか私の参つた事は寒月さんへは内々に願ひます」と得手勝手な要求をする。寒月の事は何でも聞かなければなら
ないが、自分の方の事は一切寒月へ知らしてはならないと云ふ方針と見える。

下線部のように批評する「吾輩」は自分の立場に立つよりは、むしろ苦沙弥や迷亭の側に立って、彼らに代わって論評しているように聞こえる。このあと、「吾輩」は「寒月君の爲め」「義侠心を起こして」「敵城へ乗り込んで其動静を偵察」することになるのだが、その「敵城」すなわち金田邸を初めて見ての感想は次のようである。

向ふ横町へ来て見ると、聞いた通りの西洋館が角地面を吾物顔に占領して居る。この主人も此西洋館の如く傲慢に構へて居るんだらうと、門を這入つて其建築を眺めて見たが只人を威圧し様と、二階作りが無意味に突つ立つて居る外に何等の能もない構造であつた。迷亭の所謂月並とは是であらうか。

下線を施した語句はすべて語り手の主観を投影したものであつて、この描写はおよそ客観的な記述とはいえないものである。「吾物顔」「傲慢」「只人を威圧し」といった表現のすべては、先ほどの鼻子の印象を投影することによって構成された「吾輩」の主観にすぎないはずである。これほど極端な主観的な語りをするようになった「吾輩」は、もはや人間の外側から人間どもを観察したり嘲笑したりする猫ではなくなり、人間の世界に入りこみ、その中の一派である苦沙弥先生たちの側に立って、彼らに敵対する一派である鼻子ら実業家階級と対峙するようになったと考えられる。

そのことを最も端的に表しているのが、「三」の末尾近くで、迷亭が長々と「学理的論証」を述べたあとの次のような展開である。

「是には当家の御主人は無論の事、そこに寝て居らるゝ猫又殿にも御異存は無からうと存じます」主人は漸々起き返つて「そりや無論さ。あんなものゝ娘を誰が貰ふものか。寒月君もらつちやいかんよ」と大變熱心に主張する。吾輩も聊か賛成の意を表する為ににやー／＼と二声許り鳴いて見せる。

すなわち、迷亭ら人間たちと「吾輩」とでお互いに同意見であることが確認されているわけである。

「吾輩」の立場は「四」以降も持続することになる。「八」では珍野家に隣接する落雲館中学の生徒たちと苦沙弥との間に「大戦」が勃発するのだが、やがてこの戦いが金田家の金の力で仕組まれていたものであったことがわかる。すると、「吾輩」はこう考える。

おや今度も亦魂胆だ、成程実業家の勢力はえらいものだ、石炭の燃殻の様な主人を逆上させるのも、苦悶の結果主人の頭が蠅滑りの難所となるのも、其頭がイスキラスと同様の運命に陥るのも皆実業家の勢力である。地球が地軸を廻転するのは何の作用かわからないが、世の中を動かすものは慥かに金である。此金の功力を心得て、此金の威光を自由に発揮するものは実業家諸君を置いて外に一人もない。太陽が無事に東から出て、無事に西へ入るのも全く実業家の御蔭である。

表向き「実業家の勢力」や「金の功力」を讃め続けるこれらの文章が、実は実業家への強烈な厭味であり、ここで「吾輩」が主人の苦沙弥と同じ立場に立って実業家階級に対する強い反感を表明していることは読者には明白である。「吾輩」の主人思いは上の一節に続く次のような文章にも明瞭に見て取れる。

それにしても冥頑不靈の主人も今度は少し悟らずばなるまい。是でも冥頑不靈で押し通す了見だと危ない。命が危ない。主人の尤も貴重する命があぶない。彼は鈴木君に逢つてどんな挨拶をするのか知らん。其模様で彼の悟り具合も自から分明になる。愚図々々しては居られん、猫だつて主人の事だから大に心配になる。早々鈴木君をすり抜けて御先へ帰宅する。

このように、いつか「猫属」の立場を離れて特定の人間の側に立つようになった「吾輩」は、実業家の勢力に屈しない苦沙弥の意地を肯定し、自分も苦沙弥と同じ立場に立って、金田流を嫌悪する態度を示しているのである。

序章に置いた語りの構造を示す図 (p.3) は、この変化をも示すものとなっているので、参照してほしい。すなわち「一」「二」において人間界全体に対して優越的な立場から批判するようであった「吾輩」が「三」以降ではむしろ人間の一部である苦沙弥グループと一体化し、金田家に代表される世人グループに対し優越感と批評意識をもつようになるという変化である。

ところで、この図の下半分を『狂人日記』の図 (p.3) と対照してみよう。語り手「吾輩」と主人公とが一体化したと見なすと、「主人公兼語り手」が「世人」に対し優越感をもち批判するという構造において、『狂人日記』の図の「おれの日記」内部（網かけ部分）と全く同じ形を取っていることがわかる。

「吾輩」の態度を『狂人日記』の「おれ」と対照してみると、第一部第一章の第二節「伝統社会の有力者たち」で述べたとおり、『狂人日記』の作品世界では「おれ」も伝統社会を支配する有力者たちに優越感をもって

対峙し、彼等を痛烈に批判するのである。この構図は、『吾輩は猫である』において「吾輩」が「実業家」階級に対して嫌悪と批判を示すのと同じ形であり、この嫌悪が最も端的に表現されていたのが、さきに引用した「八」における「おや今度も亦魂胆だ、成程実業家の勢力はえらいものだ」に始まる一節であったといえる。

このような観点から見ると、＜異者＞である主人公兼語り手が一般社会の有力者に対して優越感や嫌悪感をもって対峙するという構図において、『吾輩は猫である』と『狂人日記』との間に驚くほど大きな類似性のあることがわかる。この類似をまったくの偶然と見なすことはむずかしい。ここで考えられるのは、もちろん『吾輩は猫である』を愛読した魯迅が、『狂人日記』執筆に当たって、その構図を借用したこと、あるいは特に『吾輩は猫である』を意識したわけではないとしたら、無意識のうちにその影響を受けていたということである。

第三節 実業家に迎合する世人に対する風刺

すでに前節で述べてきたとおり、「吾輩」は実業家を軽蔑しているのだが、このほかに、金銭の力に屈服して実業家に迎合する世人に対しても軽蔑の態度を示している。その人たちは車屋、二絃琴の師匠、落雲館の生徒たち及び金田家のおかげで上京した、実業家階級に入りつつある鈴木藤十郎で、いずれも金田家の金力に屈服したものである。本節では車屋一家と二絃琴の師匠を例として、彼等に対する風刺を分析してみる。

たとえば、苦沙弥の近所に住んでいる車屋が常に苦沙弥邸の垣根に近寄り、その談話を盗聴して金田家に報告することは、「三」で「鼻子」と苦沙弥の口論によって明らかになっている。苦沙弥はこのことを知り、「寒月の事だつて、誰のことだつて——全体あの車屋の神さんは気に食はん奴だ」と怒ったのだが、実は「神さん」に代表される車屋一家は「一」「二」においてすでに批判的に語られているのである。

まず、「一」では、車屋の飼い猫である「黒」が鼠を捕る能力を吹聴した後に、「吾輩」は「君が余り鼠を捕るのが名人で鼠許り食ふものだからそんなに肥つて色つやが善いのだろう」と褒めてみるが、「黒のご機嫌をとる為めの此質問は不思議にも反対の結果を呈出した」。

彼は喟然として大息していふ。「考げえると詰まらねえ。いくら稼いで鼠をとつたつて——一てえ人間程ふてえ奴は世の中に居ねえぜ。人のとつた鼠を皆んな取り上げやがつて交番へ持つて行きあがる。交番じや誰が捕つたか分らねえから其たーんーびに五錢宛くれるぢやねえか。うちの亭主なんか己の御蔭でもう壱円五十錢位儲けて居やがる癖に碌なものを食せた事もありやしねえ。おい人間てものあ体の善い泥棒だぜ」さすが無学の黒も此位の理窟はわかると見えて頗る怒つた容子で脊中の毛を逆立てゝ居る。

下線部の批評は人間全体に対する冷罵だと理解できるが、ここで「黒」が言っている「人間」とは、具体的には飼い主の車屋である。この車屋は「黒」の捕った鼠でお金を儲けているので、「黒」に「泥棒」と見なされているわけである。また、「二」では、「吾輩」と黒が談話中、車屋の神さんが牛肉を注文する声が聞こえ、黒はそ

れを嘲罵する。

「ちよいと西川さん、おい西川さんてば、用があるんだよ此人あ。牛肉を一斤すぐ持つて来るんだよ。いゝかい、分かつたかい、牛肉の堅くない所を一斤だよ」と牛肉注文の声が四隣の寂寞を破る。「へん年に一遍牛肉誂へると思つて、いやに大きな声を出しやあがらあ。牛肉一斤が隣り近所へ自慢なんだから始末に終へねえ阿魔だ」と黒は嘲りながら四つ足を踏張る。

車屋の虚栄心は下線をほどこした「黒」の嘲笑によって明らかに提示される。つまり、車屋の神さんが「年に一遍牛肉誂へる」際に、誰でも聞えるように注文する行動の裏には、自分が実際以上に裕福な生活を送っていると見せかけたい虚栄心が働いているわけである。ところが、自慢に牛肉を注文する行動が、かえって車屋家の人間がめったに牛肉を食べられない実情を人に知らせてしまうということが、神さんには分からないのである。

この「神さん」を苦沙弥がなぜ「氣に食はん」のかは明記されていないけれども、このように愚かで虚栄心が強ければ苦沙弥の気に入らないのは当然だろう。またこのような人間であれば、金田家のために尽力するのも全く不思議ではない。というのは、金田家の味方になれば、実業家階級に近づけるばかりか、ある程度の金銭も得られるかもしれないので、大いに神さんの虚栄心と金銭への欲求を満たせるからである。こうして、「吾輩」の語りのみならず、「黒」や「鼻子」など登場人物の科白を通して、車屋一家への風刺も明白に表されるのである。

同様に風刺の対象となる人間には、二絃琴の師匠がいる。「二」で「吾輩」は三毛子を訪問したときに、このような会話を交わすのである。

「あれでももとは身分が大変好かつたんだつて。いつでも左様仰しやるの」「へえ元は何だんつたんです」「何でも天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行つた先きの御つかさんの甥の娘なんだつて」「何ですつて?」「あの天璋院様の御祐筆の妹の御嫁にいつた……」「成程。少し待つて下さい。天璋院様の妹の御祐筆の……」「あらさうちやないの、天璋院様の御祐筆の妹の……」「よろしい分りました。天璋院様のでせう」「えゝ」「御祐筆のでせう」「さうよ」「御嫁に行つた」「妹の御嫁に行つたですよ」「さう／＼間違つた。妹の御嫁に入つた先きの」「御つかさんの甥の娘なんですとさ」「御つかさんの甥の娘なんですか」「えゝ。分つたでせう」「いゝえ。何だか混雑して要領を得ないですよ。詰る所天璋院様の何になるんですか」「あなたも余つ程分らないのね。だから天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行つた先きの御つかさんの甥の娘なんだつて、先つきつから言つてるんぢやありませんか」「それはすつかり分つて居るんですがね」「夫が分りさへすればいゝんでせう」「えゝ」と仕方がないから降参をした。吾々は時とすると理詰の虚言を吐かねばならぬ事がある。

「天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行つた先きの御つかさんの甥の娘」はかなり滑稽な表現である。こんなに長く迂回をして二絃琴の師匠はやっと「天璋院様」と関係づけることができる。三毛子の語りから、その主人である二絃琴の師匠が上述の関係を常に誇りにしていることが窺える。二絃琴の師匠は車屋の神さんより上品な人間であるはずだが、無理矢理に「天璋院様」と関係づけることによって、自分の身分を上げていこうとする虚栄心からみれば、彼女は本質的に車屋の奥さんと同様である。さらに「吾輩」と三毛子とこのやりとりで、おそらくは何度も聞かされているために三毛子がきわめて流暢に暗唱するのに対し、初めて聞く「吾輩」がこの長いくだりをどうしても覚えられず、何度も言い方を確かめ、何度も間違ふことで滑稽さが倍化している。このことも、この師匠の虚栄心に対する風刺を強めていると言える。

本節で分析してきたとおり、『吾輩は猫である』の作品世界では、実業家階級のほか、彼らの金力や勢力に屈する人々も金田家と同じ立場にたち、苦沙弥らの知識階級と対峙関係に立っている。つまり、苦沙弥らの世界以外における世人は、実業家階級と、彼らに迎合する人間たちという二つのグループに分けられ、両者はともに、「あの教師と来たら本より外に何も知らない変人なんだからねえ」とか(三)、「世間見ずの我儘」だとか「余つ程の酔狂人」だとか(四)、口をきわめて苦沙弥らを批判しながら、逆に苦沙弥らに批判されてもいるわけである。

ここで『狂人日記』のことを考えたいのだが、主人公兼語り手が対峙する「世人」が二つのグループに分かれるという『吾輩は猫である』の構図は、『狂人日記』にもたしかに共有されていたものである。即ち、『狂人日記』で、主人公兼語り手である「おれ」に対峙するのは、「古久先生」、「趙貴翁」のような伝統社会の支配者と、支配者たちに圧迫されながら反抗せず、彼らに迎合する「やつら」という二つのグループであり、両者がともに「おれ」の強い批判を受けていたことは第一部第二章の第一節「権力に迎合する「やつら」」と第二節「伝統社会の有力者たち」で分析したとおりである。

ただ異なるのは、権力に迎合するグループへの批判や風刺という点において、『吾輩は猫である』の語りが比較的穏やかで滑稽を主眼としているのに対して、『狂人日記』ではそれがきわめて直接的な痛罵となっており、有力者にいじめられても反抗せず、権力に迎合し続ける「やつら」への「おれ」の怒りはそのまま作者の苛立ちでもあると感じさせることである。ここでも魯迅は、どの程度明確に意識したかは不明だが、結果的に『吾輩は猫である』の「世人」二分の構図を借用した形となり、かつそこに『吾輩は猫である』になかった猛毒を盛ることに成功したのだといえる。

第四節 「吾輩」の苦沙弥らへの同化

このように実業家階級と彼らに迎合する世人に対峙することを通して「吾輩」は次第に苦沙弥らと同じ立場に立つようになる。たとえば、「八」で、苦沙弥が落雲館中学校の生徒たちにいたずらをされた時に、「吾輩」はこのように言う。

教育の結果程恐しいものはない。彼等は單に座敷の正面に逼るのみならず、この正面に於て歌をうたひだした。何と云ふ歌か忘れて仕舞つたが、決して三十一文字の類ではない。もつと活潑で、もつと俗耳に入り易い歌であつた。驚ろいたのは主人許りではない、吾輩迄も彼等君子の才芸に嘆服して覚えず耳を傾けた位である。然し読者も御案内であらうが、嘆服と云ふ事と邪魔と云ふ事は時として両立する場合がある。この両者が此際図らずも合して一となつたのは、今から考へて見ても返す／＼残念である。主人も残念であつたらうが、已を得ず書齋から飛び出して行つて、こゝは君等の這入る所ではない、出給へと云つて、二三度追ひ出した様だ。所が教育のある君子の事だから、そんな事で大人しく聞く訳がない。追ひ出されればすぐ這入る。這入れば活潑なる歌をうたう。高声に談話する。而も君子の談話だから一風違つて、おめえだの知らねえのと云ふ。そんな言葉は御維新前は折助と雲助と三助の専門的智識に属して居たさうだが、二十世紀になつてから教育ある君子の学ぶ唯一の言語であるさうだ。

下線部では、「吾輩」はいたずらをしている生徒のことを「教育のある君子」と呼んでおり、その歌を「俗耳に入り易い歌」だと形容し、さらに「おめえだの知らねえの」を「君子の談話」だと言っている。言うまでもないが、他人の庭でいたずらをするのは決して「教育のある君子」のすべきことではなく、「おめえだの知らねえの」も上品な談話ではない。これらの言葉はすべて皮肉であり、実際にはかえって生徒たちのことを嫌悪する態度を読者に示しているのである。このように「吾輩」はもはや「猫属」である自覚を忘れ、むしろ知識ある人間の立場に立っているわけである。

「三」以降明確化してきたこの傾向はこの「八」ではすっかり定着しているといえるが、さらに「九」に至ると、主人とのこの一体化について「吾輩」自ら弁明するような文章も現れる。この章では苦沙弥邸に迷亭のおじ、八木独仙など一風変わった人物が相次いで現れ、立町老梅こと天道公平という「瘋癲院」のことなどを話題に大いに哲学的な論議をして帰ってゆく。そしてその後に苦沙弥の考えたことが数頁にも渡って述べられるのだが、それを記述し終えたところで「吾輩」はこう注釈するのである。

吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑ふものがあるかも知れんが、此位な事は猫にとつて何でもない。吾輩は是で読心術を心得て居る。いつ心得たなんて、そんな余計な事は聞かんでもいい。ともかく心得て居る。人間の膝の上へ乗つて眠つてゐるうちに、吾輩は吾輩の柔かな毛衣をそつと人間の腹にこすり付ける。すると一道の電気が起こつて彼の腹の中の行きさつが手にとる様に吾輩の心眼に映ずる。先達て杯は主人がやさしく吾輩の頭を撫で廻しながら、突然此猫の皮を剥いでちやんちやんにしたら嘸あたゝかだよからうと飛んでもない了見をむら／＼と起したのを即座に氣取つて覚えずひやつとした事さへある。怖い事だ。当夜主人の頭のなかに起こつた以上の思想もそんな訳合で幸にも諸君に御報道する事が出来る様に相成つたのは吾輩の大に榮譽とする所である。

特に下線部に端的に示されているように、すすんで、「榮譽」とさえ感じながら、主人と一体化した「吾輩」は、主人のほとんどあらゆる側面について肯定的となり、たとえば「冷淡」さのような通常はマイナスに評価される性質をプラスに転化さえするようになる。たとえば、「十」では、生徒の古井武右衛門がハイカラで生意気な金田富子をからかうために、友人三名と共謀して艶書を送るが、名前を貸したのが急に不安になって、退学させられないように苦沙弥宅へ哀願をしに来る。ところが、苦沙弥はいとも冷淡である。その理由について長々と述べてゆくくだりに、本章の第二節「論理のねじ曲げ」にすでに引用した「胡魔化しをうまくやるものを芸術的良心の強い人と云」うという逆説的な定義が出てくるのだが、それに続けて、「吾輩」は以下のように批評する。

此点に於て主人は寧ろ拙な部類に属すると云つてよろしい。拙だから珍重されない。珍重されないから、内部の冷淡を存外隠す所もなく発表して居る。彼が武右衛門君に対しては「さうさな」を繰り返して居るのでも這裏の消息はよく分る。諸君は冷淡だからと云つて、決して主人の様な善人を嫌つてはいけな。冷淡は人間の本来の性質であつて、其性質をかくさうと力め^つないのは正直な人である。もし諸君がかゝる際に冷淡以上を望んだら、夫こそ人間を買ひ被つたと云はなければならない。

見ようによっては、主人の「冷淡」さは非難や輕蔑に値するものなのかもしれない。それを「吾輩」は「冷淡」は人間の本来の性質であつて、其性質をかくさうと力め^つないのは正直な人である」とあえて弁護している。ここでは「吾輩」はすべてを客観的に見る神のような位置に立つことを放棄して、次第に苦沙弥らの精神世界に近づいてきて、最後に同一化するのである。つまり苦沙弥に代表される知識人たちのグループに属することに決めることで、中立性を放棄し、あえて党派性を選択したのだともいえる。この選択により、「吾輩」の風刺は、「一」「二」で展開されていた人間全体への風刺から、むしろ人間の一部すなわち苦沙弥らが対峙する世間一般の人々への風刺へと絞られる結果となる。

第五節 世間風刺

『吾輩は猫である』の苦沙弥邸に登場した知識人の苦沙弥、迷亭、寒月らがどんな人間かというと、無論彼らはみな世間一般に融合しない存在である。具体的に言えば、実業家の金田と庶民の車屋などが彼らのことを変人のように見ているにもかかわらず、彼らはこの世間から離れている場所で世の中を冷静に観察したり、皮肉ったりするわけである。苦沙弥らが世間一般と対峙している証拠として、「六」では苦沙弥が「大和魂」を論じた「短文」を挙げることができる。

「大和魂！と叫んで日本人が肺病やみの様な咳をした」

「起し得て突兀ですね」と寒月君がほめる。

「大和魂！と新聞屋が云ふ。大和魂！と掏摸^{たうもく}が云ふ。大和魂が一躍して海を渡つた。英国で大和魂の演説をする。独逸で大和魂の芝居をする」

「成る程こりや天然居士以上の作だ」と今度は迷亭先生がそり返つて見せる。

「東郷大將が大和魂を有つて居る。肴屋の銀さんも大和魂を有つて居る。詐偽師、山師、人殺しも大和魂を有つて居る」

「先生そこへ寒月も有つて居るとつけて下さい」

「大和魂はどんなものかと聞いたら、大和魂さと答へて行き過ぎた。五六間行つてからエヘンと云ふ声が聞こえた」

「その一句は大出来だ。君は中々文才があるね。それから次の句は」

「三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か。大和魂は名前の示す如く魂であるから常にふら／＼して居る」

「先生大分面白い御座いますが、ちと大和魂が多過ぎはしませんか」と東風君が注意する。「賛成」と云つたのは無論迷亭である。

「誰も口にせぬ者はないが、誰も見たものはない。誰も聞いた事はあるが、誰も遇つた者がない。大和魂はそれ天狗の類か」

この「六」が雑誌掲載された1905年10月は、同年9月の日露戦争終結から間もない時期であり、当時の日本では至るところで「大和魂」が口にされていた。ところが、苦沙弥の詩の中では、「大和魂」を「誰も口にせぬ者はないが、誰も見たものはない。誰も聞いた事はあるが、誰も遇つた者がない。大和魂はそれ天狗の類か」と形容している。「大和魂」は一体どんなものであるかを追究すると、結局誰もわからないもので終わってしまう主張がそこに見られる。国民がこれほど熱中しているスローガンも、実ははかない存在にすぎないというのである。しかも皮肉なことに、「大和魂」を唱えているのは軍人の「東郷大將」や、鼓吹が上手な「新聞屋」ばかりでなく、「肴屋の銀さん」のような下流社会の人々、さらには「掏摸」「詐偽師」「山師」「人殺し」のような犯罪者たちにまで共有されているというのである。日本人のほとんど全体に対する強烈な皮肉であり、この皮肉は「大和魂！と叫んで日本人が肺病やみの様な咳をした」という冒頭の第一行にすでに端的に示されていたともいえる。

苦沙弥のこの「短文」を聞いた面々は、「不思議な事に迷亭は此名文に対して、いつもの様にあまり駄弁を振はなかった」のをはじめとして、みな肯定的のようである。「吾輩」もまたそのまま「失敬して庭へ蠅螂を探しに出た」様子からして、異議はないようである。つまり「吾輩」を含む苦沙弥グループは一致して、日本人の「大和魂」騒ぎに対して、冷ややかな態度を示しているのだといえる。

以上のように苦沙弥グループと一体化した形においてではなく、「吾輩」が独自に語る形で世間への批判態度を明白に示す場合もある。たとえば、「十」で武右衛門が金田富子へ艶書を送った後、退校させられるのではないかと心配して、苦沙弥邸に頼みに来たとき、彼が苦沙弥に拒否されると、「吾輩」は皮肉たっぷりに「武右衛門君は監督の家へ来て、きつと人間について、一の真理を発明したに相違ない」と述べ、さらにこのように批評する。

彼は此真理の為に将来 ^{益す} 益 本当の人間になるだらう。人の心配には冷淡になるだらう、人の困る時には大きな声で笑ふだらう。かくの如くにして天下は未来の武右衛門君を以て充たされるであらう。金田君及び金田令夫人を以て充たされるであらう。吾輩は切に武右衛門君の為に瞬時も早く自覚して真人間になれん事を希望するのである。然らずんば如何に心配するとも、如何に後悔するとも、如何に善に移るの心が切実なりとも、とうてい金田君の如き成功は得られんのである。否社会は遠からずして君を人間の居住地以外に放逐するであらう。文明中学の退校どころではない。

この一節全体が強烈的な皮肉であり、「本当の人間」とか「真人間」といった言葉が本気でいわれているのではないことは言うまでもない。

同様に『狂人日記』の「おれ」も社会全体を批判する立場に立つのである。「おれ」はみんなが自分を食うのではないかという疑惑を抱く。はじめは趙貴翁の犬から不審を感じ、それから町の連中みんながおかしくなり、さらに自分の兄貴も自分を食うために手配をしていると聞き、結局世の中は人が人を食う社会であるという結論を得る。この点において両作の違うところといえば、『吾輩は猫である』の世間批判は『狂人日記』のよりユーモラスなところが多いことである。実は、『吾輩は猫である』における批判はここで止まらず、さらに徹底的なものに辿り着くのである。

第六節 「社会はみんな気狂の寄合」

苦沙弥邸に登場する知識人たちが築く小さな世界は常に外部の社会と対峙しているが、その外部の世界からは「変人」と見られている。たとえば、「七」で「吾輩」はこう批評する。

元来此の主人は近所合壁有名な変人で現にある人は慥かに神経病だと迄断言した位である。所が主人の自信はえらいもので、おれが神経病ぢやない、世の中の奴が神経病だと頑張つて居る。近辺のものが主人を犬々と呼ぶと、主人は公平を維持する為め必要だと号して彼等を豚々と呼ぶ。

「神経病」にかかっているのは自分でなく「世の中の奴」だと主張する主人が周囲の人々と融合しないのは

当然だが、さらに主人が「神経病」と見なす「世の中の奴」の範囲が近所から社会全体へと拡大する。

たとえば「九」では苦沙弥が天道公平という人物から手紙を受け取り、読んだ後、大変感服するが、この人は実は巣鴨の精神病院に収容されている立町老梅という精神病患者であることが後で迷亭の話で分かるのである。「読心術」を会得している「吾輩」は、その後の苦沙弥の心理活動を読者に報告する。

ことによると社会はみんな気狂の寄り合いかも知れない。気狂が集合して鎬を削つてつかみ合ひ、いがみ合ひ、罵り合ひ、奪ひ合つて、其全体が団体として細胞の様に崩れたり、持ち上がつたり、持ち上がつたり、崩れたりして暮して行くのを社会と云ふのではないかも知らん。其中で多少理屈がわかつて、分別のある奴は却つて邪魔になるから、瘋癲院といふものを作つて、こゝへ押し込めて出られない様にするのではないかしらん。すると、瘋癲院に幽閉されて居るものは普通の人で、院外にあばれて居るものは却つて気狂である。気狂も孤立して居る間はどこ迄も気狂にされて仕舞ふが、団体となつて勢力が出ると、健全の人間になつて仕舞ふかも知れない。大きな気狂が金力や威力を濫用して多くの小気狂を使役して乱暴に働いて、人から立派な男だと云はれて居る例は少なくない。何が何だか分からなくなつた。

下線部で特に端的に述べているように、世の中の人間はすべて「気狂」で、むしろ瘋癲院内の人が「普通の人間」だというのが苦沙弥の主張で、これは猛烈な社会批判である。

ところで、本章の第四節「吾輩」の苦沙弥らへの同化」で論述してきたように、「吾輩」は語りの進展につれ、次第に苦沙弥と心理的に同一化する傾向を強めてきている。「一」「二」においては顕著だった「吾輩」の主人への批評意識はこのあたりではすでに消失しており、特に苦沙弥のこの考察においては、彼の理窟が「吾輩」の語りを通して表現されるというより、むしろ苦沙弥と「吾輩」との二つの声が唱和する形で主張しているようにも感じられるのである。そればかりではなく、このような形で苦沙弥と一致した「吾輩」の語りの背後には、作品世界の外側でこれらすべてを操縦している作者の声もここで聴き取ることが可能になってくる。つまり、第一回掲載当初は読み切り短篇のはずであった『吾輩は猫である』という小説は、二年間にわたる連載という予定外の引き延ばしを続けるうちに、構造的にも大きく変化し、語り手である「吾輩」は徐々に苦沙弥に近づいてくると同時に、作者もこの両者に近づいてくる結果、開始時にはお互いに距離を取っていた三者の立場がやがて一致していく形になるのである。

ところで、上の引用文に見られる「世人」と「変人」との端的な逆転の発想に接すると、苦沙弥の感想は『狂人日記』の「おれ」と幾分似ていると思わざるを得ない。つまり、「おれ」もみんなに「気狂」と見なされているが、それを認めず、逆に自分だけが真理を握っていると信じて周囲を説得するのである。そして、小説の進行につれ、次第に精神病患者らしくなくなり、正常な人間のように見えてくる。

たとえば、「十」では、「おれ」は言う。

可是偏要说，“你们立刻改了，从真心改起！你们要晓得将来是容不得吃人的人，……”／それでもおれは言ってやった。《おまえたち、いますぐ改心しろ。しん底から改心しろ。いいか、いまに人間を食う人間は、この世にいれられなく……》

このように『狂人日記』では「おれ」は始終自分が「気狂」なのではなく、周囲の人こそ狂っているのだと主張する。「社会はみな気狂の寄合」というメッセージ的な観点においても二作は同じ立場を立てているとも見られるのである。すなわちここでの「おれ」の主張は、「狂人」の言葉というよりは、作者のメッセージをそのまま述べた、むしろ理性的な言説のようにも見える。本文における語り手兼主人公である「おれ」も次第に作者と一致するようになり、「狂人」の声に重ね合わせて作者の声を伝えるという構造を成していると考えられる。

さて、以上の各節における分析において、『吾輩は猫である』における「吾輩」の語りと『狂人日記』における「おれ」の語りとの間の類似点をいくつか指摘し、影響関係の可能性に言及してきた。本節における主な発見は、「狂人」のようなく異者>による異常な語りを通して、作者自身の主張もかなり直接的に表現されてゆくという『狂人日記』において顕著なく二声構造>が『吾輩は猫である』にも伏在するということである。両作の作者は「吾輩」と「おれ」という普通の人間でない語り手の口調を借りて、自分の批判したいことをかなり直接的に表現することが可能になる。もし普通人として設定された語り手が作者の本音をそのままに言うとするれば、小説はメッセージを前面に出した説教調のものとなって、抵抗を覚えた読者が興味を減じるのは無論のことであるが、語り手が<異者>なら、その語りが異常なものであることは当然と見なされるし、またその異常さから生じるユーモアも手伝って、読者は抵抗なくメッセージを受け取ることも可能となるのである。

このようなく異者の語りの二声構造>という手法において二作が同じ傾向を示すように見られること、そしてこの一致を全くの偶然と見なすことは無理であり、やはりそこに『吾輩は猫である』から『狂人日記』への影響を想定する必要があるというのが、この第二部における結論である。

第三部 『阿Q正伝』の語りの構造

本稿の第一部においては、魯迅のデビュー作『狂人日記』の主人公兼語り手である「我／おれ」を＜異者＞と見る視点からその語りの手法を分析し、そのようなく異者＞の語りが同時に作者自身の声をも伝えるという二元的な構造を備えているという意味で、この特殊な構造を＜異者の語りの二声構造＞と呼ぶことにした。第二部では、これにきわめて類似した構造が漱石の『吾輩は猫である』に見られることを発見し、この作品を愛読した魯迅がそこから手法を学び取った、あるいは無意識的にせよ影響を受けた可能性について、様々な側面から検討した。

以上の成果を受けて、第三部ではもう一度魯迅にもどり、彼が漱石から学びつつ完成させた＜異者の語りの二声構造＞という小説作法が、『狂人日記』の三年後に書かれた代表作『阿Q正伝』ではどのような形で生かされているのかを分析していきたい。

『阿Q正伝』は1921年12月から翌年2月にかけて『晨报』の週間付録版に毎週、または隔週で一章ずつ連載され、後に短編集『呐喊』に収録された小説である。この作品は『狂人日記』と並んで魯迅の代表作であり、さらには中国現代文学の代表作でもあると言われている。小説では辛亥革命前後の架空の農村「未荘」を舞台として、社会の最下層で生きている庶民である阿Qが描き出されている。極貧の生活をし、無知・無徳であり、周囲の人々に軽蔑され、いじめられている阿Qは、「精神上的勝利法」（精神上的勝利法）と作品内で呼ばれ、その後一般に「精神勝利法」と通称されるようになった独特な方法により、失敗を精神上的の勝利に変え、自己を慰め、満足している。最後には勃発した革命運動の混乱のなかで阿Qが無実の罪で捕まえられ、処刑される結末で小説が終わるのである。

この作品は連載開始時から大いに評判となったが、その要因の一つは、署名が魯迅でなく「巴人」という匿名であったために、読者ひとりひとりにはこの作者が自分の知り合いなのではないか、そして阿Qは自分をモデルにして書かれているのではないかという不安が生じたことであるといわれている²⁶。このことは、自らの屈辱と敗北を他のより弱い者に転嫁して自己満足する阿Qの「精神勝利法」が多くの中国人にとって身に覚えのある心理であったことをよく表わしている。そのような反応を引き起こしたこの作品は、中国人の国民性の批判として見事な成功をおさめたものといえる。

この成功については様々な要因を考えることができるが、そこに表現された思想内容や社会背景などの要因についてはすでに多くの研究が積み上げられているので、本稿ではむしろそれを小説作品として見た場合の手法の側面に焦点を当ててゆきたい。特にその主人公として設定された阿Qという人物の特異性、そして喜劇的とも悲劇的ともいえるその生涯をたどる語りの特殊な構造を解き明かすことがこの第三部の課題となる。第一章で阿Qの人物像を詳細に分析した上で、第二章ではそれを支える語り、そこでの主人公と語り手、そして作

²⁶ 『魯迅選集 第7巻』p.76 増田渡訳 岩波書店（1986）

者との微妙な関係について検討することになるだろう。

第一章 <異者>としての阿Q

『阿Q正伝』の語りの特質、その主人公の扱いといった問題に関連して、実弟の周作人は下のように述べている。

《阿Q正伝》里的讽刺在中国历代文学中最为少见，因为他是反语（Irony），便是所谓冷的讽刺——“冷嘲”。……〔中略〕《阿Q正伝》の笔法的来源，据我所知道是从外国短篇小说而来的，其中以俄国的戈果理与波兰的显克微支最为显著，日本是夏目漱石森鷗外两人的著作也留下了不少的影响。……〔中略〕夏目漱石的影响，则在他的充满反语的杰作《我是猫》。

『阿Q正伝』の風刺は中国歴代文学の中にはあまり見られない。それは彼が反語（Irony）、即ち冷たい風刺——「冷嘲」を使っているからだ。……〔中略〕『阿Q正伝』の手法の源といえば、私の知る限り、外国短編小説から来たのである。なかでも、ロシアのゴーゴリとポーランドのシェンキエヴィッチからの影響がもっとも著しい。日本の夏目漱石と森鷗外という二人の著作から影響されたところも少なくない。……〔中略〕夏目漱石からの影響といえば、彼の反語に満ちた傑作『吾輩は猫である』だ。（于訳）

（周作人《晨报》副刊〈阿Q正伝〉1922年3月19日）²⁷

つまり『阿Q正伝』の語りの特質を「反語（Irony）」「冷たい風刺」「冷嘲」といった用語によって規定し、それが『吾輩は猫である』の影響のもとに形成されたと見ているわけである。この見方はきわめて妥当なものと思われるが、明確に実証されてきたわけではない。以下、本稿では、第二部における『吾輩は猫である』分析の成果を踏まえていくつかの視点から『阿Q正伝』を解析してゆくことで、この仮説に一つの実証を与えることを目指したい。

さて、『阿Q正伝』では、「第一章 序」が終わると、さっそく物語に入ってゆくことになるが、第二・三章の題はそれぞれ「勝利の記録」「続勝利の記録」である。どのような「勝利」が語られているのかと期待して読み始めた読者は、やがてこれらの題が前掲の文で周作人が指摘していたところの「反語（Irony）」にほかならないことを知って苦笑することになるだろう。つまり、これらの章で主人公阿Qが手にする「勝利」とは、実質的にはむしろ敗北なのだが、心理上の独特の操作によって強引に「勝利」と見なして自己満足に浸るという奇妙な心理過程を指しているのである。

第一章の「序」では語り手は「阿Qの姓がなんというか実は知らぬ」と述べ、「阿Qの名はどう書くかも、わたしにはわかっていない」と語っている。さらに原籍を考証しても分からなくて、結局正しいといえるのは「阿」という文字だけだと述べている。実際に親しみの気持ちを表わすときに、接頭詞として「阿」はよく使われて

²⁷ ここで周作人は『吾輩は猫である』を短編小説の範疇に入れているが、それは連載開始当初は短編小説的であったことによるのかもしれない。

いる。「阿」はつまり日本語の「さん」「ちゃん」に近いものである²⁸。「阿」だけは正しいというのは、語り手が阿Qについて何も分からないのと同様である。何も世間に知られていなく、注目されていないような阿Qを描く本当の目的は阿Qという人物がいかに微小な存在であるかを読者に印象づけるためだと思われる。このような仕掛けをすれば、語り手は思う存分に阿Qという小人物を嘲笑したり、軽蔑したり、恨んだりすることができて、つまり「冷嘲」を発揮する環境を提供しているわけである。『阿Q正伝』の発表当時、作者魯迅も予想しなかったほどに多くの読者がめいめい自分がモデルにされたような気がして、恐慌が起こったことは前に述べたが、それは、魯迅が人間の弱点を集約した存在としての阿Qを見事に描いたのが勿論一番大きな要因だが、語り手が阿Qの身分について不明であることも一役買っているに違いない。

ところが、第二章から語り手の視点、つまり語り手と阿Qとの距離が「序」とはっきり違ってくる。見てきたように語り手の「余」は最初に阿Qと相当の距離を置きながら、彼を登場させた後に身を引き、第二章の「勝利の記録」になると、『吾輩は猫である』の第九章における「吾輩」のように「読心術」を得て、阿Qの内心に飛び込み、彼が「ひそかに思った」ことまでも知り、幕の後ろに身を隠す全知全能の語り手に変身する。読者はこのように変換された語り手の視点によって、阿Qの行動と奇妙な精神世界を把握することができるのである。

阿Qが身につけている優越感を引き起こす方法を第二章で語り手は「精神勝利法」と呼び、これを阿Qの人格の核心にすえることによって、阿Qという人物を生き生きと描き出すことに成功したといえる。本章では、この「精神勝利法」について、それがどのような要素から成り立つ心理過程であるか、以下の各節でそれぞれの側面から詳しく分析してゆきたい。

第一節 「精神勝利法」の論理

「精神勝利法」（竹内訳では「精神的勝利法」）は『阿Q正伝』の主題に関わるキーワードとして非常に有名になった語句だが、作品中に現れるのは一回だけで、次のような部分においてである。すなわち自分では「完全人間」を自任している阿Qにも頭に数カ所「禿げ」があり、これが「最大の悩みの種」になっていたのだが、未荘の遊び人どもがそれをからかうことから殴り合いになることもあった。そのような場合、明らかに「形式上は阿Qの負けになる」のだが、阿Qはそう考えないのである。

阿Q在形式上打败了，被人揪住黄辫子，在壁上碰了四五个响头，闲人这才心满意足的得胜的走了，阿Q站了一刻，心里想，“我总算被儿子打了，现在的世界真不像样……”于是也心满意足的得胜的走了。／形式上は阿Qの負けになる。色つやのわるい辮髪をつかまれ、土壁にコツンコツン頭をぶつけられる。それでやっと相手は満足して、意気揚々と引きあげる。阿Qはしばらく立ったまま考える。《倅にやられたよ

²⁸ 『漢字源』（学習研究社 2007）によれば、もと、江南地方の方言で、「親しみの気持ちをあらわして、人を呼ぶことばにつく接頭辞」。この説明はそのまま当てはまる用法である。

うなものだ。ちかごろ世の中はへんてこで……」そしてかれも満足して、意気揚々と引きあげる。

阿Q想在心里的，后来每每说出口来，所以凡是和阿Q玩笑的人们，几乎全知道他有这一种精神上的胜利法／阿Qは、心に思ったことを、ついあとで口に出してしまう。そのためこの精神的勝利法の存在が、阿Qをからかう連中のあいだに知れわたった。

阿Qは力では相手に敵わず、客観的には負けてしまっているとはしか見えないが、相手が「意気揚々に引きあげる」と、彼らを「せがれ」のような自分より下位の人間だと見なすことによって、敗北の意識を一掃し、精神面での勝利を実現する。しかもこの虚構的な勝利を事実として信じこんで、優越感にひたる。この心理過程が「精神勝利法」と呼ばれるものであり、現実的には何の取り柄もない阿Qにとっては、あるいは生きる支えとなっている切実な処世術なのかもしれない。

だが、客観的に見れば、もし実際にこのような心理過程をたどって完全な優越感に至ることのできる人間がいたとすれば、ひどく滑稽である。その滑稽さに、読者は苦笑せずにいられないが、そのことは小説の登場人物たちも同じで、阿Qに「精神勝利法」があることを知ると、ますますからかいたくなる。さきの引用文はこう続いている。

此后每逢揪住他黄辫子的时候，人就先一着对他说：／それから、色つやのわるいかれの辮髪を引っぱるとき、事前にこう通告するようになった。

“阿Q，这不是儿子打老子，是人打畜生。自己说：人打畜生！”／《阿Q、これは仲が親を殴るんじゃないぞ。人間さまが畜生を殴るんだぞ。自分で言ってみろ、人間さまが畜生を殴るんだと》

阿Q两只手都捏住了自己的辫根，歪着头，说道：／阿Qは、両手で辮髪の根元をおさえ、首をねじ曲げる。

“打虫豸，好不好？我是虫豸——还不放么？”／《虫けらを殴るんさ。これでいいだろ？おいら、虫けらさ——もう放してくれ！》

ここでは、阿Qの大切な心理的処世法である「精神勝利法」が、このようにして無残に打ち砕かれてしまったように見える。だが、実はそれは逆説的な形で生き延びるのである。つまりここで、「仲が親を殴る」のではなく「人間さまが畜生を殴るんだ」と認めると迫られた阿Qはすなおに「畜生」と認めるのではなく、自分を一挙に「虫けら」にまで落とす。実はそこに、屈折した仕掛けが隠されているのである。

ここで『狂人日記』を思い出してほしいのだが、この「人間」「畜生」「虫けら」という序列は『狂人日記』「九」で「おれ」が兄貴を含む世人らに説得しようとした言説に含まれていたものである。すなわち「まっとうな人間になりたかったものは人間になり、そうではないやつらはいつまでも虫のままだ」というのである。同じ序列がここに持ち込まれているわけで、つまり阿Qはここで、「畜生」以下の存在である「虫けら」のレベ

ルにまで、あえて自分を下げたことになるが、実はそのことが、結果的に阿Qの自己満足を救うのである。すなわちこれを聞いた相手はやはり阿Qに「コツンコツン五、六回食らわせて」「意気揚々に引きあげる」。のだが、阿Qは彼等の思う通りに敗北を認めて落ち込むわけではない。彼はこの敗北をもまた「勝利」に転換する方法を心得ているのだ。

他觉得他是第一个能够自轻自贱的人，除了“自轻自贱”不算外，余下的就是“第一个”。状元不也是“第一个”么？“你算什么东西”呢！？／われこそ自分を軽蔑できる第一人者なりとかれは考えるのだ。「自分を軽蔑できる」だけを除けば、残るのは「第一人者」だ。状元だって「第一人者」じゃないか。《おめえなんか、なんだってんだ！》

先ほどの例文からも分かるように、阿Qは人に殴られたら、「せがれにやられたようなものだ」と自分に言い聞かせ、優越感に浸る。しかし、またやっつけられ、自分のことを「虫けら」だと言われたので、この優越感はまだ破壊される。ところが、彼はここで、自分は「自分を軽蔑できる」人間であるがゆえにそうでない人間より優越しているのだという論理を持ち出すことで自分を救うのである。しかもその「第一人者」だと自負することでさらに高揚し、やがて「自分を軽蔑できる第一人者」という文句のうちの「第一人者」の方だけが強調されて、「自分を軽蔑できる」という限定句の方が都合よく忘れられてしまう。そこで彼は「状元」と同じ程度に偉い人物になったつもりで、一層ほかのものを軽蔑するようになる。

これら一連の出来事と心理活動は全部阿Qに発生した「勝利の記録」であるが、実は彼は「敗北を味った」ことがまったくないわけでもない。「もしふところにいくらがあると、かれは賭博に行く」。あるとき、かれは珍しく勝つ。しかし、誰かと誰かが喧嘩を始めたために大混乱となり、せっかく手に入れた大金が混乱中に取りられてしまう。実は賭場の人らがわざと騒ぎを起して、金を奪ったのかもしれない。阿Qは金を取った奴らを「せがれ」だと言っても、自分が「虫けら」だと考えてみても「おもしろくない」。これまで優越感を生み出してきた手段が今や全部無効果なので、「今度ばかりは、かれは敗北ののがさを味った」。今回こそあきらめるのかと思うと、

但他立刻转败为胜了。他擎起右手，用力的在自己脸上连打了两个嘴巴，热刺刺的有些痛；打完之后，便心平气和起来，似乎打的是自己，被打的是别一个自己，不久也就仿佛是自己打了别个一般，——虽然还有些热刺刺，——心满意足的得胜的躺下了。／だがかれは、敗北をたちまち勝利に変えることができた。かれは右手をふりあげて、自分の横つつらを力いっぱいいつづけざまに殴った。飛びあがるように痛かった。だが殴ったあとは気がはれて、殴ったのは自分だが、殴られたのは別の自分のような気がした。そのうちに自分が他人を殴ったような気がして——痛いことはまだ痛かったが——かれは満足し、意気揚々と横になった。

自分が自分を殴った後、殴られる痛さを忘れ、殴る痛快さだけを覚えておく。そして「満足し、意気揚々」となり、精神安定の状態になる。自分で自分を殴るとは、阿Qの行動はまったく不可解なものになってしまったように見えるけれども、実はこの前の「自分を軽蔑できる第一人者」と自任することで自己満足を得た場合と、本質的には同じ方法によっているのである。即ち、「自分を軽蔑」することや、「殴られた」ことのような自己に不利なものを取り除き、代わりに「第一人者」や「殴った」ことのような誇りになりそうな部分だけを上げることを通して優越感を生み出すことである。

それにしても、「精神勝利法」とは、無知な阿Qが思いつくはずもない高級な語彙であり、しかもいささか大袈裟な感じもあって、阿Qの貧弱な思考内容とはまったく不釣り合いなので、両者を結びつけること自体が大いに滑稽感を生んでいるといえる。ところで、このように実は貧弱な内容と高級な語彙とを強引に結びつけることによって生じる不釣り合いの滑稽感といえば、第二部で分析した『吾輩は猫である』のうちにふんだんに見られたものである。

すでに見たとおり、「吾輩」は非人間の猫の視点を取っているので、人間世界の価値体系、論理、規則を無視して、思う存分に人間社会を批判しているが、人間の立場から見れば、おかしい論理がしばしば出てくるわけで、その不釣り合い感が作品全体のユーモアの重要な一要素となっていた。『狂人日記』にも同様のことがいえ、**「被害妄想狂」**の類とされる主人公兼語り手の「おれ」は一般常識を大きく逸脱した認識や思考を示すために大いに笑いを呼びながらも、発狂以前は知識人だったこともあって、その日記の文体がきわめて論理的あるいは論理志向的であるところに、不釣り合いの滑稽感が生じていたといえる。

阿Qの場合は、本稿の前章までで＜異者＞として分析してきた「吾輩」や「おれ」に比べれば通常の人間に近いわけだが、それでも阿Qは未荘という農村社会のなかの、名前も身元も分からない、しかも少々身体的欠陥もあって、周囲から徹底的に軽蔑されている特異な人物であり、かつ後に詳しく見るように、そのことが通常の人間すなわち「世人」の悪弊を逆に照らし出す働きをもつ結果となっている。この側面からみると、『阿Q正伝』が『狂人日記』、ひいては『吾輩は猫である』と構造上の共通点をもつこと、そしてそのような構造において阿Qが「吾輩」や「おれ」に相当する機能、すなわち＜異者＞の役割を果たしていることは明らかだろう。

さて、その阿Qは、有力者の趙旦那から同じルンペン農民の小Dに至るまで村中の人からいじめられ馬鹿にされているが、客観的にはまったく通用しない根拠によって自分の優越性を信じ込み、逆に村中のものを軽蔑した気である。第二章「勝利の記録」に記録されているすべては、現実には勝利どころか、屈辱の記録であるとしか見えない。それを「勝利の記録」に転換する便利な装置が阿Qの「精神勝利法」なのである。

第二節 阿Qの「自尊心」

前節に見てきた阿Qの「精神勝利法」は通常人の感覚から見ればいかにも奇妙なもので、まねをしようとしてもできないものと思われるのだが、阿Qにはなぜそのようなことが可能なのであろうか。その要因として、阿Qという人物にそなわるいくつかの特質を挙げることができるが、ここでその第一に挙げたいのは、彼の特殊な「自尊心」である。それについては語り手自らこう明記している。

阿Q又很自尊，所有未庄的居民，全不在他眼神里，甚而至于对于两位“文童”^⑧也有以为不值一笑的神情。夫文童者，将来恐怕要变秀才者也；赵太爷钱太爷大受居民的尊敬，除有钱之外，就因为都是文童的爹爹，而阿Q在精神上独不表格外的崇奉，他想：我的儿子会阔得多啦！加以进了几回城，阿Q自然更自负。／阿Qはまた自尊心が強くて、未荘の住民はことごとく眼中になく、村にふたりいる「文童」さえほとんど歯牙にかけなかった。そもそも「文童」とは、いつかは秀才に成り変るはずのものだ。趙旦那と錢旦那が住民から深く尊敬されるのも、理由は金持ちだからというほかに、文童の父親だからである。しかし阿Qだけは、精神的にとくに尊敬をはらう様子がなかった。おいらの倅ならもっと偉くなるさ、とかれは考えていた。そのうえ城内へ何回も行っているので、ますます自尊心が強くなるわけだ。

このような「自尊心」をもつ阿Qは、いつも他人に対し「おいら、むかしはおめえなんかより、ずっと偉かったんだぞ」という態度で臨み、未荘の人々の習慣が「城内」ものと違うとって軽蔑している。このように「完全人間」と自負する阿Qの「悩みの種」はすでにふれたように「禿げ」なのだが、これについても奇妙な心理操作を通して自尊心の保たれる形に変換しようとする。語り手はこのように紹介する。

最恼人的的是在他头皮上，颇有几处不知于何时的癞疮疤。这虽然也在他身上，而看阿Q的意思，倒也似乎以为不足贵的，因为他讳说“癞”以及一切近于“赖”的音，后来推而广之，“光”也讳，“亮”也讳，再后来，连“灯”“烛”都讳了。一犯讳，不问有心与无心，阿Q便全疤通红的发起怒来，估量了对手，口讷的他便骂，气力小的他便打；然而不知怎么一回事，总还是阿Q吃亏的时候多。于是他渐渐的变换了方针，大抵改为怒目而视了。／最大の悩みの種は、頭に数カ所、いつからともなく、疥癬のあとが禿げになっていることである。これだって自分の肉体の一部にはちがいないが、こればかりはさすがの阿Qも自慢にはならぬらしく、その証拠に「禿げ」ということは、および一切の発音がそれに近いことばをきらった。その範囲がだんだんひろがって、のちに「光る」も禁句、「明るい」も禁句になった。もっと後になると「ランプ」や「蠟燭」まで禁句になった。その禁を犯すものがあると、故意であろうがなかろうが、阿Qは禿げまでまっ赤にしておこり出す。相手を見て、もしロベたな奴なら罵倒するし、弱そうな奴なら殴りつける。ところが不思議なことに、反対に阿Qがやっつけられるほうが多かった。そのためかれは、次第に方

針を変えて、もっぱら睨みつけることにした。

下線部のように、阿Qは自分の禿げを気にして「光る」「明るい」「ランプ」「蠟燭」などの字を「禁物」にしている。読者がこれを読んで勿論可笑しく思うわけだが、実は中国社会には、伝統的にあることを禁忌として、それをなるべく避ける事例は少なくない。たとえば、周作人は『魯迅小説のなかの人物』で、年寄りの女性もこのようなことをよくやっているが、だいたい不吉の事に限っていると述べている。さらに、周作人は“只許州官放火，不許百姓点灯”という諺によって個人についての忌みは士大夫だけのやり方であると説明している。すなわち、宋の時代に州の知事である田登が名前の“登（deng）”と同じ発音の“灯”を忌むので、元宵節の“放灯”（灯籠を点す）を“放火”に言い変えろと命令したとのことである。

周作人の解説で分かるように、特別な言葉を「禁物」にするのは古くからあった現象であるが、問題はそれをする人にそれに相応しい身分・地位があるかどうかということである。民衆は士大夫階級の命令に従わなければならないから、表向きには禁句を言わないようにするだろう。しかし、相手が阿Qになると、結果が違っているのである。ルンペン農民である阿Qは上流階層がするように自分の欠点を忌んで禁句を作るのは、あくまでも彼の精神世界における理想にすぎず、聞く側からすれば笑止である。実際には、彼にはそれに見合う尊厳がまったくないので、結局人は阿Qの前でわざとそのような言葉を言い出し、阿Qを怒らせるのを楽しみにするようになる。その結果、喧嘩になると、阿Qは「多くの場合」やはり力では人に敵わないので、今度は「にらみつけ主義を採用」することとなる。

阿Qのこのような心理特徴は「吾輩」にもある。第二部第一章「主人公兼語り手「吾輩」の心理・性格の表現」で論じたように、名前さえもない猫は「吾輩」と自称して放恣に人間世界の様相に嘲笑・批判を投じており、さらに主人と同じく知識階級に属するという自負から車屋の黒を軽蔑するが、「勇氣」と「胆力」においては相手に対抗できないので、やはり黒に馬鹿にされてもしかたがない。

猫である「吾輩」と自らを「虫けら」と認める阿Qとは、一般の人間社会から見ればまったく地位を認められていない<異者>であるという共通点をもっているわけだが、それにもかかわらず手前勝手な優越感をもって人間社会の上に立とうとすること、またその優越感が他の登場人物によって否定されることにおいても共通しているといえる。同様のことは『狂人日記』の「おれ」にもいえるはずで、この二作における主人公の性格造型において『吾輩は猫である』がなんらかの影響をもった可能性は否定できない。

第三節 忘却

そのように強い自尊心をもちながら、それが傷つけられても結果的に「勝利」の心理に至るという阿Qの「精神勝利法」は、いかにも便利なもののように見えるが、この便利な心理過程を可能にしている要素の一つが「忘却」である。

「第二章 勝利の記録」で詳しく叙述されているとおり、「精神勝利法」とは、実際に経験しているのが敗北の連続であるにもかかわらず、現実世界から内心世界へと逃げ込み、屈辱を栄光に、敗北を勝利に変更する心理過程である。これについては「第二章 勝利の記録」ですでに詳しく叙述している。「第三章 続勝利の記録」では「生涯最大」と「生涯第二の屈辱事件」が続き、これも勿論「勝利」でなく、「屈辱事件」とまでいうほどの敗北であるが、ただし、敗北の立場から完全に勝利の立場に転換する第二章に比べ、第三章では阿Qの心理活動は中途半端に見える。即ち、阿Qはいつもの通りに自己満足の心理を作っているけれども、この章では精神上の勝利にたどりついておらず、ただ屈辱の思いを忘却するだけなのである。

「生涯最大の屈辱事件」はある春の出来事である。ある日、阿Qは「ひげの王」にあう。「ひげの王」は阿Qの言い方であり、実はこの人はひげもあり、禿げもあるから、世間では「ひげの禿げの王」と呼ばれているが、阿Qからすると、禿げはともかく、そのひげがみつともないものなので、「ひげの王」と呼んでいる。「ひげの王」が日なたで虱を取っているのを見て、阿Qも虱を取る。あいにく自分が取ったのはずいぶん少ないから、自尊心を傷つけられて相手と喧嘩になる。結局阿Qは頭を土塀にぶつけられ、それから突き飛ばされるのである。

しかし、「生涯第二の屈辱事件」がこの直後に発生する。負けてしまった阿Qが「途方に暮れて立っている」ところに、銭旦那の長男で日本へ行って辮髪を切って帰国した、阿Qが「にせ毛唐」と呼んで嫌っている男が通りかかる。ここでひそかに罵る声がこの「にせ毛唐」は聞こえてしまい、怒りを買って、ステッキで「パン！パン！パン！」と頭をやられる。

在阿Q的记忆上，这大约要算是生平第二件的屈辱。幸而拍拍的响了之后，于他倒似乎完结了一件事，反而觉得轻松些，而且“忘却”这一件祖传的宝贝也发生了效力，他慢慢的走，将到酒店门口，早已有些高兴了。／阿Qの記憶では、たぶんこれが生涯第二の屈辱事件だった。さいわい、パン、パンのあと、もう一件落着の感じで、いっそさっぱりした。しかも「忘却」という祖先伝来の宝のききめも出た。ゆっくり歩いて酒屋の前まで来ると、もういくぶん上機嫌でさえあった。

すなわち、「生涯第二の屈辱事件」の衝撃のせいでかえって「さっぱりし」、「生涯最大の屈辱事件」を「忘却」することができたわけである。その御蔭で阿Qはいくらか気持ちが楽になる。

だが、第一の屈辱を霧消させる衝撃となった第二の「屈辱」の方は未解決のままなので、これをなんとかしなくてはならない。ちょうどそこへ若い尼さんが通りかかる。「ふだんでも阿Qは尼さんを見ると黙っていられなくなるが、ましてや屈辱事件の直後だ。記憶がよみがえると、敵意もよみがえった」。相手は尼さんなら大丈夫だ。阿Qはちょっかいを出したり、悪態をついたりする。これを見た酒屋の「観衆」がどっと笑うと、阿Qはますます得意になって、尼さんの頬をつねったりする。

他这一战，早忘却了王胡，也忘却了假洋鬼子，似乎对于今天的一切“晦气”都报了仇；而且奇怪，又仿

佛全身比拍拍的响了之后轻松，飘飘然的似乎要飞去了。／この一戦によって、ひげの王のことも、にせ毛唐のことも、きれいさっぱり忘れて、きょうの「不運」の仇を全部取ったような気がした。そのうえ不思議なことに、パン、パンやられたときよりも全身さっぱりして、今にもふわりふわり空へ舞いあがりそうな気がした。

“这断子绝孙的阿Q！”远远地听得小尼姑的带哭的声音。／《跡取りなしの阿Q！》遠くから尼さんの半泣きの声がきこえた。

“哈哈哈！”阿Q十分得意的笑。／《ハッハッハ！》阿Qは、十分の満足感で笑った。

このように「ひげの王」に敵わず、「にせ毛唐」に叩かれ、やっと、阿Qは自分の屈辱と不満をさらに弱い尼さんに転嫁することに成功している。このような心理操作を代田智明²⁹は「時間差的な精神勝利法」だと言っている。即ち、尼さんを苛めることは「ひげの王」や「にせ毛唐」に負けることより後のことで、時間差があるわけであるが、阿Qは弱いものに勝つことによって、また優位を取り戻し、先ほど強い者に傷つけられた自尊心を慰め、敗北を「忘却」するのである。

第四節 権力主義

「勝利」感に浸って自己満足するために、屈辱的な経験は都合よく「忘却」してしまうという、「精神勝利法」の一部を成す心理過程は、いかにも便利で、現実にはありえないことのようにも見えるが、これを可能にしている要因として考えられるのが、阿Qの強い自尊心と密接な関係をもつらしい独特の「権力主義」である。

「第二章 続勝利の記録」での尼さんへのちょっかいからも分かるはずだが、阿Qは地位が低いけれども、自分より弱いものには威張り散らす人物である。「第五章 生活の問題」では、阿Qが仕事を失って腹がへつているときも、普通の農家に行かず、村はずれの尼庵へ大根を盗みに行く。第二章で「ひげの王」との戦いは結果的に阿Qのほうが負けてしまっているが、そもそも阿Qはなぜ「ひげの王」と喧嘩になっているかというと、彼の考えでは「ひげの王は、ひげが頬まではえているという欠点のために、こちらから嘲笑こそすれ、相手がこちらを嘲笑したことはなく、いわんや手出しなど、一度もなかったからだ」。明らかに、阿Qからみれば、「ひげの王」は自分より地位の低い者なので、シラミが自分より多いのもけしからんことである。「第五章 生活の問題」で阿Qは小Dと喧嘩になって、結局負けているのだが、なぜ殴り合いになったかという、阿Qは自分の仕事が小Dに多く取られたと気づき、しかも「この小Dという瘦せっこけの、力のないチンピラは、阿Qの眼からは、ひげの王より一段下だった。こんなチンピラにおまんまを横取りされようとは！」。このような阿Qの心理過程は、自分も最下層のルンペン農民でありながら、自分よりさらに下だと思ふ「ひげの王」や小Dらを当然にいじめてもよいという考え方があることを証しだしている。

²⁹ 代田智明（2006）『魯迅を読み解く 謎と不思議の小説10篇』東京大学出版会 p.92

弱いものには威張り散らすのだが、強いものにはどのような対応をしているかという点、小説の内容から見れば、阿Qは内心では相手を軽蔑しているのだが、実際の行動において社会の階級秩序に従い、ほぼ反抗しようとしないのである。たとえば、「第一章 序」では趙旦那の息子が秀才の試験に合格したときに阿Qは趙旦那と一族だと言ったが、まもなく趙旦那は地保に阿Qを呼んでもらい、「よくもでたらめを！おれに、おまえみたいな親類が、あつてたまるか。おまえの姓が趙だと？」や「おまえが趙であつてたまるか！——趙などと、とんでもない話だ！」などと怒鳴り、阿Qに平手打ちも食わせたのである。しかし、

阿Q并没有抗辩他确凿姓赵，只用手摸着左颊，和地保退出去了；外面又被地保训斥了一番，谢了地保二百文酒钱。／阿Qは、自分の姓がたしかに趙だとは抗弁しなかった。左頬をさすりながら、地保に連れられて退出した。外でまた地保から油をしぼられ、心付けに銅錢二百ふんだくれた。

阿Qの姓が本当に趙であるかどうか誰にも分からないが、自分からそう言っている以上、趙である可能性も大きいはずである。しかし、村の有力者である趙旦那に趙という姓を名乗る資格までも奪われているときに、阿Qは「抗弁」する勇氣さえもない。これを読んだ読者は、阿Qは自分の精神世界ではいつも勝利者の姿勢だが、実際には趙旦那のような強者に虐待されても反抗できない弱い人物だと分かる。同様に、「第四章 恋愛の悲劇」の中で、阿Qは自分が女を求めているのに気づき、趙旦那の家の下女の呉媽をくどくが、結局大騒ぎになっている。趙家は懲罰の項目を決め、阿Qにお金を要求するのみならず、その上着までも奪ってしまうのである。ところが、阿Qの反応は意外に従順である

阿Q自然都答应了，可惜没有钱。幸而已经春天，棉被可以无用，便质了二千大钱，履行条约。赤膊磕头之后居然还有几文，他也不再赎毡帽，统统喝了酒了。／むろん、阿Qは全部承諾した。残念ながら錢がなかった。さいわい、もう春であるから、布団はなくてすむ。それを銅錢二千で質に入れて契約を履行した。上半身裸のまま頭を地につけて謝罪した。あとに銅錢がいくらか残ったが、帽子を惜げ出さずに、全部酒にかえて飲んでしまった。

かなり不当な処罰を受けているが、阿Qは一向反抗する気がない。このような側面を見ると、阿Qもここまでは、『狂人日記』の「おれ」が敵視していたところの、権力者に虐待されながら迎合し続ける「やつら」の部類に属していたといえる。ところが、阿Qが「やつら」と異なるのは、ここから考えが変わり、「謀反」をしようと思うようになることである。

そもそも阿Qは革命党がよい人だと思っていなかったが、「その革命党が意外にも、百里四方にその名も高い拳人旦那を縮みあがらせたとあつては、かれとて「恍惚」の気分になる。未荘の有象無象のあわてふためきは、ますますかれを愉快にさせる」。つまり、阿Qは革命軍の進行におびえる村人や町の有力者の慌しさを見て、自

分が革命に参加すれば、人に尊敬されると思ひ込み、「謀反」に憧れているのである。さらに「第七章 革命」の内容から分かるように、「謀反」はかれにとって大きな利益を得るチャンスでもある。まず、小Dやひげの王などのような自分を馬鹿にする連中を見返すことができる。次には、革命のついでに金持ちである趙家、銭家などを略奪してみようと甘い夢を抱いている。もうひとつ大事なのは、「恋愛の悲劇」を経験した自分もやつと村の女を選ぶことができるようになるだろう、という可能性である。こう考える阿Qは「謀反」を待ちかねている。

したがって、阿Qの理解では、革命をすれば、ほしいものが手に入るがゆえに、彼は革命をしたいわけである。かれは趙旦那などの人を恨んでいるけれども、この世の中が不公平、不平等だと思ふことから革命をすべきだと考えたわけではない。寧ろいつか「謀反」をして、自分も趙旦那に変身するというようなことを期待しているだけである。こんな阿Qだから、もし趙旦那と同じような権力、財産を持てば、さらに弱いものを虐げるに違いない。要するに、阿Qの心理には根強い権力主義があるわけで、「謀反」とか「革命」とかは阿Qにとって権力を求める手段にすぎないのである。

このような阿Qの行状を物語る語り手の態度が決して肯定的ではなく、むしろ皮肉に満ちていることは、どのような読者にも明白に伝わるころだろう。すなわち主人公と語り手との間に大きな距離があるわけで、この意味において『阿Q正伝』は、両者が一体化する傾向にある『吾輩は猫である』や『狂人日記』とは構造が異なるようにも見える。ところが、興味深いことには、『阿Q正伝』も終幕近くになると、この距離が一挙に縮まり、二作と同様のく二声構造>が成立してゆくのである。このことの詳細は、次章で論じることになる。

第五節 無知

「精神勝利法」を成立させている要因として、「自尊心」とそれに絡む「権力主義」、また都合のよい「忘却」の術などがあることがわかったが、これらすべてに関連し、あるいはそれらの前提となっているともいえる要素が、阿Qの甚だしい「無知」あるいは愚鈍さである。

阿Qの「謀反」と「革命」についての誤解は勿論かれの無知から生じた結果である。無知は阿Qの基本的な特徴であり、精神勝利法を生み出す要因のひとつでもある。つまり、阿Qは無知な人だからこそ、つねに精神勝利法で厳しい現実から内心世界に逃げ込み、浅はかに精神上の勝利を信じ込み、一時的屈辱を発散するのである。そもそも阿Qが無教養な人間であることは、「二」「勝利の記録」での語り手の紹介に示されている。

阿Q没有家,住在未庄的土谷祠的里;也没有固定的职业,只给人家做短工,割麦便割麦,舂米便舂米,撑船便撑船。／阿Qには家がなく、未荘の土地廟に住んでいた。きまった職もなく、日傭いとして、やれ麦を刈れ、やれ米をつけ、やれ船をこげ、言われるとおりの仕事をした。

このような阿Qには、農村の無頼漢によく見られる無知、無道德なところが勿論ある。この特徴について語り手はほかのところでも描写している。たとえば、「第四章 恋愛の悲劇」の中で、阿Qは趙家で米をつくときに、女中の呉媽に言い寄ろうとする。

“我和你困觉，我和你困觉！”阿Q忽然抢上去，对伊跪下了。／《おめえ、おらと寝ろ、おらと寝ろ！》阿Qはいきなり走りよって、呉媽の足もとにひざまずいた。

一刹時中很寂然。／一瞬シーンとなった。

“阿呀！”吴妈楞了一息，突然发抖，大叫着往外跑，且跑且嚷，似乎后来带哭了。／《ヒヤア！》はじめ呉媽は、ぽかんとしていた。それから急にふるえ出し、悲鳴をあげて表へとび出した。駆けながらわめき声を立て、しまいに泣き声のようになった。

呉媽はこんなことを露骨に言われてしまって、侮辱を受け、「悲鳴をあげて表へとび出した」のだが、阿Qは「まずかったか」と思っているだけで、さらに発生する事態を予想できないのである。そこで立ったまま、引き続き「米つきにかかろうとした」ときに、秀才の若旦那に天平棒で頭を殴られる。「阿Qは米つき場へ逃げ込んで」、「すぐ米つきにかかった」のである。ここから分かるはずだが、阿Qは秀才の天平棒から逃げ出しているけれども、趙家から逃げようとすこしも思わないのである。

趙家の人間がこれを聞いて、次第に中庭に集まる。「生まれつき物見だかい阿Qのこととて、さっそく声のするほうへ出てみた」。呉媽が泣き、女たちが彼女を慰めている。しかし、阿Qはこのときにもまだ事態が大変になっていると分らない。

阿Q想：“哼，有趣，这小孤孀不知道闹着什么玩意儿了？”他想打听，走近赵司晨的身边。这时他猛然间看见赵大爷向他奔来，而且手里捏着一支大竹杠。他看见这一支大竹杠，便猛然间悟到自己曾经被打，和这一场热闹似乎有点相关。／阿Qは思った。《フン、おもしれえや。あの若後家、何をやらかす気？》様子をさぐりたくなって、かれは趙司晨のところへ歩みよった。すると突然、若旦那がかれのほうへ向ってくるのが見え、しかもその手に天平棒のあるのが見えた。その天平棒からかれは突然、さっき自分が殴られたのとこの騒ぎと関係がありそうだと気がついた。

つまり、自分が呉媽に言ったのが侮辱的な言葉だと認識していない。こんな大騒ぎになっているのは自分と関係があるとも阿Qは思わないのである。もし趙旦那の持っている天平棒を見なければ、阿Qはきっと興味ぶかく騒ぎを見物しつつけるはずである。こんな信じられない愚鈍さ、あるいはそれと表裏一体の「無知」が読者の苦笑を呼ぶのである。

阿Qの無知は死ぬまで続く。「第九章 大団円」で阿Qは革命の際に趙家の掠奪事件に参加した疑いで逮捕さ

れ、法廷で書類に署名をしろと言われているが、阿Qは字が分からない。またマルを書けと役人言われ、阿Qは生まれてはじめて筆を握り、「渾身の力をこめてマルを書いた」のだが、手が震えて、「西瓜の種のような形になってしまった」。かれは立派なマルを書こうと努力しているばかりで、自分がなぜ捕らえられるも分からないし、まもなく銃殺されるという自覚もない。見せしめの引き廻しの直前、役人たちが「表に黒い字の書いてあるキャラコの白い袖なしを、いきなりかれに着せた」のだが、阿Qはこれが葬服そっくりだと思い、「気がくさった」だけでこれからは処刑場に行くともまだ気づいていない。

このあたりまで読み進めた読者は、おそらくもう「無知」だからといって阿Qを笑う気にはならず、むしろその運命に悲痛な同情を覚え始めているだろう。読者がそのように導かれるとしたら、その要因の一つは、語り手の阿Qに対する態度も徐々に変化して、主人公との距離を縮めてきたことである。すなわち貧弱で無知でありながら自尊心と権力主義に囚われ、都合の悪いことは忘却して無根拠な優越感にひたる「精神勝利法」の使い手という、何一つ愛すべき点のない<異者>として、「吾輩」や「おれ」が語り手から受けていたように見える愛を受けていなかった阿Qも、ここへ来て多少の愛を獲得したようにも見えるのである。

このような意味において微妙に変動してゆく『阿Q正伝』の語り手と主人公阿Qとの関係について詳細に分析してゆくことが次章の課題である。

第二章 『阿Q正伝』の<二声構造>的語り

『吾輩は猫である』の語り手である「吾輩」や『狂人日記』の主人公兼語り手「おれ」は、愚かで異常な語りを繰り出す<異者>的な語り手として作者自身からは明確に一線を画す存在でありながら、その一方で、人格的・性格的には作者から一定の親近感と敬意を払われ、やがてはほとんど心理的に一体化さえし、その結果として読者の支持を受けることもできた、きわめて独創的な造型であった。この両者から見ると『阿Q正伝』の主人公阿Qは、前章で様々の視角から分析したとおり、その「反語(Irony)」と「冷嘲」の語りで叙述される人格は欠陥だらけで何一つ取り柄がなく、およそ読者の支持を得ることなどできそうにない人物である。

ところが、何一つ愛すべき点のないその阿Qも、小説の終幕近くでは、いつか語り手とその背後の作者から、多少の愛を受けるようになっていくようにも見えるという解釈を、前章の末尾に示しておいた。このことに関連して興味深いのは、『阿Q正伝』発表の五年後に生じた、西諦³⁰と魯迅との間でのちょっとした論争である。すなわち西諦は、『阿Q正伝』の最後の部分で魯迅は書きつつける意欲をなくし、阿Qの結末を急ぎすぎたために「大団円」は「いい加減」なものになってしまったとして、こう批判したのである。

像阿Q那样的一个人，终于要做起革命来，终于受到那样大团圆的结局，似乎连作者他自己在最初写作时也是料不到的。至少在人格上似乎是两个。／阿Qのような人間が、ついには革命党になろうとして、とうとうあのような大団円の結末を与えられたということは、作者自身でも最初書くときは予想もしなかったことだろうと思われる。少くとも人格的には分裂しているように思われる。³¹

これに対して魯迅は『阿Q正伝』の成因³²で、「大団円」が決して「いい加減」に与えたものでなかったことを詳しく説明し、「人格も多分、分裂はしていないであろう」と反論するのだが、その文中で、『阿Q正伝』執筆の経緯をこのように説明している。

他正在晨报馆编副刊。不知是谁的主意，忽然要添一栏称为“开心话”的了，每周一次。他就来要我写一点东西。／彼はそのとき『晨报』社で附録版を編集していた。誰の思いつきか知らないが、急に「開心話」という一欄を、毎週一回設けることになった。彼は私のところへきてなにか書いてほしいといった。

阿Qの影像，在我心目中似乎确已有了好几年，但我一向毫无写他出来的意思。经这一提，忽然想起来了，晚上便写了一点，就是第一章：序。因为要切“开心话”这题目，就胡乱加上些不必有的滑稽，其实在全篇

³⁰ 本名鄭振鐸(1898-1958)、福建長樂人、作家、文学史家

³¹ 西諦(鄭振鐸)の文章は『呐喊』(《文学周报》NO.251 1926年11月21日)である。

³² 1926年12月18日に上海の『北新』週刊第十八期に発表された。訳文は増田涉訳『阿Q正伝』の成因(『魯迅選集 第七巻』岩波書店 1986)に拠る。

里也是不相称的。／阿Qの影像是、私の心の中には確かにもう何年も前からあったようだが、だが私は彼を書いてみようという気はそれまでちっともなかった。孫伏園から頼まれてふとそれを思い出したので、その晩少し書いてみたのが、第一章、すなわち序である。「開心話」というこの題目に合わせようとしたので、なくもがなの滑稽をいい加減につけ足した、実は作品全体からみるとふさわしくないものである。

33

このようにして、「なくもがな」とも思える滑稽さを加えた語りで進めて行ったのだが、反応が大きかったこともあり、編集者の孫伏園の催促がうまかったこともあって、魯迅の筆が乗ってくる。

但是、似乎渐渐认真起来了；伏园也觉得不很“开心”，所以从第二章起，便移在“新文艺”栏里。／だが、だんだんまじめになってきたようだ、伏園もあまり「開心」でもないように思ったのであろう、第二章からは「新文艺」欄の方へ移された。

すなわち、このようにして、ユーモラスなものから深刻なものへと調子を変えていったことも、阿Qの人格が分裂しているという印象を与える一因となったにちがいない。

ともかく、「大団円」での阿Qは以前に比べ微妙に内省的になっており、たとえば処刑される直前に喝采する群衆に目を向けたときに彼の頭をかけめぐる思考は、群衆の「恐ろしい眼」から四年前に出会った狼の眼を想起するもので、『狂人日記』の「おれ」の思考の流れを思わせるようなものになっている。阿Qが「人格的には分裂している」という西諦の印象ももっともと思われる次第だが、仮に「分裂」があるのだとすれば、それが生じた原因はどこにあったのだろうか。

ここで仮説として考えたい原因が、魯迅が『吾輩は猫である』から学んで『狂人日記』に生かしたと本稿で仮説しているところの＜異者の語りの二声構造＞という小説作法が、微妙に形を変えながら『阿Q正伝』にも受けつがれているのではないかということである。たしかに、前の二作における＜異者＞は小説の主人公兼語り手であるのに対して、『阿Q正伝』における＜異者＞阿Qは主人公ではあるが、語り手ではないから、別の語り手によって叙述される＜異者＞であるという点が異なっている。ただ、作品の構成を見ると、連載第一回すなわち「第一章 序」においてのみ語り手が前面に出て阿Qの伝記を書くことになった経緯などを語り、第二章以降は最終章「大団円」まで一貫してその物語を叙述してゆく形になっている。すなわち「序」が第二章以降の物語全体を枠に入れて読者に提示するという形を取っているわけで、この点において『狂人日記』と構造上類似しているといえる。この観点からみると、『狂人日記』の「おれ」がやがて単なる「狂人」でなく作者の主張を背負った人物へと変化してゆくのに似た変化が『阿Q正伝』にも見られるのである。

つまり前半は阿Qのマイナス面を徹底的に暴くことで「冷嘲」的な笑いを呼び起こすという形で一元的であ

33 『魯迅選集 第七巻』（増田渡訳 岩波書店1986）p.75-76。文中の「開心話」とは「楽しい話」という程度の意味で、気楽な読み物を載せていた欄である。

った語りの構造が、後半では、革命という社会問題もからんで深刻さを増し、語り手の阿Qへの態度は「冷嘲」的であると同時に同情的でもあるという『狂人日記』の場合にも似た二元性すなわち「二声構造」を備えるようになっているのである。

本章では『阿Q正伝』の語りに見られるこのような二声構造をめぐって、適宜『吾輩は猫である』や『狂人日記』と対照しながら、様々な視角から分析を加えてゆきたい。

第一節 有力者への皮肉

阿Qが属する農村「未荘」で最も有力な人々として描かれているのは、趙旦那と「にせ毛唐」すなわち銭旦那の息子である。この二人はいずれも阿Qを圧迫する地主階級の権力者であり、最終的には彼を死に追いやる陰謀に加担していたことを疑われる人物である。したがって、阿Qにとっては天敵ともいえるこの二人をどう描くかには、作者が阿Qに対してもっている感情が当然反映するはずである。そこで、以下において、この二人の人物像をやや詳しく見ておきたい。

まず趙旦那が非常に横暴な権力者で、阿Qが自分の姓も「趙」だと主張する権利さえ奪ってしまったことは「第一章 序」ですでに語られていた。その趙家へ阿Qは生活上やむをえず米をつきに来る。そしてその女中である呉媽に対していきなり「おめえ、おらと寝ろ」と不埒な言葉を口走り、たちまち見とがめられて趙家の人々によって厳罰に処せられる。

このシーンでは、一見、阿Qが完全な悪で、趙家の人々が正義であるかのようであるが、その過程で作者は趙家側の悪をも書き込むことによって、趙家の「正義」に対して皮肉な目を向けることも忘れていない。すなわち、阿Qが突然「おらと寝ろ」と言い出す前に、呉媽は趙旦那が「若いのを囲いなさる言うもんで」妻が二日も食事をしないほど苦しんでいるという話をしていたのである。つまり、若い女に欲望をもち、それを満足させようとしている点で、趙旦那と阿Qは全く同等であるわけで、このような搜話を書き込む作者の狙いの一つに、趙旦那およびその一家の価値低下があることは明らかだろう。

弱者に対していばり散らす趙旦那が自分より強いものに対しては一転して卑屈になることは「第六章 中興から末路まで」で、町から衣類をたくさん持ち帰ることで急に地位を上げた阿Qに対する態度の急変にも如実に表れている。「そのころ未荘の人々の眼に映じる阿Qの地位は、趙旦那を上廻ったとはいえぬまでも、ほぼ同等と評しても過言ではあるまい」とされるほどになったのだが、その阿Qについて、趙旦那は、若旦那らと話すときには「どうも阿Qはうさん臭い。戸締まりに気をつけた方がよい」などと言いながら、結局趙家に阿Qが現れると、態度を一変させる。

“阿Q，听说你在外面发财，”赵太爷踱开去，眼睛打量着他的全身，一面说。“那很好，那很好的。这个，……听说你有些旧东西，……可以都拿来看一看，……这也不是别的，因为我倒要……”／《阿Q、

かせぎに行って、だいぶためたそうだな》大旦那は、自分から歩みよって、相手の全身をなめるように見ながら言った。《結構、結構。ところで……その、古着など持っとるとか……持ってきて見せるんだな……いや、ほかでもない、わしはちょっと、その……》

阿Qの売っているものはあきらかに来歴不明、たしかに「うさん臭い」にもかかわらず、趙旦那はやはり安いものがほしくて、阿Qに丁寧話しかける。しかし、阿Qは意外に売ってくれず、無愛想に「なくなりました」、「あとのれんが一枚」などと返答する。こうして趙旦那は「失望と怒りと心配とで」阿Qを見送ることになるが、そのあとの家族会議で「阿Q放逐の提案」も出て、結局「夜の締り」を厳重にすることに決めたのは、趙家の人々がみな阿Qを泥棒だと考えたからのようである。さらに、あくる日、地保が阿Qのところにやってきて、その手元に残っているのれんを没収する。阿Qは返せと抵抗するが、地保は「返さぬばかりか」、逆に阿Qが泥棒をしていることの「口どめ料を毎月よこせとおど」す。この事件で趙旦那の家族から村人までも阿Qを「敬遠」するようになっていく。

ところが、趙旦那の態度が間もなく再び変わるのである。きっかけは「革命」の噂が村中に流されることである。語り手の紹介では、阿Qは革命党にそもそも好感を持っていないが、「その革命党が意外にも、百里四方にその名も高い拳人旦那を縮みあがらせた」のを見て、上機嫌になり、自分も革命党になったような気がする。すると「うれしくなって」大声で「謀反だ！ 謀反だ！」と叫んだので、村人はおびえて彼を見つめ、みな阿Qが本当に革命党だと思い込んでしまう。趙旦那はこのような阿Qを見て、またかれの御機嫌をとるようになるわけである。ある日、「趙家のふたりの旦那と、ふたりの本物の一族とが、表門のところに集って、革命について討論していた。阿Qは見向きもせず、首をもたげたままで、うなりながら通り過ぎた」のだが、以前は阿Qと同族であることをまったく認めたくなかった趙旦那が、今回は恐ろしくて低い声で「Qさん」³⁴と呼びかけてくる。

このように、趙旦那の阿Qに対する態度は、状況の変化とその場その場での利益によって、ころころ変わる。語り手は基本的に阿Qの視点から語っているが、時々趙旦那のような、阿Q以外の人物の心理にも入り込む全知の語り手となって、大いに批評性を発揮しているといえる。このときの語り手はもはや「第一章 序」に登場する阿Qの姓さえ分からない信用できない語り手ではなくなり、全知の信用できる語り手になっているのである。

未荘では趙旦那のほか、銭旦那の息子である「にせ毛唐」も阿Qと対峙する有力者の一人である。日本へ留学している間に辮髪を切ってしまい、革命党かと疑われた際の家族の反応はこのようである。

他的母亲大哭了十几场，他的老婆跳了三回井。后来，他的母亲到处说，“这辮子是被坏人灌醉了酒剪去了。本来可以做大官，现在只好等留长再说了。”／そのため母親は、十数回も泣きわめいたし、細君は三

³⁴ 中国語原文は“老Q”

回も井戸にとび込んだ。そのうちに母親は、こう言ってふれ廻るようになった。《あの辮髪は、悪者のために酔いつぶされて切られたんだよ。えらいお役人になれるはずが、今じゃ髪が伸びるまでお預けさ》

辮髪のために、本当に「泣きわめいた」としても「十数回も」数える人がまずいないだろうし、「細君は三回も井戸にとび込んだ」というのもかなり不思議なことであるが、語り手はこの情報を読者に詳しく伝える。無論、これらの非現実的な語りは事実を伝えようとするものではなく、「にせ毛唐」らへの皮肉の態度を明白にする語り手の手段なのである。辮髪を切るのは革命の立場を示す行動だが、「にせ毛唐」とその家族はやがて処罰を受ける可能性を恐れ、「切られた」のだと強弁して自分が革命党ではないことを主張するわけである。

ところが、革命が始まるや否や、かれはすぐ革命党に変身し、その中の偉い役にさえ就任するという成り行きになる。「第八章 禁じられた革命」で「にせ毛唐」は中庭で、このように「演説」をする。

“我是性急的，所以我们见面，我总是说：洪哥！我们动手罢！他却总说道No！——这是洋话，你们不懂的。否则早已成功了。然而这正是他做事小心的地方。他再三再四的请我上湖北，我还没有肯。谁愿意在这小县城里做事情。……”／《わが輩は気が短いから、会うたびにこう申した——黎君、立ちあがろう！その度に相手はノウという。ノウ——これは外国語であるから、諸君にはわからん。そうでなければ、とっくに成功しとったはずである。もともと、それだけかれは用心ぶかいんじゃない。かれは再三再四、わが輩に湖北へ来てくれと申すが、わが輩はまだウンと言わんのだ。こんな小さな県城で仕事をしたいとは思わんが……》

「にせ毛唐」の「演説」はかなり信用しがたい話である。なかに登場している「黎君」は明らかに当時軍権を握り、のちに大統領になる黎元洪のことである。こんな大人物と知り合っている以上、未荘における自宅の中庭で演説する暇があるまいし、未荘で革命するぐらいの人なら、そもそも「黎君」と面識があるはずもない。しかも、演説のなかにわざと「ノウ」を使い、さらに「これは外国語だから、諸君にはわからん」と付け加える。これも相当疑わしい内容である。黎元洪は確かに新式教育を受けたことがあるけれども、それは日本なので、西洋でもないから「ノウ」をよく口にするはずがない。しかも聴衆の「諸君」には英語が「わからん」以上、わざわざ「ノウ」を言う必要がないではないか。「かれは再三再四、わが輩に湖北に来てくれと申すが、わが輩はまだウンと言わんのだ」にいたっては、なおさらまったくのうそである。つまり「にせ毛唐」がこの「演説」の名に値しない駄弁でうそを並べて無知な村人を欺こうとしていることは、読者には明白に伝わるのである。このような語りは、この人物に対する強烈な軽蔑・皮肉の態度を明白に示しているのである。

『阿Q正伝』で風刺されるもう一人の有力者は、未荘の趙、錢よりも身分が高い、町の挙人旦那である。「第九章 大団円」で、阿Qが挙人旦那家の財産の掠奪犯として捕まる。しかし、「贓品の追及」「犯人の見せしめ」のどちらを先にすべきかについて挙人旦那と隊長は意見が一致していない。革命の進行につれ、隊長はますます

す挙人旦那を重んじなくなり、最後まで「犯人の見せしめ」を先にするのを強く主張する。すると、

挙人老爷窘急了，然而还坚持，说是倘若不追赃，他便立刻辞了帮办民政的职务。而把总却道，“请便罢！”于是举人老爷在这一夜竟没有睡，但幸第二天倒也没有辞。／挙人旦那はぐっと詰まったが、自説は曲げずに、もし贓品の追及をやらぬなら、自分は民政担当の職を即刻やめるといきまいた。ところが、隊長が、《ご随意に》とつぶねたので、挙人旦那はその晩、一睡もできなかったのだ。しかし、さいわい翌日も辞職はしなかった。

語り手は最後の結果を読者に紹介するときに、「さいわい」という言葉を使っている。つまり、語り手は挙人旦那が本当に辞職するのを信じて、これから隊長との関係とか、町の民政とかを本気に心配しているような姿勢を示すが、結局「辞職はしなかった」から、ほっとして「さいわい」なことだと言っている。ところが、言わなくても読者には自明のはずだが、「辞職」するつもりは当初からないだろう。このような言い方をする事によって、挙人旦那の偽善性を表面化し、大いに皮肉っているわけである。

このように、『阿Q正伝』に登場する地主階層は弱いものを圧迫しながら生存している。革命の噂が流れると、怖くて阿Qの機嫌をとるように試みているが、すばやく革命を支持するように偽装して保身をはかり、引き続き蒙昧な民衆を騙すのである。同時に革命を自分たちだけの特権にし、阿Qのような者は革命への参加を禁じて、冤罪で捕まえてしまう。阿Qが最後に無実の罪を着せられるのに対し、逆に処刑されるはずの趙旦那らはさまざまな手腕を巧みに運用することを通して、自分の地位を保つことができる。語り手は彼らの変化をユーモラスな口調で描写すると同時に、彼らへの皮肉を示しているのである。

このように見てくると、『阿Q正伝』における主人公阿Qと村の有力者たちとの関係は、『狂人日記』における「おれ」と有力者との関係ときわめて似通っていることがわかる。このことは、魯迅が、『狂人日記』で基礎に据えた構造を『阿Q正伝』でもう一度使おうとしたこと、あるいは開始当初はそうでなかったとしても、物語が進んで「だんだんまじめになってき」てからはその構造が明確化していったことを示している。ところで、この構造はもともと魯迅が『吾輩は猫である』に学んだものであるというのが本稿第二部の主張であった。この見方が誤りでないとするなら、『吾輩は猫である』の基本構造は『阿Q正伝』にも生きていくはずであり、同一の構造から様々な類似点が派生するのは十分に考えられるところである。

第二節 村人などの傍観者への反感

趙旦那や「にせ毛唐」のような有力者のほかに、阿Qに対する態度を彼の運命の転変、地位の変化に応じて巧みに変化させる人間はまたいる。それは未荘に生活する普通の民衆である。かれらは常に有力者のご機嫌を取ろうとしながら、自分よりもっと弱い立場にいる阿Qを軽蔑していたが、その態度が永久に変わらないわけ

ではない。阿Qが地主階層にいじめられ、死刑まで追い詰められたときには、冷淡に傍観したり、容赦なく悪評を加えたりするが、逆にかれが好運にめぐまれているときには極力近づいてくる。このような事情をすべて把握している語り手はまた冷静な口調で彼等の行動と心理を読者に伝えることによって、かれらに対する反感を示すのである。以下において、語り手に叙述される村人の態度の変化を詳しく分析してみる。

もともと未荘の最下層に生存していた阿Qは「第五章 恋愛の悲劇」で呉媽を口説いたために、さらに村人の軽蔑に陥るが、まもなくまた村人の尊敬を浴びるようになる。なぜかという、「第六章 中興から末路まで」では、阿Qは城内から未荘に戻ってきて、金持ちになっているようだからである。

据阿Q说，他是在举人老爷家里帮忙。这一节，听的人都肃然了。这老爷本姓白，但因为合城里只有他一个举人，所以不必再冠姓，说起举人来就是他。这也不独在未庄是如此，便是一百里方圆之内也都如此，人们几乎多以为他的姓名就叫举人老爷的了。在这人的府上帮忙，那当然是可敬的。但据阿Q又说，他却不高兴再帮忙了，因为这举人老爷实在太“妈妈的”了。这一节，听的人都叹息而且快意，因为阿Q本不配在举人老爷家里帮忙，而不帮忙是可惜的。／阿Qの話だと、かれは举人旦那の家で働いたそう。聞き手はこの話に感服した。この旦那は、白という姓だが、城内ただひとりの举人だから、わざわざ姓をつけるまでもなく、举人とさえいえばかれを指すことに決っている。未荘だけでなく、百里四方みなそうである。だから、举人旦那が姓名だと思い込んでいるものさえある。この人の邸で働いたとなれば、尊敬はあたりまえだ。しかし、これも阿Qの話だが、もう二度と働きに行きたくない、この举人旦那ときたら、まったく「こん畜生」だそう。聞き手はこの話に、ため息をつき、かつ痛快がった。なぜなら、阿Qは举人旦那の家で働くような柄でないが、といって働きに行かぬのはもったいないから。

举人旦那のおかげで、阿Qも尊敬される人物になる。実は、阿Qが自慢話に陶醉しているうちに、周りの人たちはすでに複雑な心理活動をしている。彼らの心理では、阿Qが举人旦那の邸で働くことについて暗に嫉妬や不愉快が起こるが、阿Qがその仕事をやめたのが分かったら、その不愉快が解消され、今度は「痛快」になる。つまり、他人の勝利を嫉妬すると同時に、その失敗をひそかに喜んでいるのである。全知の語り手が彼らのこのような心理を読者に伝えることによって、世人への反感を隠さずに表しているわけである。

このように周りの尊敬を集め始めた阿Qは、手元には安い衣類をたくさん持っているため、呉媽を口説いたことによる「恋愛の悲劇」事件以来、かれを避けていた女たちもその態度が一変して、争って買いに来る。

于是伊们都眼巴巴的想见阿Q，缺绸裙的想问他买绸裙，要洋纱衫的想问他买洋纱衫，不但见了不逃避，有时阿Q已经走过了，也还要追上去叫住他，问道：“阿Q，你还有绸裙么？没有？纱衫也要的，有罢？”
／こうして女たちは、絹のスカートのないものは絹のスカート、キャラコのほしいものはキャラコを買う

ために阿Qに会いたがり、もう阿Qの姿を見ても逃げ出すどころか、あとを追って引きもどすまでになった。

女たちの態度にこのような大きな変化が起こった原因は、阿Q自身の変化である。今や阿Qは女たちに利益をもたらす人物になったがゆえに、これを心得た女たちの態度が逆転し、阿Qが人気者に変身したのである。

「第五章 生活問題」では呉媽との「恋愛の悲劇」が起こったがゆえに、女たちが「阿Qの姿を見ると、こそそ門のなかへ隠れてしまう」が、今や女たちはかれを囲んで争って安い衣類を売ってもらう。前の寂しい場面と今のにぎやかな場面が対比されることによって、村人の心の深層に潜んでいる利益至上主義が鮮やかに浮かび上がるわけである。

ところが、阿Qが処刑されると、村人が彼に対する評論には再び大変化が起こる。「第九章 大団円」の最終段落は、阿Qの処刑を見守った世人が交わすこのような議論である。

至于舆论，在未庄是无异议，自然都说阿Q坏，被枪毙便是他的坏的证据：不坏又何至于被枪毙呢？而城里的舆论却不佳，他们多半不满足，以为枪毙并无杀头这般好看；而且那是怎样的一个可笑的死囚呵，游了那么久的街，竟没有唱一句戏：他们白跟一趟了。／世論はどうかといえば、むろん未荘ではひとりの例外もなく、阿Qが悪いとした。銃殺に処せられたのが何よりの証拠、悪くなければ銃殺されるはずがない。一方、城内の世論はあまり香しくなく、多くのものが不満だった。銃殺は首斬りほど見ておもしろくないから。それになんと問ぬけな死刑囚ではないか。あんなに長いあいだ引き廻されながら、歌ひとつたえないなんて。これでは歩き損じゃないか、というのだ。

これはいかにも冷淡な傍観者たちの論評である。未荘の村人の意見はつねに有力者の後を追いついて、もっぱら見物のために来た城内の人間たちは、「首斬り」でなく「銃殺」であったことに「不満」で、「歌ひとつたえない」ことにさえ文句を言うのである。村人の一人には違いない阿Qの処刑を見せ物としてしか見ていない世人の情景で幕を閉じたところに作者の厳しい批判精神を見ることもできるだろう。すなわち、非情に傍観する世人への語り手の厳しい目はそのまま作者魯迅自身のものでもあるにちがいない。それというのも、＜傍観する世人＞というこのテーマは、魯迅が繰り返し怒りを込めて描いてきた、魯迅文学の大きな主題の一つともいえるものだからである。

そもそも自分に医学を捨てて文学に進むことを決意させる動機となったものが、中国人のこのような側面を見せつけられたことであったことを、魯迅は『呐喊・自序』³⁵（1923）と『藤野先生』³⁶（1926）のなかで語っている。仙台で医学を学んでいたころ、幻灯を使う細菌学の授業で、時にニュース映像を見せられることも

³⁵ 本編末尾は「一九二二年一月三日記す」と書かれており、翌年8月21日『晨报』『文学旬刊』に発表され、同月刊行の『呐喊』に収められた。

³⁶ 1926年10月12日厦門で執筆され、『莽原』12月10号に発表された。

あったのだが、ある日のものは、中国人がロシア軍のスパイを働いたとの嫌疑で、日本軍によって銃殺される場面を含んでいた。「それを取りまいて見物している群衆も中国人だった」。

“万岁！”他们都拍掌欢呼起来。／「万歳！」彼らは、みな手を拍って歓声をあげた。

这种欢呼，是每看一片都有的，但在我，这一声却特别听的刺耳。此后回中国来，我看见那些闲看枪毙犯的人们，他们也何尝不酒醉似的喝彩，——呜呼，无法可想！但在那是那地，我的意见却变化了。／この歓声は、いつも一枚移すたびにあがったものだったが、私にとっては、このときの歓声は、特別に耳を刺した。その後、中国に帰ってから、犯人の銃殺をのんきに見物している人々を見たが、彼らはきまって、酒に酔ったように喝采する——ああ、もはや言うべき言葉はない。だが、このとき、この場所において、私の考えは変わったのだ。³⁷

つまり医学によって身体を強健にすることができたとしても、精神がこのありさまでは致し方ない。精神を改造することができるのは文学だ、という考えに変わったというのである。この挿話は魯迅神話の一つともいえるほど有名なもので、実は魯迅による虚構であるとの説³⁸もあるのだが、それにしても中国人のこの側面への強い悲憤が魯迅文学の大きな動力の一つとなっていたことは否定できないだろう。『阿Q正伝』のそのような終幕にその表現を見ることは、きわめて妥当なことといつてよい。

同じ悲憤は『狂人日記』においても幾度か示されていたといえる。たとえば、往来について「おれの陰口をついてる」連中について「おれ」はこう考えていた。

他们——也有给知县打枷过的，也有给绅士掌过嘴的，也有衙役占了他妻子的，也有老子娘被债主逼死的；他们那时候的脸色，全没有昨天这么怕，也没有这么凶。／やつら——その中には、県知事に枷をはめられたやつもいる。地主にひっぱたかれたやつもいる。役人にてめえの細君を寝取られたやつもいる。高利貸に親をいじめ殺されたやつもいる。そのときでもやつらの顔つきは、きのうのようにおびえていず、すぐくもなかった。

つまり「やつら」は、県知事らの有力者にそれほどひどい目にあわされたときでさえ、「おれ」をにらむときのように「おびえていず、すぐくもなかった」というのである。権力者のすることに対しては、傍観するのみで、自分から行動を起こすことの全くない世人に対する批判的な意識をここに読むことができる。同様の意

³⁷ 訳文は竹内好訳「藤野先生」（『魯迅選集（第二巻）』岩波書店 1986）に拠る。

³⁸ 「その幻燈の種版（たねいた）であるガラス絵が残されている。その幻燈種版は、もと二〇枚のセットのうちの五枚で、一～二〇の通し番号のうち二・四・五・一六番のものが抜けて、見当たらない状態で発見された。のちに魯迅が『呐喊・自序』で取り上げる、ロシア軍スパイを働いた中国人を、日本軍が処刑するシーンは、一五枚には含まれていなかったし、残りの五枚の内容は不明だが、どのみち手書きのガラス絵という性質からして、まわりで処刑を見物させられる中国人の顔の表情までが、描かれているとは考えにくい」（阿部兼也（1999）『魯迅の仙台時代——魯迅の日本留学の研究』東北大学出版会 p.334）。

識は「十」で兄貴を説得し始めたときに、そろそろと集まってきた見物人たちの描写と、彼らは「どれも人間を食う人間どもだ」という「おれ」の認識にも示されているだろう。

このようにして、『狂人日記』と『阿Q正伝』に一貫する構図として、権力に迎合するばかりの傍観者的な世人への批判的な姿勢を指摘することができるが、この構図は、第二部第二章第三節で見たとおり、『吾輩は猫である』のうちにすでに見られたものである。もっとも『吾輩は猫である』における世人への風刺はずっと穏やかなもので、魯迅の場合とは異なった印象を与えるが、魯迅が漱石から学んだ小説作法の一部にこのような世人批判の構図もあったかもしれないのである。

第三節 「反語」的な語り

『阿Q正伝』がもともと気楽な読み物と意図して着手されたことは本章冒頭ですでにふれたが、そのことは第二章から第四章までの題、「勝利の記録」「続勝利の記録」「恋愛の悲劇」がすべて「反語」的なものであることにも示されている。章題のみならず内容もちろん「反語」的であり、第二、三章の「勝利」が「精神勝立法」によってごまかされた実質的敗北を意味していることは言うまでもない。これを受けた第四章は次のように始められている。

有人说：有些胜利者，愿意敌手如虎，如鹰，他才感得胜利的欢喜；假使如羊，如小鸡，他便反觉得胜利的无聊。又有些胜利者，当克服一切之后，看见死的死了，降的降了，“臣诚惶诚恐死罪死罪”，他于是没有了敌人，没有了对手，没有了朋友，只有自己在上，一个，孤另另，凄凉，寂寞，便反而感到了胜利的悲哀。然而我们的阿Q却没有这样乏，他是永远得意的：这或者也是中国精神文明冠于全球的一个证据了。／ある種の勝利者は、敵が虎や鷹であってはいじめて勝利の喜びを感じるので、敵が羊や鶏のひなだと逆に勝利のむなしさを感じるそうだと。また、ある種の勝利者は、征服の完成によって、死ぬものは死に、降伏するものは降伏して、みんな「おそれ多くもお上に言上」式の臣下となり、もはや敵も競争者も友もなく、ひとり、ぽつねんと、さびしく、自分だけ上位に取り残されると勝利の悲哀を感じるそうだと。しかし、わが阿Qはそんな弱虫ではない。かれはいつだって意気軒昂である。これまた、中国の精神文明が世界に冠たる一証かもしれない。

阿Qの愚かな「意気軒昂」さをもって「中国の精神文明が世界に冠たる一証」とするのだとすれば、これは「中国」に対する大変強烈な皮肉である。ともかくこのあたりから、阿Qと「中国」とが重ね合わせられ、阿Qを「中国」の寓意として読むこともできるようになってくる。

前章で尼さんの頭をなでた阿Qは、その「指先のすべすべが気になって、いつもふわりふわりし、《おんな…》と考え込むようにな」る。

即此一端，我們便可以知道女人是害人的東西。／この一事から、われわれは、女が有害な存在であることがわかる。

まったく極端な論法であり、これを語り手が本気で言っていると思う読者は少ないだろう。つまり語り手のこの種の言葉は「反語」的な冗談として読者によって相対化されるわけである。この意味で作者と読者との間の一種の共犯関係が成立しているといえるのだが、実はこのような形で極端な主張を誰かに言わせて、それを「反語」として相対化してゆくという仕組みは『吾輩は猫である』に顕著に見られたものである。

たとえば、「十一」での苦沙弥らの会話で、寒月の郷里では女もみな色が黒いのだという話から、「女と云ふものは始末におへない物件だからなあ」と言いだした苦沙弥がついには「とも角も女は全然不必要な者だ」とまで断言するのである。もちろんこれは「反語」として相対化されるべき言葉であり、作者漱石がこれを本気で言っていると思う読者はいないだろう。

このような「反語」的な語りの方針という点において、『阿Q正伝』はたしかに『吾輩は猫である』と多少の類似性をもっている。だからといって俄かに影響関係を即断することはできないわけだが、『吾輩は猫である』の影響を「反語」という面に見出している周作人の見方（第一章参照）を重んじるなら、その可能性は大きいといわなくてはならない。

女を有害な存在と見る『阿Q正伝』の「反語」的な語りはさらに続く。

中国的男人，本来大半都可以做圣贤，可惜全被女人毁掉了。商是姐己闹亡的；周是褒姒弄坏的；秦……虽然史无明文，我们也假定他因为女人，大约未必十分错；而董卓可是的确给貂蝉害死了。／中国の男は、もと大部分が聖賢になれるはずだが、惜しいことに、みな女によって妨害されるのだ。商は姐己に亡ぼされ、周は褒姒に毒された。秦は……歴史に明文はないが、これも女のためと推定しておそらく大過あるまい。そして漢の董卓は、あきらかに貂蝉に殺されたのだ。

これはもちろん本気に受け取られるべきものではなく、大概の読者は苦笑しながら読み進めるわけである。語り手はさらに言う。「阿Qももとは正義の人であり、「男女の別」を守ること」に厳格で、尼さんや「にせ毛唐」のような「異端」を排斥することにかけても「気骨があった」。その彼が「若い尼さんから、ふわりふわりにされてしまった」

这飘飘然的精神，在礼教上是不应该有的，——所以女人真可恶／このふわりふわり精神は、礼教上許せないものだ——だからこそ、女は憎むべきものである。

この論法は『狂人日記』に頻出していた誤った三段論法を連想させる（第一部第一章第一節参照）。両作品の親近性がここにも現れているわけだが、ともかくこのような身勝手な論法によって、阿Qの心理を追う語り手は「反語」的な女性批判を重ねてゆく。

五、六年前に女の脚をつねったときは「ふわりふわりにならなかった」のに、今回尼さんの件でそうなったことから「異端の憎むべきことが、これでもわかる」と断定し、女は「かならず男を誘惑する」はずであるにもかかわらず、自分に笑いかけてこないことから、「女はみな「猫かぶり」なのだ」と結論し、「これまた女の憎むべき一面である」と決めつけるのである。

これらの意見が、作者魯迅自身のものでないことはもはや言うまでもないだろうが、確認の意味で、魯迅が1934年に書いたエッセーの一部を紹介しておきたい。

我一向不相信昭君出塞会安汉，木兰从军就可以保隋；也不信妲己亡殷，西施沼吴，杨妃乱唐的那些古老话。我以为在男权社会里，女人是决不会有这种大力量的，兴亡的责任，都应该男的负。但向来男性的作者，大抵将亡败的大罪，推再女性身上，这真是一钱不值的没有出息的男人。／私は前から、王昭君が塞を出て漢朝を安泰にすることができたとか、木蘭が従軍して隋朝を保つことができたとかいうことを信用していない。また妲己が殷を亡したとか、西施が呉を死地に追いやったとか、楊妃が唐を乱したとかいった古い話を信じてもない。男権の社会において、女は決してそういう大きな力をもち得るものではなく、興亡の責任はすべて男が負うべきであると私は思っている。ところがこれまでの男性の作者は、ほとんどみな敗亡の大罪を女性の肩に推しつけてきた。これは全く一文の値打もない能なし男のやることである。

39

この考え方に従うならば、阿Qは当然「全く一文の値打もない能なし男」ということになるわけである。小説の前半を見る限り、阿Qは実際その程度の人物というほかなく、作者としてもこの劣悪な男を「反語」的に描くユーモア小説以上のものは意図していなかったものと考えられる。それが、やがて当初の予定に反して「だんだんまじめになって」、作品の調子が変わってしまったことは、すでに述べたとおりである。それでは阿Qを見る語り手の「反語」的な目は、そこではどう変わってゆくのだろうか。それが次節の検討課題である。

第四節 語り手の阿Qへの同化

以上、本章において繰り返し見てきたとおり、語り手の主人公に対する態度が大きく変化してゆくことが『阿Q正伝』の構造上の大きな特質の一つといえる。作品の前半において欠陥だらけで何一つ長所のない人物とし

³⁹ エッセー「阿金」による。本編は1934年12月21日に雑誌『漫画生活』のために執筆されたが、検閲により掲載不可となり、36年2月上海の月刊『海燕』第二期に発表された。訳文は松枝茂夫訳「阿金」（『魯迅選集（第十一卷）』岩波書店 1986）に拠る。

てあれほど侮蔑的、「冷嘲」的に阿Qの行状を叙述していた語り手が、結末近くに至ると、「冷嘲」どころか、阿Qの心理にほとんど没入して、阿Qといっしょに嘆いたり怯えたりするような調子になるのである。

たとえば、「第七章 革命」で革命党に参加しそこねた阿Qが「第八章 禁じられた革命」ではすでに革命党になっている「西洋先生」、つまり例の「にせ毛唐」に接近し、自分も入党しようとするのだが、全く相手にされず、「葬い棒」で叩き出されてしまう。

阿Q将手向头上一遮，不自觉地逃出门外；洋先生倒也没有追。他快跑了六十多步，这才慢慢的走，于是心里便涌起了忧愁：洋先生不准他革命，他再没有别的路；从此决不能望有白盔白甲的人来叫他，他所有的抱负，志向，希望，前程，全被一笔勾销了。至于闲人们传扬开去，给小D王胡等辈笑话，倒是还在其次的事。／阿Qは頭を手でかばって、いつの間にか門から逃げ出していた。だが西洋先生は追手はかけなかった。六十歩以上も走って、それから足をゆるめた。そのとき心に悲しみがこみあげた。西洋先生に革命を禁じられてしまえば、もう道はない。とうとう白兜に白鎧の人が呼びに来てくれるあては、金輪際なくなった。かれの抱負も、ねらいも、希望も、将来性も、みんなペケだ。遊び人たちが言いふらして、小Dやひげの王にも笑われるだろうが、そんなことは二の次だ。

ここでは、阿Qを突き放して笑いものにする前半の語り口はすっかり影をひそめ、むしろいっしょになって「悲し」む語り手の姿勢が顕著である。最終章「大団円」になると、この傾向は一層加速し、処刑直前の阿Qを叙述する語りは次のような美文となっている。

这刹那中，他的思想又仿佛旋风似的在脑里一回旋了。四年之前，他曾在山脚下遇见一只饿狼，永是不近的跟定他，要吃他的肉。他那时吓得几乎要死，幸而手里有一柄斫柴刀，才得仗这壮了胆，支持到未庄；可是永远记得那狼眼睛，又凶又怯，闪闪的像两颗鬼火，似乎远远的来穿透了他的皮肉。而这回他又看见从来没有见过的更可怕的眼睛了，又钝又锋利，不但已经咀嚼了他的话，并且还要咀嚼他皮肉以外的东西，永是不近不远的跟他走。／その刹那、思考はもう一度旋風のように頭をかけめぐった。四年前、かれは山の麓で一匹の飢えた狼に出あったことがある。狼は近づきも遠のきもせずに、かれを食おうとして、いつまでもあとをつけてきた。あまりの恐ろしさに生きた心地はなかった。さいわい鉈が一挺あったお陰で、どうにか無事に未荘にたどりついたが、あのときの狼の眼は忘れようにも忘れられない。残忍な、それでいて臆病な、きらきら鬼火のように光る眼、それがはるか遠くからかれの皮と肉をつき刺すような気がしたものだ。ところが今度という今度、かれはこれまで見たこともない、もっと恐ろしい眼を見た。にぶい、それでいて棘のある眼。かれのこばを噛みくだいたばかりでなく、かれを皮と肉以外のものまで噛みくだこうとするかのように、近づきも遠のきもせずに、いつまでもあとをつけてくる。

語りの調子の変化の背景に作者魯迅自身の阿Qへの感情の変化があると見ることは当然許されるだろう。このような見方を前面に出した有名な評論に李長之の『魯迅批判』がある。

阿Qは、もはや魯迅が呪う人物ではない。いや、それどころかもっとも気がかりで、心配で、じれったい人物、すなわち愛してやまない人物なのだ。ある者は、阿Qをあざけり、ある者は、冷たくあしらい、ある者は、精神上の痛みと傷だ、と決めつけている。しかし魯迅は、遠くからではあるが、阿Qを慈しみつづけていた。⁴⁰

もしそうだとすれば、かつてはあれほど「冷嘲」していた阿Qを、魯迅はなぜそれほどにも愛するようになったのであろうか。李はまたこのようにも述べている。

「阿Q正伝」の世界では、阿Qに同情を示す者など一人もいない。しかし人びとの阿Qへの同情がないために、まさに作者である魯迅の、阿Qへの無限の同情がよく示されているのだ。⁴¹

つまり「阿Qへの無限の同情」の原因は「人びとの阿Qへの同情がない」ことだというのである。この観点を敷衍すると、次のような解釈も可能になるだろう。すなわち魯迅文学にあつては、そのような傍観者的な「人びと」への悲憤がきわめて強い動力となっているがゆえに、そのような「人びと」の同情を全く受けず、ついには圧殺されてしまう阿Qの運命には、その批判意識の裏返しとして、逆に強い同情が注がれずにはいなくなってくるのだ、と。

こうして、『阿Q正伝』の語り手は、前半では「冷嘲」していた主人公に対し、後半では全面的な同情を寄せ、ほとんど一体化の様相さえ呈している。このような語りの変容は、実は『吾輩は猫である』にも見られたものである。第二部で詳述したとおり、語り手の「吾輩」は「一」「二」において「冷嘲」していた主人の苦沙弥に対し、やがて同情的となり、彼と一体化した立場から語るようになるのであった。そしてその背後には作者自身の声も聴き取られるという意味で、その特殊な語りの様相を＜二声構造＞と呼んできたわけだが、ほとんど同じ構造が『阿Q正伝』にも見られることは、以上の分析から明らかであろう。つまり、この構造は、魯迅が『吾輩は猫である』のうちに見出して、『狂人日記』において自己の方法として完成させ、さらには、『阿Q正伝』にも変則的な形でもち込んだきわめて有効な文字技法であったといえる。

⁴⁰ 李長之『魯迅批判』南雲智訳 徳間書店（1990）p.114

⁴¹ 同上p.115

結 論

本論文では、『狂人日記』『吾輩は猫である』『阿Q正伝』の三作を取り上げ、「狂人」の「おれ」、猫の「吾輩」、
「阿Q」のような「周囲の人と異なるという点に重要性をもち、その異質性によって既成の社会を逆照射して
見せるような存在」を<異者>と呼び、また、このようなく異者>の語りの背後に作者の声が隠されていると
いう意味での二元性を<二声構造>と名づけた（序論参照）。三作の語りの構造を詳細に分析し、類似性を摘出
した。

まず、第一部では、『狂人日記』の主人公兼語り手、すなわち「精神異常者」とされている「おれ」の語りの異
常性を詳細に分析し、それに重ね合わせて作者の声をも伝えてゆく手法、すなわち<異者の語りの二声構造>
を摘出した。

第二部では、これを受けて、『吾輩は猫である』における非人間の語り手、「吾輩」の語りとその作者との関
係を分析し、そこに『狂人日記』の場合に酷似した<二声構造>を発見した。その上で、魯迅が愛読したとさ
れる『吾輩は猫である』が『狂人日記』に与えた影響の可能性に論及した。

第三部で取り上げた『阿Q正伝』の主人公阿Qは、<異者>ではあっても語り手ではないという点で上記二
作の場合と異なるが、作品の後半では徐々に語り手が主人公に接近し、ついには両者が一体となった語りに到
達することで、やや変則的なく異者の語りの二声構造>を成立させていると見ることができる。すなわち、阿
Qの心理に入り込んだ語りに聞き取られる作者の声が、権力迎合的で傍観者的な世人への痛烈な批判となっ
ていることは、『狂人日記』の「おれ」の語りの場合と同じなのである。

以上のような分析の結果から推測されるのは、魯迅が『狂人日記』で完成させた<異者の語りの二声構造>
という小説作法を『阿Q正伝』にも、かなりの変形を加えた上で持ち込んだことである。さらに、この<二声
構造>がもともと『吾輩は猫である』から学び取った手法であったのだとすれば、『吾輩は猫である』の影響
力は『阿Q正伝』にも及んでいるという認識も可能となるわけである。

参考文献

日本語部

1. 浅野洋・太田登編（1991）『漱石作品論集成 吾輩は猫である』桜楓社
2. 伊藤虎丸（1983）『魯迅と日本人：アジアの近代と「個」の思想（朝日選書；228）』朝日新聞社
3. 榎本重男（1999）「二つの『狂人日記』（上）——ゴーゴリと魯迅の同題の作品について——」『人文社会科学院研究』39 早稲田大学理工学部・一般教育人文社会科学研究会
4. 河村民部（2000）『漱石を比較文学的に読む』近代文芸社
5. 柄谷行人（2001）『漱石論集成』平凡社
6. 北岡正子（2006）『魯迅 救亡の夢のゆくえ』関西大学出版部
7. 清水孝純（2002）『笑いのユートピア：「吾輩は猫である」の世界』翰林書房
8. 景慧（2005）「魯迅「狂人日記」の「語り」について ——物語論からの一考察」『野草』75 中国文芸研究会
9. 小田実（1992）『異者としての文学』河合文化教育研究所
10. 代田智明（2006）『魯迅を読み解く：謎と不思議の小説10篇』東京大学出版会
11. 周作人著 松枝茂夫訳（1940）『瓜豆集』創元社
12. 周作人著 水野正大訳（2002）『魯迅小説のなかの人物』新風舎
13. 高橋正雄（2004）「魯迅の『狂人日記』——被害妄想患者の心理——」『日本醫事新報』 No. 4192
14. 田中慶太郎（1939）『周作人随筆抄』文求堂
15. 夏目鏡子 松岡譲筆録（1928）『漱石の思い出』（『世界の人間像』第13）角川書店（1963）
16. 潘世聖（2002）『魯迅・明治日本・漱石——影響と構造への総合的比較研究——』汲古書院
17. 藤井省三（1985）『ロシアの影：夏目漱石と魯迅』（平凡社選書；87）平凡社
18. 藤井省三（2002）『魯迅事典』三省堂
19. 丸山卓三（1955）「魯迅“狂人日記”の迫真性 日本近代文学との比較」『文学研究』9 奈良学芸大学国語国文学研究会創刊号
20. 安田真人（1984）「魯迅『狂人日記』の象徴的な表現を糸口として」『二松学舎大学人文論叢』28 二松学舎大学文学会
21. 樊殿武（2004）『漱石と魯迅における伝統と近代』勉誠出版
22. 李国棟（1993）『魯迅と漱石：悲劇性と文化伝統』明治書院
23. 李国棟（2001）『魯迅と漱石の比較文学的研究：小説の様式と思想を軸にして』明治書院
24. 李長之著 南雲智訳（1990）『魯迅批判』徳間書店

25. 林叢（1993）『漱石と魯迅の比較文学研究』新典社

中国語部

1. 钱里群（2003）《鲁迅作品十五讲》北京大学出版社
2. 陈漱渝（1998）《鲁迅论争集》中国社会科学出版社
3. 高旭东（2001）《世纪末的鲁迅论争》东方出版社
4. 黄健（1996）《反省与选择：鲁迅文化观的多维透视》陕西人民教育出版社
5. 李长之（1943）《鲁迅批判》北京出版社（2002）
6. 李明（2002）《鲁迅自我小说研究》中南大学出版社
7. 刘柏青（1985）《鲁迅与日本文学》吉林大学出版社
8. 卢今（1996）《呐喊论》山西人民教育出版社
9. 陆耀东 唐达晖（1984）《鲁迅小说独创性初探》湖南人民出版社
10. 《鲁迅研究论文集》（1981）山东人民出版社
11. 谭君强（1999）《叙述的力量：鲁迅小说叙事研究》云南大学出版社
12. 汪晖（2000）《反抗绝望》河北教育出版社
13. 徐鹏绪（1986）《鲁迅小说理论探微》天津人民出版社
14. 徐中玉（1957）《关于鲁迅的小说、杂文及其他》新文艺出版社
15. 叶世祥（1999）《鲁迅小说的形式意义》作家出版社
16. 张福贵（1999）《惯性的终结：鲁迅文化结构的历史价值》吉林大学出版社
17. 钟敬文（1982）《关于鲁迅的论考与回想》陕西人民出版社
18. 周作人著 止庵校订（2002）《鲁迅小说里的人物》河北教育出版社